さな計を審らかにする者は必ず天下の大數を遺れるし、小物の選擇を誤らない者は大事の擧行に惑ふ。譬へば狸に牛を搏たせることが出來ず、虎に鼠を搏たせることの出來ない樣なものである。今、國內を平定し國外を併合し危國を存續させ亡國を復興させようとし道を直くし邪を正し煩を決し紛を理めることを志して居る人物に、宮中の禮式や室內の小事を行はせようとし、又、口先が上手で人を悅ばせる樣な事を言ひ鄕里の習俗に隨ひ卑しい衆人の耳目に逆らはない人物に、天下の權を與へ治亂の機を任せようとするのは、斧で毛を剪り刀で木を伐る樣なもので、皆其の宜しきを失ふものである。

人主は天下の目で視、天下の耳で聽き、天下の智で慮り、天下の力で爭ふから、號令が下に達し、民情が上に通じ、百官は治まり、群臣が歸するのである。喜んでも功の無い者を賞することなく、怒つても罪の無い者を罰することなく、賞罰が當を得て居るから、威厲が立つて廢せず、聰明は光らして蔽はれず、法令は明らかで煩はしからず、耳目は通じて閡からず、善惡の眞相は日に目前にあらはれて違ふことがない。それ故、賢者は其の智を盡くし、愚者は其の力を竭くし、德澤は徧く行渡り、群臣は勤勉して怠らず、近い者は其の天性に安んじ、遠い者は其の德に懷

くのである。此の樣な結果を得るのは、巧に人を用ひて己の才智に任せないからである。車馬に駕する者が足を勞せずして千里に達し、舟檝に乘る者が游泳を知らないでも江河を渡る樣なものである。人主の心は天下の知識衆人の能力を總べ盡くさうと思はないことはなく、群臣の志を達して忠を效すものは其の身を危くしないことは少ない。言ふことが是ならば卑賤の者の言葉でも棄てられないし、言ふことが非ならば高貴の人が廟堂の上で謀つたことでも用ひられない。事の是非は之を言ふ人の貴賤尊卑によりて判定すべきものではない。それ故、明主が群臣の計を聽くには位の卑い者の言を用ふることを羞ぢず、其の言ふ事が實行すべきものならば其の辯の拙いのを責めない。闇主は之とは違つて、親愛接近してる者なら邪曲不正でも之を見拔くことが出來ず、疏遠卑近な者なら力を竭くし忠を盡くしても之を知ることは出來ない。何か申上げる者があれば辭を以て之を困しめ、諫める者があれば罪にあてて之を誅する。此の樣にして海內を照らし萬方を治めようと思ふのは、丁度耳を塞いで淸濁の音を聽き、目を掩うて靑黃の色を視る樣なもので、遠く聰明を離れて居るものである。

法は天下の度量で人の準繩である。法を施くのは不法に法を加へる爲である。賞を設けるの

は賞すべき者に賞を與へる爲である。法が定まつた後其の規程に中る者は賞し、準繩に外れる者は誅するのであるが、尊貴なる者だからといつて其の罰を輕くはせず、卑賤なる者だからといつて其の刑を重くはしない。法を犯す者は賢者でも必ず誅せられ、度に中る者は愚者でも必ず罪せられることはない。此の樣に公平に法を行ふから、正道が通じて邪道が塞がるのである。昔時は役人を置くのは人民の放恣を禁ずる爲である。君主を立てるのは役人の專行を制する爲である。法典や禮義のあるのは君主の專斷を禁ずる爲である。人が放恣にすることが出來なければ道が勝ち、道が勝てば理が通じる。故に無爲に反る。無爲とは凝滯して動かないことではない。言行が自己から出ないことである。尺度でも音律でも夫夫本づく所があるが、法とても同樣である。法は義から生じ、親は衆が適する所から生じ、衆が適すれば人心に合するのであつて、此は治の要點である。故に本に通じる者は末に亂されず、要を覩る者は詳に惑はされない。法は天から墮ちて來た者でもなく、地から湧き出した者でもなく、人間から發した者で人が之に由つて自ら正すものである。それ故、己に有つても人の無いのを誹らず、己に無くても人に無いことを求めない。下に對して法を立てれば上の者も亦自ら之を修め、民に對して禁

止した事は己も身に行はないのである。所謂亡國とは君がないのではなくて法が無いのである。法を變ずるとは法が無いのではなくて、法が有つても用ひないから法がないのと同樣なのである。それ故、人主が法を立てると、先づ自ら法式模範を示すから令が天下に行はれるのである。孔子は「其の身が正しければ命令しなくも行はれ、其の身が正しくなければ命令しても從はれない。」と曰つた。上の者が自ら禁を犯さなければ令は民に行はれるのである。

聖主が世を治めるのは造父が車を御する樣なものだ。轡銜（たづなくつわ）で駟馬をそろへ、唇吻の刺戟で緩急をはかり、胸の中で頃合を考へて手に策を動かし、內は我が心に自得し外は馬の志に合する。それ故、進退れすば繩の如く直く屈曲すれば規の如く圓く、遠路を馳せても氣力に餘裕がある。是は誠に其の術を得たからである。是と同じ道理で、權勢は人主の車輿である。大臣は人主の駟馬である。體が車輿を離れ、手が駟馬の心を失つて危くない者は古も今もまだ無いことである。それ故、車と馬とが調和しなければ王良の樣な名人でも道を行くことは出來ない。君と臣とが協和しなければ堯や舜の樣な聖人でも世を治めることは出來ない。術を以て御すれば管仲や晏嬰の智も用をなさず、分を明らかにして示せば盜蹠や莊蹻の惡も行はれなくなる。

井桁に據つて井底を窺つたのでは視力の鋭い人でも其の瞳を見ることは出來ない。鏡を借りて之を寫して見ればどんな小さい所でもわかる。明主は耳目を勞せず、精神を竭くさず、物が來れば其の象を觀、事が來れば其の化に應じ、近い者は亂れず、遠い者は治まる。それ故、偶然の理に依らないで必然の道に從ふから、何を行つても失策がない。今、巧妙な御者は、馬の體は車と調和し、人の心は馬と一致するから、險岨を踰え遠路を馳せ進退周游して、意の如くならないことはない。然るに騏驥騄駬の樣な良馬でも、臧獲の樣な拙劣な者が之を御すれば、馬は却つて其の意の儘に奔走して人は之を制することが出來ないのである。故に世を治める者は其の自ら是とすることを貴ばないで其の非をなすことの出來ないのを貴ぶのである。故に「欲す可からしむる勿れ、求めざれと曰ふこと毋れ。奪ふべからしむる勿れ、爭はざれと曰ふこと毋れ。」と曰ふのである。此の樣にすれば、人材が擇ばれて公道が行はれることになり、材の餘る者も法度を超えず、材の不足な者も用に立つから、天下を一にすることが出來るのである。若し職事を顧みないで毀譽を聽き、公勞を顧みないで朋黨を用ひれば、奇材ある者が時を得て拔擢され、忠實に官職を務める者は進路を塞がれてしまふ。此の樣になれば國民の

風俗は亂れ、朝廷の功臣は相爭ふ樣になる。故に法律度量は人主が下を制する機關である。之を釋てて用ひないのは轡銜なしで馬を驅る樣なもので、群臣百姓が却つて其の上を侮弄するものである。それ故、術があれば人を制し術が無ければ人に制せられることになる。呑舟の魚が水を失へば螻蟻に制せられ、猨猴が木を失へば狐狸に擒にされるのは、其の居るべき處に居ないからである。人君たる者が其の守るべき所を釋てて臣下と爭へば、官吏は無爲を以て位を保ち、君の欲に從つて之に媚びる。それ故、人臣は智を用ひて其の上を佐けないで、却つて仕事を君に任せる樣にする。一體、富貴なる者が勞役に服し、事に通じてる者が事物を洞察する任に當り、驕恣なる者が恭敬を致すのは、其勢が君に及ばないからである。人君が材能ある臣下に任せないで好んで自ら仕事をすれば、其の智が日に困しんで自ら其の責を負ふことになる。治術が行はれなければ下を治めることは出來ないし、德行が墮れれば國內に命令することが出來ない。智は治をなすに足らず、威は誅を行ふに足らなければ、天下の萬民と接することは出來ないのである。人君の喜怒が心に形はれ嗜欲が外に見はれれば、官吏は正を離れて上に媚び、法を曲げて命に從ひ、賞する所は功に當らず、誅する所は罪に應ぜず、上下心を離して君臣相怨むことにな

る。それ故、官吏が主に阿つて、過があつても之を責めず、罪があつても之を誅さないならば、百官が紛亂して智者でも解くことは出來なくなる。毀譽が萌生して明者も見分けることは出來なくなる。本を正して自然に反らなければ、人主は愈〻骨が折れ、群臣は愈〻樂をする。是は料理人に代つて肉を切つたり、大匠の爲に木を斷る樣なもので、骨折損である。人が馬と競走すれば到底馬に及ぶことは出來ないが、車に上つて轡を執れば馬は人に使役されるのである。故に伯樂が馬を鑑定し、王良が御し、明主が乘れば、自ら御したり鑑定したりしないでも千里の遠くへ行くことの出來るのは、人の才を以て己の羽翼とするからである。それ故、人君は爲すことはなくて守る所がある。立つ所があつて好む所がない。爲すことがあれば讒が生じ、好む所があれば諛が起る。昔時、齊の桓公が味を好んだので、易牙が其の子を烹て之を餌とし、虞の君が寶を好んだので、晉の獻公は璧と馬とを贈つて之を釣り、胡の王が音樂を好んだので、秦の穆公は女樂を贈つて之を惑はした。是は皆利を以て人に制せられたのである。故に「善く建つる者は拔けず」と曰ふのは無形に建てることをいふのである。火は熱いが水が之を滅し、金は剛いが火が之を銷かし、木は强いが斧が之を伐り、水は流れるが土が之を遏める。唯造化だ

けは何物も之に勝つことは出來ない。故に、心中の情欲を外に出さないのを扃といふ。外部の邪惡を中に入れないのを塞といふ。中は扃し外は閉ぢれば何事も節度があり、外は閉ぢ中は扃せば何事も成就する。物を用ひないで初めて用ひることが出來るのである。精神は疲勞すれば散漫になり、耳目は過度に使へば役に立たなくなるものである。故に有道の士は想を滅し意を去り、心を清虛にして事物の至るを待ち、臣下に代つて言はず、臣下の仕事を奪はず、名に循つて實を責め、官吏に其の職を任せて己は何事も命令せず、督責はするが教示はせず、「不知」と「奈何」とを要道とするのである。此の樣にすれば百官は其の職を守つて政が澁滯することは無い。

權勢の柄を握つて居れば民を化することは容易である。衛の君が子路を使つたのは權勢が重いからである。齊の景公は晏嬰を臣とし、桓公は管仲を臣としたのは位が尊いからである。此の樣に怯者が勇者を服從させ、愚者が賢者を制御するのは權勢を託する所が勝つて居るからである。枝は幹よりも大きくなれず、末は本より强くなれないのは輕重小大の關係に制せられるからである。五本の指が臂に屬いて居る樣に、我が意の儘に搏つたり援いたり攫んだり挾んだ

りすることが出來るといふのは、小さな者が大きな者に屬くのを言ふのである。それ故、有利の形勢にある者は、持つ所は甚だ小さくも任ずる所は甚だ大きい、守る所は甚だ少なくも制する所は甚だ廣い。それ故、五尺の木は千鈞の屋を支へ、五寸の鍵は門の開閉を制するのは其の材の大小によるのではなくて、樞要の地に居るからである。孔丘や墨翟は先聖の術を脩め、六藝の論に通じ、口に其の言を述べ、身に其の志を行つたが、義を慕ひ風に從つて之が爲に服役する者は數十人に過ぎなかつた。若し天子の位に居らせたなら、天下は盡く儒墨となつたに相違ない。楚の莊王は其の使者の文無畏が宋で殺されたのを傷んで、袂を奮つて起つと、群臣が我も我もと附き從つて遂に宋の城下で戰爭をして國威を擧げたのは、權柄が重いからである。楚の文王や趙の武靈王は異樣の服裝をしたが國人は皆之に倣つた。若し普通の人がそんな服裝をすれば人から笑はれるに相違ない。一體善を好み正を樂しんで、何の制裁なくとも、行ふ所が自然に法度に中る樣な人民は、萬人の中に一人もないのである。必ず行へと命令して、之に從へば利があり之に逆へば害があることにすれば、少時の間に天下の民は皆其の法に從ふのである。故に劒の切先を握るならば北宮黝や司馬蒯蕢の樣な勇者でも敵に當らせることは出來ない

が、其の柄を握つて其の末を擧げれば凡庸の人でも勝を制することが出來る。今、烏獲や藉蕃の樣な力士に、後から牛の尾を牽かせても、牛は尾が切れても後へは行かないのは逆だからである。指程の太さの桑の枝で牛の鼻を貫けば十二三の童子でも率いて天下を巡ることが出來るのは順だからである。七尺の楫を以て船を左右することが出來るのは水を利用するからである。天子が言を發して、令することは行はれ、禁ずることは止むのは、衆を以て勢としてゐるからである。民の害を防ぎ民の利を開けば貯水池の水を流出した樣な勢で威が行はれるものである。故に流に循つて下れば至り易く、風を背負つて走れば遠くに達し易い。自然の勢に因るからである。齊の桓公は政を立てて肉を食ふ獸を畜はず粟を食ふ鳥を畜はず鳥獸を捕る網を用ひなかつた。此の三事を行つたので人民が悅んだ。殷の紂王は王子比干を殺したので一族の者が怨み、朝水を涉る者の脛を斷つたので萬民が叛いた。此の二事を行つたので遂に天下を失つた。故に、義は徧く天下の民を利することは出來ないが、一人を利すれば天下が靡き從ふ。暴は悉く天下の民を害するのではないが、一人を害すれば天下が叛き離れる。故に桓公は三事を行つて諸侯を九合し、紂王は二事を行つて殺されてしまつた。故に一擧一動は愼まなければならない。

人主が民に租税を課するには、必ず先づ其の歳の收入を計り、人民の蓄積を量り、豐年か凶年か餘があるか足りないかを知り、其の後に車輿衣食を取つて其の嗜欲に供へるのである。高臺層樓を建て列ねたのは麗しくないことはないが、人民に住居のない者があれば明主は之を樂しまないのである。肥肉や濃酒や甘脆な食物は美味でないことはないが、人民に食物のない者があれば明主は之を旨いとは思はないのである。平らな牀や細い蒲の席は坐心地がよくないことはないが、人民に生命の不安なものがあれば明主は之を安樂だとは思はないのである。故に古の人君の民事を憂ふる樣をいへば、國に饑ゑる者があれば食は味を重ねず、民に寒える者があれば冬でも裘を著ない程である。歳が登り民が豐になつて始めて樂器を鳴らし舞を奏し、君臣上下心を同じくして之を樂しみ、國に哀しむ者は一人もない。故に古の金石管絃は樂しみを宣べる者である。兵革斧鉞は怒を飾る者である。觴酌俎豆酬酢の禮は喜を效すのである。衰絰菅屨を著け辟踊哭泣するのは哀を明らかにするのである。此は皆情が內に充ちて外に像をあらはしたものである。亂世の人君は民に課税するのに、其の力を計らず、其の蓄積を量らず、男女は耕織の業に從事しても上の求めに供することが出來ず、勤勞しても財産は乏しく、君と

臣とが相病んで居る。故に人民は唇を焦がし肝を沸かし、今日の食物はあるが明日の貯はないのである。此の際になつて、始めて鍾を撞いたり、鼓を擊つたり、竽笙を吹いたり、琴瑟を彈じたりするが、是は丁度甲冑を被て宗廟に入り、羅紈を著て戰爭に行く樣なもので、樂の本旨を失つたものである。

人民の生業は一人の耕す處は十畝に過ぎない。中田の一年の收穫は一畝に四石を出ない。妻子や老弱が之によつて生活するのである。そして時に水旱災害の患があり、又租税や車馬兵革の費用を取られるのであるから、人民の生計は憂ふべきものである。天地の大計は三年耕せば一年の食が餘り、率ね九年で三年分の貯蓄があり、十八年で六年分の蓄積があり、二十七年で九年分の儲がある。水旱の災に遭つても人民は困窮して離散することはないのである。故に國に九年の蓄積の無いのを不足と謂ひ、六年の蓄積の無いのを憫急と謂ひ、三年の蓄積の無いのを窮乏といふ。故に仁君明主があつて下から取り自ら養ふに節度があれば、人民は天地の恩德を受けることが出來て饑寒の患に遇はない。若し貪主暴君があつて其の下を亂し、民財を絞り取つて無窮の欲を滿足させれば、人民は天地の恩澤に浴することは出來ない。食は民の本で

ある。民は國の本である。國は君の本である。それ故、君は上は天の時に因り、下は地の財を盡くし、中は人の力を用ひる。その爲に衆多の生類は成長し五穀は蕃殖するのである。民を教へて六畜を養育させ、時節に應じて植付をさせ、務めて田畑を修めて桑や麻を栽培させ、土地の肥墝高下に應じて之に適したものを作らせ、丘陵險阪等の五穀を生じない處には竹木を樹ゑさせ、春は枯木を伐り、夏は果物を取り、私は野菜や穀類を蓄へ、冬は薪や柴を刈らせて民の生活の資料に充てる。それ故、生きてる時は生活の資料に乏しくなく、死んでも尸を棄てるものはない。故に、先王の法は、獵をしても鳥獸の群を捕り盡くさず、麋鹿の子を取らず、澤を涸らして魚を捕らず、林を燒いて獵をせず、豺が獸を祭らない內は獸網を野に張らせず、獺が魚を祭らない內は魚網を水に入れさせず、鷹や隼が鳥を搏たない內は鳥網を谿に張らせず、草木の葉の落ちない內は山林を伐らせず、昆蟲が冬籠しない內は田に火を付けさせず、胎內の兒を殺させず、腹中の卵を探らせず、魚は長さ一尺に滿たなければ取らせず、蟲は一年經過しなければ食はせないのである。それ故、草木の生ずることは蒸氣の如く、禽獸の歸することは流泉の如く、飛鳥の歸することは煙雲の如くである。是はかうなる樣な道に從ふからである。故に、先王

の政をいへば、立春の後四海の雲が至ると領土の境界を正し、蝦蟇が鳴き燕が來ると道路を開通し、陰氣が百泉に降ると橋梁を修繕し、張の星が昏に南中すれば穀を種ゑることを務め、大火の星が南中すれば黍や豆を種ゑ、虛の星が南中すれば麥を種ゑ、昴の星が南中すれば收斂蓄積し、薪木を伐り、上は之を天に告げ、下は之を民に布くのである。先王が時に應じ備を修め國を富まし民を利し、空乏を滿たし遠人を懷ける道は完備して居るのである。それも目で見たり足を運ばせたりしたのではなくて、心が之を利することを欲したからである。之を利することを欲して心に忘れなければ、官能が自然に備はるものである。心には五官や四支のする仕事は何も出來ない。然るに動靜視聽が皆心を主とするのは心が之を利することを欲して忘れないからである。故に堯が善を行ふと善が多く至り、桀が惡を行ふと惡が多く來るのである。善が積めば功が成り、惡が積めば禍が極まる。

凡そ人のことを論ずれば、心は小さくありたい。志は大きくありたい。智は圓滿でありたい。行は方正でありたい。能は多くありたい。事は鮮くありたい。心が小さくありたいのは、患を未生に慮り、禍に未發に備へ、過を戒め愼み、其の欲を縱にしようとしないからである。志が大

きくありたいのは、萬國を兼ね包み、異俗を一齊にし、百姓を併せ覆うて一族を合せる樣にし、是非が集まつても其の中心となるからである。智が圓滿でありたいのは、循環運轉して終もなく始もなく、旁ねく四方に流通して淵泉の竭きざるが如く、萬物が並び興つても之に應和しないことはないからである。行が方正でありたいのは、直立して撓まず、素白で汚れず、困窮しても操を易へず、榮達しても志を肆にしないからである。能が多くありたいのは、文武が具備し、動靜が禮に中り、擧動廢置が悉く其の宜しきを得て背き戻る所なく畢く其の當を得ない者はないからである。事が鮮なくありたいのは、柄を執つて術を握り、要を得て衆に應じ、約を執つて廣を治め、靜に處て躁を持し、要樞を運らし、一を以て萬を合せることが、符節を合せる樣だからである。故に心の小さい者は微を禁じる。志の大きい者は容れない物はない。智の圓滿な者は知らない事はない。行の方正な者は行はない事がある。能の多い者は出來ない事はない。事の鮮い者は持する所が要を得て居る。古は天子が政を聽けば公卿は正し諫め、博士は詩を誦し、樂師は箴諫の語を諷誦し、下民は意見を上申し、大史は其の過を書し、大宰は其の膳部を徹するのであるが、それでもまだ不足だといつて、堯は敢諫の鼓を置いて之を擊たせ、

舜は誹謗の木を立てて之に善否を書かし、せ湯は司直の官を置いて曲を正させ、武王は戒慎の紐を立てて之を搖らせ、毫釐の過もしない樣に之に備へた。聖人は善に對してはどんなに小さくても用ひないことはない。過に對してはどんなに微細でも改めないことはない。堯舜禹湯文武は皆平靜にして天下の王となつた。當時は食時の樂を奏して食事をし、食を已める樂を奏して膳を下げ、食後には竈の神を祭り、行幸するにも巫祝を用ひず、鬼神も祟をせず、山川も禍を下さない程で、至貴と謂ふべき人であるのに、なほ戰戰慄慄として愈〻益〻慎しんで居るのである。此に由つて見れば聖人の心は小である。詩經に「惟れ此の文王。心を小にして翼翼。昭らかに上帝に事へ、聿に多福を懷く。」とあるのは、之を謂ふのであらう。武王は紂を伐つて、鉅橋にあつた穀物を出し、鹿臺にあつた金錢を散じ、忠臣比干の墓を封じ、賢人商容の里を表はし、湯王の廟に朝し、箕子の囚を解き、人民には各其の宅に居住させ、其の田を耕作させ、新故の別なく唯賢人を親しみ、其の所有でなかつた物を用ひ、其の臣民でなかつた者を使つて居ながら、平然として舊くから已の者であつた樣な風である。此に由つて觀れば聖人の志は大である。文王は徧ねく得失是非を觀て、堯舜二帝の昌えた所と桀紂二王の亡びた所とを明堂に畫き

表はして、是によつて知識見聞を博めて萬方の事物に應じた。此に由つて觀れば聖人の智は圓滿である。成王康王は文武二王の業を繼ぎ、明堂の制を守り、存亡の迹を觀、成敗の變を見て、非道は言はず、非義は行はず、言は苟も出さず、行は苟も爲さず、善を擇んで後に事に從つた。此に由つて觀れば聖人の行は方正である。孔子は萬事に通じて居て、智は萇弘に勝り、勇は孟賁を服し、足は狡蒐に及び、力は城門を擧げる程であるから隨分多能である。けれども勇力も聞えず、伎巧も知られず、專ら孝道を行つて素王となつたから、隨分事が鮮いのである。春秋二百四十二年の間に、亡びた國が五十二、弑せられた君が三十六あるが、孔子は其の善類を取り醜類を去つて、王道を成したから、其の論ずる所も隨分博い。けれども、匡で圍まれても顏色も變らず、絃歌して止まなかつた。死地に臨み危難を犯しても、義に據り理を行つて慴れない程だから、本分も隨分明らかにして居つたのである。魯の司寇となつて訟を聽けば必ず衆と共に裁斷し、春秋の書を作れば鬼神を說かず、己の意を專らにしなかつた。聖人の智は固より多いけれども其守る所は簡約である。故に行へば必ず榮える。愚人の智は固より少ないけれども其のする事は多い。故に動けば必ず窮する。吳起や張儀は其の智が孔子や墨子に及ばないの

に萬乘の君と爭つたから車裂にされたり支體を分解されたりしたのである。正を以て敎化することは容易で必ず成功するが、邪を以て巧に世に處することは困難で必ず失敗するものである。凡て事を行ひ主義を立てる者が、成り易い事を捨てて困難で必ず失敗する事に從ふのは、愚惑の致す所である。上に述べた心は小さく志は大きく智は圓滿に行は方正に能は多く事は鮮くの六行に反する行をすることはよく考察しなければならないのである。

偏く萬物を知つても人道を知らなければ智とは謂はれない。偏く群生を愛しても人類を愛しなければ仁とは謂はれない。仁者は其同類を愛する。智者は惑はすことは出來ない。仁者は罪人などを斬る際でも忍びない樣子が顏に表はれる。智者は煩難な事に出遇つても、之を處理して心の闇くない效驗があらはれる。心で思ひやつて人情に反り、己の欲しないことは人に對してもしない樣にし、近きに由つて遠きを知り己に由つて人を知るのは仁と智とが合して行はれる所である。小さい者が敎へられるから大きい者が保存され、小さい者が責められるから大きい者が安寧なのである。唯惻隱の心を推して之を行ふことは智者の獨行ふことである。故に仁と智とは相差ふことがあり相合する事がある。合するのは正道であり、差ふのは權道であつて、

其の意義は同一である。府吏は法を守り、君子は義を制する者であるが、若し法を守るのみで義を制することがなければ、君子も府吏と同一で、政治をする資格はない。耕すことは苦しい事であり。織ることは煩はしい事であるが、人民が之を止めないのは、之によつて衣食を得ることを知つてるからである。人として衣食なしでは居られない。衣食を得る道は必ず耕織に始まることは萬民の一般に知る所である。耕織の様に始は甚苦しいが終には必ず利のある者は澤山あるけれども愚人の見る所は少ない。權るべき事は澤山あるけれども愚人の權る所は少ない。此が愚者に患が多い理由である。之に反して智者は、備ふべき者は盡く備へ、權るべき者は盡く權つて居る。此が智者に患が寡い理由である。故に、智者は先に逆つて後に合するが、愚者は始に樂しんで終に哀しむのである。「今日何をすれば榮利があるか、明日何をすれば榮利があるか。」此か。」此は口で言ふことは易い。「今日何をすれば義であるか、明日何をすれば榮利があるか。」此を心に知ることは難い。瞽者に向つて「白は如何な者か」と問へば「縞然」と答へ、「黑は」と問へば「黝然」と曰ふが、白と黑とを持つて來て之を示せば區別がつかない。人は白黑を視るには目を用ひ、白黑を言ふには口を用ひるが、瞽者は白黑を言ふことは出來るが白黑を知つては居な

い。故に白黑を言ふことは人と同じでも、人の様に白黑を區別することは出來ない。入つては親に孝を盡くし、出でては君に忠を盡くすことが義であることは賢者も愚者も皆知つて居る。忠と孝とを實行させれば、實行できる者は極めて少ない。凡そ人の思慮は先づ可いと思つて後に之を行はない者はない。だが其の是とする者が非であることがある。此が智者と愚者との異なる所である。凡そ人の性は仁より貴い者はなく、智より大切な者はない。仁を質とし智を以て之を行ひ、仁智を本として、之に勇力・辯慧・捷疾・自制・巧敏・犀利・聰明・審察を加へれば衆益が盡く得られる。身體も未だ長じないのに伎藝が悉く備はり、仁と智とが根柢となつて居ないのに衆美を加へれば其の損を益すものである。故に、不仁であつて腕力が强いのは狂亂して利劍を操るのと同様である。不智であつて口前が上手なのは、良馬に乘つて惑ひ歩くのと同様である。材能があつても用ひ方が惡ければ僞を輔け非を飾るだけのことで、伎藝の多いのよりは却つて少ない方がましである。故に野心のある者には便利な勢力を借してはならぬ。愚質のある者には便利な道具を與へてはならぬ。

魚は水を得て游げば樂しむが、隄防が切れて水が涸れれば螻や蟻に食はれてしまふ。隄防を修

繕して水の漏れない様にする人あればが、魚は之を利とする。國には之を存在させる者があり、人には之を生存させる者がある。國を存在させるものは仁義である。人を生存させる者は善を行ふことである。國に仁義がなければ大國でも必ず亡び、人に善心がなければ勇者でも必ず傷(やぶ)れる。國を治めることは上から命ぜられなければ出來ることではない。父母に孝に、兄嫂に弟に、朋友に信なることは上の命令がなくとも出來ることである。自分に出來ることを釋(す)てて出來ない事を責めるのは誤つて居る。士の卑賤で民間に居る者が榮達しようとするならば、必ず先づ已の身に反求して其の本を修めなければならぬ。榮達するには道がある。名譽が起らなければ榮達することは出來ない。名譽を取るには道がある。友に信ぜられなければ譽を得ることは出來ない。友に信ぜられるには道がある。親に事へて悅ばれなければ友に信ぜられない。親を悅ばすには道がある。身を修めて誠がなければ親に事へることは出來ない。身に誠があるには道がある。心が專一でなければ身に誠があることは出來ない。この様に道は誰にも出來る様な容易い處にあるのに却つて直には得られない様な困難な處に求めたり、效驗は近く已の身の上にあるのに却つて遠く他人の上に求めたりするから、得られないのである。

第十　繆稱訓

道德仁義聖人君子等に關する短文を集めたもの

道は至高、至深、至平、至直、至圓、至方である。宇宙を包容し天地と合同して表裏の差別なく何等の障礙もない。それ故に、道を體得した人は哀まず、樂しまず、喜ばず、怒らず、坐つてる時も思慮することなく、寢て居る時も夢を見ることなく、事物が外から來れば之に應じて識別する。

人主は國の心である。心が治まれば、百事が皆安く、心が擾れれば百事が皆亂れる。故に心が治まれば身體に工合の悪い處がなく、國が治まれば君臣の間に心配がない。黄帝の語に「芒芒昧昧、天の德に從ひ、元氣と同一になる」とある。故に至德ある者は言ふことは要點をはなれず、行ふことは本旨にたがはず、上下心を一にして、岐路へそれたり傍見をしたりする者なく、邪に行く道を塞ぎ止めて善に行く道を開き導くから、民が正しい道に向ふのである。故に易に「同人、野に于てす、大川を涉るに利あり。」とある。能く人と心を同じくして公平無私なれば大難に臨んでも害を受けないのである。

道は萬物を導くものであり、德は性情の扶る所である、仁は恩を積んだ效果の顯はれることであり、義は人心に從つて衆の適する所に合することである。故に、道が滅びて德が用ひられ、

德が衰へて仁義が生じる。故に、上世は道に順つて德によらず、中世は德を守つて壞ることなく、末世は唯仁義を失はない樣にと力めて居る。

君子は仁義がなければ生存出來ない。仁義を失へば生存の理由を失ふのである。小人は嗜欲がなければ生存出來ない。嗜欲を失へば生存の理由を失ふのである。故に君子は仁義を失ふことを懼れ、小人は利を失ふことを懼れる。其の懼れる事柄を觀ると、それぞれ異なることがわかる。易に「鹿を逐つて案内者なしに林の中に入つても、鹿が捕れないばかりではなく、危難に遇ふかもしれないから、君子は鹿を逐ふことは止める方が好い。若し往けば辱を受ける」とあるのは、君子が利を逐はないことをいつたものである。

施すことが厚ければ報いられることも美しい。怨まれることが大きければ禍を受けることも深い。少し施して多くの報を得、大怨を身に積んで患に遇はない者は、古にも今にも無いことだ。それ故、聖人は過去を察して將來を知るのである。

聖人の道は四辻に酒樽を置いて通行人に飲ませる樣なものだ。多く飲む人も少く飲む人もあるけれども、各適宜の量を取るのである。それ故、一人の滿足を得る方法は百人の滿足を得る

方法になる。人が上の人に望む所を以て下の人と交はれば、誰からも推戴される。下の人に望む所を以て上の人に事へれば誰からも歡心を得る。詩經に「玆の一人を愛すれば愼德が之に應ずる」とある。愼德は大なるものであり、一人は小なるものである。能く小に善なれば、能く大にも善なのである。

君子は君の過を見て已の罰を忘れる。故に能く諫める。人の賢を見て其の賤を忘れる。故に能く讓る。他人の不足を見て已の貧を忘れる。故に能く施す。誠が中に在つて行が外に見はれるのである。凡そ、行が誠から出れば過失があつても人から怨まれない。誠から出なければ、忠實でも惡い結果を生じる。后稷は廣く天下を利したけれども、自ら矜らず。禹は功を廢することもなく財を廢することもないけれども、自身を足りないものと思つてる。滿ちても陷けたるが如く、充實しても空虛なるが如くするのは、誠を盡す者である。

人といふものは其の悅ぶ所を賢として、快とする所を悅ぶものだ。何れの世でも賢人を擧用しないことはないのに、或は治まり或は亂れるのは、自已を欺く爲ではない。已と同じ者を求めるからである。已が賢人でもないのに、已と同じ者を求めて賢人を得ようとしてもむづかし

いことだ。堯に舜を度らせるなら可いが、桀に堯を度らせるなら、升で石を量る樣なものだ。今狐を狸だと謂ふ者があれば、其の者は必ず狸を知らないのだ。未だ狐を見たことのない者ではないとしても、必ず狸を見たことのない者だ。狐と狸とは同類であるけれども、狐を狸と謂へば、狐狸を知らないのである。それ故、愚者を賢だと謂へば、必ず賢者を知らないのである。

聖人が上に在れば民は其の治を樂しみ、下に在れば、民は其の意を慕ふ。小人が上位にあるのは人が關門の上に寢かされ、生繭が日に曝された樣なもので、須臾も安寧を得られないのである。易に「馬に乘つて進退が困難なので血の涙を流す」とあるのは、小人が處るべからざる地位に在れば長く居られないことを言つたものである。

如何なる物でも何かの役に立つ。天雄や烏喙は藥の中の凶毒なものであるが、良醫は之を用ひて人を活かす。侏儒や瞽師は人の中の困憊したものであるが、人君は之を用ひて音樂をさせる。それ故、聖人は材の足らぬものでも皆適處に置いて之を用ひるのである。

勇士が一呼すれば三軍が皆辟易するのは、心に誠があるからである。故に、唱へても和する

者なく、上が意つても民が行はないのは、必ず心が合はないのである。故に、舜が席を降ることなくて天下を匡したのは、先づ己を匡したからである。故に、上の者が小細工をすれば、民に詐が多くなる。身が曲つて影の直なものはないのである。

説明で通じない所は容貌で通じる。容貌で通じない所は感應で通じる。心に感じ、智によつて明になり、發して形を成すのは精の至である。形勢を以て接すべきもので、明に告げることの出來るものではない。戎翟の馬は、皆馳驅することが出來るが、御する人によつて或は近くに止まり或は遠くに至る。唯造父のみが能く其の力を盡くすのである。三苗の民は皆忠信ならしめることが出來るが、教育する人によつて或は賢ともなり、或は愚ともなる。唯堯舜だけが能く其の美を濟すのである。必ず他に傳へられぬ微妙な所があるのである。中行繆伯といふ人は、虎を手で搏殺すけれども生かすことは出來ない。力は十分あつても、之を服するだけの德がないからである。

百人から能力を認められる人を用ひれば百人の力を得、千人から愛せられる人を擧げれば千人の心を得る。譬へば樹を伐つて其の本を引けば千枝萬葉が自然に從つて來る様なものだ。

慈父が子を愛するのは、報いられようといふ爲ではない。愛さずには居られないからである。聖人が民を養ふのは、之を用ひようといふ爲ではない。養はずには居られないからである。火が熱を生じ氷が寒を生じる様なもので、故意にするのではない。其の力を恃み其の功を賴むに至つては、舟中に火事を起す様なものだ。故に君子は始を見て終の成行を知るのである。媒妁人から譽められても人は有り難いとは思はない。勞働させる爲に强ひて飯を食はせれば、雇人は愛せられたとは思はない。親父慈母でも同樣である。何か爲にする處があれば、恩は行はれない。故に、往者を送るは來者を迎へる爲ではない。死者に施すのは生者の爲ばかりではない。己に誠があれば感應は遠くまで及ぶのである。

錦繡を被て廟に入るのは文を貴ぶのである。圭璋を前に置くのは質を尙ぶのである。文が質に勝らないのを君子と謂ふ。故に終年車を造るも、三寸の鍔が無ければ、之を運轉させることは出來ない。工匠が戸を作つても、一尺の鍵がなければ、閉鎖することが出來ない。故に君子は行の終結を思ふのである。

心の精なる者は神化することは出來るが教へて知らせることは出來ない。目の精なるものは

解釋することは出來るが明に告げることは出來ない。混冥の中に在つて人に諭すことが出來ないのである。故に舜は席を下らずして天下が治まり、桀は陛を下らずして天下が亂れた。心の誠の感應は叫呼大語するより甚しいものがあるからである。已がして居ないで人に要求して成功した例は古も今も無いのである。

他人と同じことを言つても民が之を信じるのは、言ふ以前に信が行はれて居るからである。他人と同じことを命令しても民が之に化するのは、命令以外に誠が在るからである。聖人が上に在れば民が遷つて之に化するのは情が已に存在して居るからである。君が上に動いても民が下に應じないのは情と令とが異なるからである。故に、易に「亢龍悔あり」とある樣に、人君は上に居て活動が行詰まつて後悔してるのである。生れて三月の赤子はまだ利害を知らないのに、慈母の愛のわかるのは情によるのである。故に、言の作用は小さなもので不言の作用は大きなものではないか。

君子の言を行ふのは信である。君子の意を守るのは忠である。忠信が內にあれば、感動が外に應じる。故に禹が干と戚とを執つて東西兩階の間で舞はせたら、三苗が服從した。鷹が川の

上を翔れば、魚類は深く沈み、鳥類は高く飛び去つて必ず害に遠さからうとする。

世間には父の爲に死ぬ子があり、君の爲に死ぬ臣があるが、之は死んで名譽を求める爲ではない。恩愛の情が中にあつて、君父の難義を見棄てることが出來ないのである。故に人が君父の爲に甘んじて死に就くのは故意ではなくて自然なのである。君子が痛み悲しむのも形をするのではなくて人情の自然に基くのである。外から入るのでなくて內から出るのである。義が君を尊ばせ、仁が父を親しませるのだから、君は臣に對して已の爲に死にもさせ生きもさせることは出來ても、一寸した行ひ易いことをさせることは出來ない。父は子に對して孝心を起させることは出來ても、父母を思ふ心を止めることは出來ない。故に、義が君に勝ち、仁が父に勝てば、君は尊くて臣は忠に、父は慈しみ子は孝になるのである。

聖人が上に在れば民を化育することは神の如くである。太上の世には、民は君の德化を知らないで、「我が性の自然のままに生活してる」と曰つてる。其の次の世には、民は「君から治められて此の樣に生活してる」と曰つてる。故に詩經に「轉を執ること組の如し」と曰ひ、易に「章を含みて貞なるべし」と曰つてゐる。之は車上で轉を執つて車下の馬を御することが、此方

で織れば彼方に組糸が出來る樣であること、美を身に藏して貞正にして職事を終ることを述べたもので、近きに動いて文を遠きに成すのである。夜間に行ふ所を觀ても、周公は己の影に慙ぢる樣なことはしない。故に君子は獨を愼むのである。身を修める樣な手近い事を釋てて化育を遠きに及ぼさうと求めれば必ず失敗する。善を聞くのは容易だけれども、身を正すことは困難である。孔子は禾が粟から苗になり穗になるのを見て「狐は丘の方を向いて死ぬ。我は禾に向はうか」と歎じて曰つたが、之は禾が穗を垂れて根に向ひ本を忘れないからである。故に君子は善惡を見れば其の身の善惡自在なのを痛むのである。身が正しければ遠人を懷けることは容易である。故に詩經に、「躬らせず親らせざれば、庶民信ぜず」とある。

小人が何かするには利得を考へる。君子は義理を考へる。求めるといふことは同じだが、求める物が違ふ。舟を水中に進めると、魚は沈んで、鳥は飛揚する。同じ櫂の音を聞いて異なる動作をするが、驚駭の情は同一である。

僖負羈は亡命の公子に食物を獻じて、後に表彰され、趙宣孟は餓人に乾肉を與へて、後に其身の災難を免れた。是等は禮物は少ないが恩德を感ずることは甚深いのである。仁心に動かされる

と之を感謝して強い情を起すものであるから人の心に入ることも深いのである。同じ呼聲でも、一家の長老が發すれば、厚恩を受けたと思はれ、債權者が發すれば、喧嘩になる。故に「意志程慘害を生ずる武器はない。之に比べれば莫邪(寶刀の名)などはなまくらだ。陰陽程大きな寇はない。軍隊などは小さなものだ。」と曰はれて居るのである。

聖人が善を行ふのは、名を求める爲ではないが、名が付き從ふ。名は利を求めないが利が付いて來るのである。故に憂も喜も自ら求めるのではなくて自然に生ずるのである。故に至德の人は容を飾らない。芥が入れば眼を撫で、跌けば足が地に據る樣に自然に內から發するのである。聖人の政治は漠然として賢つた所は見えないが、終に至つて初めて大なる效果がわかるのである。日の行くが如くで、如何なる名馬も之と遠きを爭ふことは出來ないのである。

闇夜に物を求めれば盲人と同樣で何もわからぬが、夜があければ日が照らす。動いて益を求めれば損が伴うて來る。故に易に物は剝落しても盡きないで復生ずることを述べて居る。

薄いものを積めば厚くなり、卑いものを積めば高くなる。故に君子は每日勉强して名譽を輝かし、小人は每日悅樂に耽つて辱を取る。其の消息は離朱の樣な視力の强い人でも分らない。

文王は善をば及ばざるが如くに追求し、不善をば禍の如くに恐れた。日日の善が足りないからではない。憂ふる心が深いから結果を推察してさうしたのである。故に詩經に「周は舊い邦だけれども、文王に至つて新に天命を受けた」といつてる。

情を懷き質を抱けば、天も殺すことが出來ず、地も埋めることが出來ない。名聲は天地の間に揚り、日月の光に配する。情と質とを甘樂するものである。苟も善に向へば、過があつても怨まれない。苟も善に向はなければ、忠であつても患を招く。故に人を怨むより自ら怨み、人に求めるより己に求めるが可い。聲は自ら召び、貌は自ら示し、名は自ら命じ、文は自ら掌るので、皆己から出て居る。鋭い刄物で刺されたり擊たれたりしたとて、何で他人を怨むことがあらう。故に齊の宰相として法を明らかにし刑を審らかにした管仲は文錦の如きもので、醜くとも廟に升る資格がある。鄭の宰相として恩を先にして法を後にした子產は練絹の如きもので、美しいが尊くはない。虛にして能く滿ち、淡くして味の有るのは、褐を著て玉を懷く者である。故に兩心になれば一人の心を得ることも出來ない。一心になれば百人の心を得ることが出來る。男子が蘭を植ゑても美しくはなるが芳しくはならない。繼子が食を得ても、肥えはするが光

澤がない。情が通じないからである。

生は道の假宅である。死は道の本宅である。故に衞の弘演は仁を守つて死に、楚の王子閭は刄を受けても志を曲げなかつた。假宅の爲に本宅を害はないのである。故に世が治まれば義を以て身を衞り、世が亂れれば身を以て義を衞る。死ぬ日は行の終である。故に君子は愼んで專ら此の道を行ふ。かの勇無き者は初から懾れるのではない。困難に遇つて其の操守を失ふのである。貪婪なる者は初から欲するのではなく利を見て其の害を忘れるのである。故に至道の人は、心が定まつて居て、何に出會つても變へることは無い。世人が榮譽を欲するのは己の爲にするので他には何の益をも與へない。聖人が義を行ふのは中心の深い憂から出るので、己を利する所は少しもない。故に帝王は多いが三王が獨稱せられ、貧賤な者は多いが、伯夷が獨擧げられるのである。貴を聖とするならば聖者は衆い。賤を仁とするならば仁者は多い。然るに眞の聖者仁者は何と少ないことだらう。之は己を修める方法を誤つてるからである。獨專ら道を修める心持は誠に樂しいものだ。日に己の德を新らしくして、老衰の身に及ぶのを忘れるのである。少弟から長兄の樣に成長するのも積んだ結果である。人は自身を欺かなければ他人を欺

くこともない。故に一本橋を渡る時の様に人が見て居なくても恐れ慎まないことはない。故に人に己を信じさせることは易いが、衣の中の自分を信じることは難い。

人君が情を以て民を導けば命令が行はれて澁滯することなく、民が快く思ふ。故に、堯舜の政治の仕方は情に背かないから己の快い様にしても天下が治まるのである。桀紂のは正しい仕方でなくて民を害ふものであるから、己の快い様にすれば百事が廢するのである。要するに民が喜ぶか憎むかは治亂の分れ目である。

聖人の行は初から合ふ所もなく、離れる所もない。譬へば、鼓が調子を合せなくとも、何にでも合ふ様であり、絃管金石等の樂器が大小長短の次第があり聲を異にしても相和し、君臣上下の官職に差別はあり仕事は相異してもよく調和を保つてる様である。帛を織る者は前へ前へと進み、田を耕す者は後へ後へと退くものであるが仕事をすることは同一である。

甲喜は乞者が歌ふのを聞いて、悲しんで出て視たら己の母であつた。艾陵の戰に吳王夫差が「吳の聲は陽だから戰に勝つだらう」と曰つたことがある。同じ聲でありながら聽く人に與ふる感じの異なるのは情によるのである。故に心が哀めば歌つても樂しくない。心が樂しめば哭しても哀しくない。孔子も閔子騫が喪を終つて後琴を彈いたのを聞いて、「絃は元の通りだが、聲は違ふ」と曰つた。

文は外物に接する手段である。情は中に在つて外に發せんとするものである。文を以て情を滅せば情を失ひ、情を以て文を滅せば文を失ふ。文と情とが通じれば鳳凰や麒麟も來るといふのは至德が遠人を懷け來すことを言ふのである。輸子陽は其の子に向つて「良工は矩（さしがね）矱（ものさし）（法度）の中で習ふものだ」と曰つた。矩矱の中には如何なる物も備はつて居る。聖王が民を治め、造父が馬を治め、醫駱が病を治めて有名なのも、皆矩矱の中から取つて來たのである。

工の意が動くと民が之を行ふのは心に誠があるからである。未だ言はないのに信じ、招かないのに來るのは誠が已に通じてるからである。人が己を知らないからといつて苛立つものは己自らを知らないものである。功を貪り物に驕る心は己を知る事の足らぬ爲に起り、外を飾り人を欺く心は功を貪る爲に起るのである。心に誠ある人は樂しんで急がず、鵠が聲を好んで鳴き熊が養生法を好んで運動する様なもので、自然の性に從ふので、徒に務めるのではない。

春の女は思ひ、秋の男は悲しむので、物の變化がわかる。號んで哭し、噦（けせ）んで哀しむので聲

の變動がわかる。容貌顏色屈伸曲直を見て眞僞がわかる。故に聖人は心に之を懼れて至極の道に至るのである。

功名の成し遂げられるのは天運である。理に循つて逆らはないのは人の道である。大公望や周公旦は天が武王の爲に造つたのではない。崇侯や惡來は天が紂の爲に生じたのではない。聖王の世だから賢人が出、暴君の世だから惡人が出たのである。

敎化は君主の仕事で人民は其の澤を被り、營利は人民の仕事で君主は其の功を享けるのである。昔時、東戸季子の世には道に物が遺ちて居ても拾つて取る人はなく、鋤鍬や餘糧を畦畔に置いても盜む人はなく、君主も人民も各宜しき所を得たのである。故に一人の君主が德を行つて慶福を得れば億兆の人民が其のお蔭を蒙るのである。

凡そ高い者は左を貴ぶ。故に下が上に對するには上を左にすると曰ふ。臣が辭するのである。下い者は右を貴ぶ。故に上が下に對するには下を右にすると曰ふ。君が讓るのである。故に上が臣の左へ遷れば其の尊ぶ所を失ひ、臣が君の右に還れば貴ぶ所を失ふ。

小を樂めば道を害し、近くを見れば義を害する。子產は刑書を作つて人から詰責されたが、

之を行つた。訟獄の多いに拘らず、下に邪惡な者が生じなかつた。之は誠があつたからである。誠のない者は世人に詰責されれば行はれなくなつてしまふ。

國を治める道は、工は仕事を僞らず、農は力を吝まず、士は行を隱さず、官は法を失はず、網を張る者が綱を引くと總ての目が皆開く樣でなければならぬ。

舜は堯から命ぜられ、禹は舜から命ぜられて天子となり、更に天から命ぜられることはなかつた。堯舜は大德があるといはれて居るが、之は已に小さな行に現はれて居るのである。妻を愛する心を兄弟に及ぼし、國家を他人に傳へて天下が德風に化したのである。故に軍は大を以て小を知り、人は小を以て大を知るのである。

君子の道は近いが至り難い。卑いが登り難い。萬物を載せて能く之に任へる。大きくて章(あきらか)に、遠くて隆(さかん)である。此を知る法は、人に求めないで己に得ることだ。己をおいて人に求めれば到底知ることは出來ない。

君子は樂が餘あつて名が足らず、小人は樂が足らずして名が餘あるものである。「餘ある」と「足らず」との距離は甚大なるものである。

口に含んだ物は必吐き出され、心に思つてる事は必外に現はれる。君子は義を思つて利を慮らず、小人は利を貪つて義を顧みない。孔子が曰つた。「人の死を哭するのに、或者は『もはや、何んとも致方がない』といひ、或者は『どうして我を棄てたのか』といふ。哀情は同じでも、哀しむ心が違ふ」と。故に哀樂は人の心と深く關聯して居るのである。世には池を掘る人もあり、池を埋める人もある。只民を勞苦させるばかりではなく、各其の行ふ所に從つて亂が起る。己の心を行ふ點は君子と同一だが、人に及ぼす結果は異なるのである。故に堯舜は日日勉め勵んで王となつた。桀紂は日日逸樂に耽つて身を亡ぼし、後世の人から譏られることを知らなかつた。

人は苦しむ所を去れば樂しみ、樂しむ所を失へば哀しむものである。故に生の樂を知れば必ず死の哀を知る。

義ある者は利を以て欺くことは出來ない、勇ある者は懼を以て劫すことは出來ない。饑渴する者を何も容れてない器で欺くことが出來ない樣なものだ。人は欲が深ければ義を缺き、憂が多ければ智を害し、懼が多ければ勇を妨げる。

嫚（をこり）は小人から起る。蠻夷の人は皆之を行ふ。善は君子から起る。日月と光を爭ふ程美しく、天

下を以てするも之を止ることも奪ふことも出來ない。故に治國は其の存續する樣な事を樂しみ、亡國は其の滅亡する樣なことを樂しむのである。

金錫は鎔解しなければ鑄型に流し込むことは出來ない。人君が深く國を憂へても誠がなければ民に法を行ふことは出來ない。深い憂が民の上に及んで居ないのは民を繫ぐ方便をすてたものである。人君が本に反れば民を繫ぐことが固くなるのである。

至德の君は小節も備はり、大節も擧るものである。齊の桓公は大節はあるが小節がない。晉の文公は小節はあるが大節はない。晉の文公は閨內は修まつたが境外が亂れた。齊の桓公は閨內は亂れたが朝廷は治まつた。

水は下へ下へと流れて廣大になり。君は臣に下つて聰明になる。君が臣と功を爭はなければ世が治まる。管仲や百里奚は經營して功を成し、桓公や穆公は二臣の謀を聽いて之を用ひたのである。惑を曉るのは東を指して西といつて居たのを日を見て寤る樣なものである。衞の武侯が其の臣に向つて「汝等は我を老人だとし、我を劣者だと見限つてはならぬ。過があれば必ず之を告げよ。」といつた。武侯が若し自ら劣つてると思はなければ必ず劣つてしまふのである。

故に九十五の老人になつても修養をやめなかつたのである。存亡の理に通じたものである。

人は作すことは出來ないが爲すことは出來る。爲すことは出來るが成すことは出來ない。爲すのは人だが成すのは天である。人が終身善を爲すも、天によらなければ行はれない。終身不善を爲すも、天によらなければ亡びない。故に善不善は我のことだが禍福は我のことではない。故に君は己に在ることを行ふだけである。性は天から受けたものである。命は時に遭つて得るものである。材があつて不遇なのは天である。太公望は何も力が勝れたわけではない。比干は何も罪があつたわけではない。性に循つて行動したのに、一方は害にあひ、一方は利を得たのは、之を求めるには道があるけれども、之を得るのは天命によるからである。故に、君子は能く善を爲すが、必ず福を得るとはいはれない。不善を爲すに忍びないが、必ず禍を免れるとはいはれない。

君は根本である。臣は枝葉である。根本が美でないのに枝葉の茂るものはない。有道の世には人を國に與へるが、無道の世には國を人に與へる。堯は天下の主となつて憂が解けなかつたが、舜に天下を授けて初めて憂が釋けた。憂へてもなほ天下を守つて賢人に與へることを樂しんで

は終に其の利を私することはなかつた。

萬物は使へばどんな小さな物でも役に立つ、用途を知らなければ寶玉でも糞土となる。

人情として、害は小さいことを望み、利は大きいことを欲する。故に同じ味の中で厚く切つた肉を嗜む者は必ず之を甘いとする者であり、同じ師に學んで群に超えてる者は必ず之を樂しむ者である。甘いともせず樂しいともせずして、特に目立つ者はないのである。

君子は、時を得れば進む。之を得るに義を以てする。得ても幸とは思はない。時を得なければ退く。之を讓るに義を以てする。失つても不幸とは思はない。故に伯夷は首陽山の下で餓死しても悔いない。其の賤む所を棄てて貴ぶ所を得たからである。

禍や福の始めて生ずる時は微細なものであるから、民は之を嫚る。唯聖人は其の始を見て其の終を知る。故に、魯から楚王に獻じた酒が薄かつた爲に趙の都の邯鄲が圍まれ、羊の羹を御者に與へなかつた爲に宋の國は危害を受けたと傳へられてゐる。

明主の賞罰は己の爲にするのではなくて國の爲にするのである。己の氣に入つても國に功がなければ賞を與へない。己に逆つても國に便なる者は罰を加へない。故に、楚の莊王は其の臣共

雍に向つて「徳ある者は吾が爵祿を受け、功ある者は吾が田宅を受ける。汝は徳も功もない。吾は汝に與ふる物がない。汝は之を道理に外れたこととは思ふまい。だから御免蒙むる。それでもなほ勉めようとしないか。」と曰つた。

周の政は道に至り。殷の政は善であり、夏の政は行はれて粗である。政を行ひ善を善として也必ず道に至るとは限らない。道に至る人は行はれることを願はず、善に對して慙づることなく、徳を含み道を履んで上下相樂しむが、如何してさうなるのだかは知らずに居る。

國を有する者は多いが、齊桓・晉文の二公が獨有名であり、泰山の上には七十二君を祭る壇があるが、三王だけが言ひ傳へられて居る。君が臣に求めたわけでもなく、臣が君に假したわけでもなく、近く己の身を修めて其の徳が遠方に達し、後世の人が其の偉大なることを稱揚するのである。隣里を離れないでも其の徳は明らかに表はれ、誰も及ぶ者がないのである。故に誰でも殷の高宗の子の孝己の樣に禮を守ることは出來るが、孝己の名を奪ふ者のないのは孝己の樣な徳が無いからである。

義を行つて時宜に適するのが君子であり、時宜を行つて義を忘れるのが小人である。道に達

した人は得て勞せず、其の次は勞して病まず、其の下は病んで勞しない、古の人は味を知るが食を貪らず、今の人は食を貪るが味を知らない。

歌は音聲を長く引くが、音聲は其の美を致すに足らないから、金石絲竹の伴奏があつても風を移し俗を易へる極致に達することは出來ない。人が能く道を尊び義を行つて喜怒取予するならば、草の風に靡くが如くに民が化せられる。

召公は桑蠶耕種の時に獄を弛め囚人を出して、人民が皆正業に反り職を修めることの出來る樣にさせた。文王は方千里の大國を辭退して炮烙の刑を除くことを願つた。故に聖人が事を行ふのは進退其の時を失はず、夏絺綌を著、車に乘る時に綏を授ける樣だと謂はれるのである。

老子は商容に學び、舌を見て柔を守ることを知つた。列子は壺子に學び、影の曲直は形によることを觀て後を持することを知つた。故に聖人は物の先とならずして常に物を制する。丁度薪を積む樣なもので、後から來たものが上に置かれる。

人は義を以て愛し、黨を以て群し、群を以て强いものである。故に徳の施される所が博ければ、威の行はれる所も遠く、義の加はる所が淺ければ、武の制する所も小さい。

鐸は聲を出す爲に自ら破り、蠟燭は光を出す爲に自ら融け、虎豹は皮の美くしい爲に射殺され、猨狖は動作の敏捷の爲に刺殺される。子路は勇があつた爲に死に、萇弘は智があつた爲に困しんだ。知を智とするが不知を智とすることが出來ないからである。故に險を行くには繩の樣には歩かれず、林から出るには直な道はない。夜道を行くには目を瞑いで手を前へ出す。是は事の便宜に從つて目を用ひないのである。人は能く冥冥を貫いて昭昭に入れば與に至道を語ることが出來るのである。

鵲は其の年の風の多少を知つて巣を作り、獺は其の年の水の高下を知つて穴を穿る。鳩の雄は晴天を知つて鳴き、鳩の雌は陰雨を知つて鳴く。是を觀て人智が鳥獸に及ばないといふならば當らない。故に、一伎に通じ一辭に精しければ、之を詳說することは出來るが、廣く萬事に應ずる事は出來ない。

甯戚が牛角を擊つて歌つたので、齊の桓公が擧げて政を授けた。雍門子が哭して見えたので、孟嘗君は涕を流して纓を沾した。歌や哭は誰にも出來ることだが、一度聲を發して人耳に入り人心を感じさせたのは情の至れる者である。故に、唐虞の法は效ふべきも、其の人心を諭す點

其の聲を聽及ぶことが出來ないのである。

齊の簡公は柔懦の爲に田成子に殺された。鄭の子陽は勇猛であつた爲に刼かされて死んだ。皆其道を失つた者である。故に、歌つて律に合はないのは聲が淸濁の一に偏するからである。繩の外と繩の內とは何れも直でないのである。

紂が象牙の箸を作つたので箕子は之を嘆いた。魯で偶人を作つて死者と共に葬つたので孔子は之を嘆いた。始を見れば結果がわかるからである。故に水は山から出て海に入り、稼は野に生じて倉に藏められる。聖人は發生する所を見れば歸著する所を知る。水が濁れば魚が喰ぐ、法令が苛酷ならば民は亂れる。城が高ければ必ず崩れ。岸が峻しければ必ず落ちる。故に、「商鞅は苛酷な法を立てて五躰を切り離され、吳起は嚴重な法を行つて車裂にされた。

國を治めるのは瑟の絃を張る樣なものだ。大絃が急ならば小絃は切れる。故に、轡を急にし屢策うつのは千里を御する法ではない。

有聲の聲は百里を過ぎないが、無聲の聲は四海に達する。是の故に、祿が其の功に過ぎれば身を損し、名が其の實に過ぎれば德が蔽はれる。情と行とが合すれば名が之に伴ふ。禍も福も

其の實なくして徒に來るものではない。身に惡夢があつても、正しい行には勝てない。國に妖祥があつても善い政には勝てない。是の故に、前に官位の賞譽があつても、功がなければ取ることは出來ない。後に刑罰の禁令があつても罪がなければ蒙ることはない。素より正を修める者は道を離れない。

君子は爲すに足らぬものとして小善を捨てる樣なことはない。小善が積めば大善となるのである。差支ないとして小不善を行ふ樣なことはない。小不善が積めば大不善となるのである。是の故に、羽を積めば舟が沈み、輕いものでも、集まれば車軸が折れる。故に、君子は微を禁ずるのである。一の快事は善を成すには足りないが快事を積めば德となる。一の恨事は非を成すには足りないが、恨事を積めば惡となる。故に、三代の王の善は千歲の積譽であり、桀紂の惡は千歲の積毀である。

天に四時があり、人に四用がある。何を四用といふか。視て形を知ることは目より明らかなものはなく、聽いて之を明らかにすることは耳より聰なものはなく、重ねて之を閉ぢることは口より固いものはなく、含んで之を藏することは心より深いものはない。目は其の形を見、耳は

き、口は其の誠を言ひ、心は之が精を致せば、萬物の化は悉く極處に達する。

地が德を以て廣く、君が德を以て尊ければ上である。地が義を以て廣く、君が義を以て尊ければ下である。故に、純粹なる者は王となり、駁雜なるものは覇となり、一もない者は亡びる。昔時、二皇の世には鳳が庭に至り、三代には門に至り、周室には澤に至つた。德が粗になる程至る所が遠くなる。德が精になる程至る所が近くなる。

君子は誠に仁であつて、施す時も仁、施さない時も仁である。小人は誠に不仁であつて、施す時も不仁、施さない時も不仁である。我から善を行ふのと人の善を行ふのを助けるのとは仁德の盛なる者である。故に情が欲に勝てば昌え、欲が情に勝てば亡びる。

天道を知らうとするには律曆の數を察する。地道を知らうとするには其處に生える植物を物色して見る。人道を知らうとするには其の欲を檢べて見る。

驚かさず駭かさずにおけば萬物は自然に淸む。撓(みだ)さず攖れずにおけば萬物は自然に理まる。

一事を察する者は與に化を語り難い。一時を審にする者は與に大を語り難い。日は夜を知ら

ない。月は晝を知らない。日や月は明るくするけれども晝夜を兼ねることは出來ない。唯天地は能く之を容れる。能く天地を包むのは唯無形な者だけである。

驕溢の君には忠臣が無い。口上手の人には必信がない。一抱もある木には一握位の小枝はない。小さな溝には呑舟の大魚は居ない。根が淺ければ末が短く、本が傷つけば枝が枯れる。

禍は無爲から生じ、患は多慾から生じ、害は備へない爲に生じ、穢は除かない爲に生ずる。聖人は善をなして及ばないことを恐れるが如く、禍に備へて免れないことを恐れるが如くである。塵を蒙つて目に入らないことを欲し、水を涉つて濡れないことを望んでも、それは出來ない相談である。それ故、己を知る者は人を怨まず、命を知る者は天を怨まない。禍福は皆己から生ずるものである。聖人は譽を求めず、誹を避けず、身を正しくし行を直くして衆邪が自然に息むのである。今、正を釋てて曲を追ひ、正に倍いて衆に從ふならば、是は俗と竝び走つて內行を正すことがないのである。故に聖人は己を反りみて衆に從はないのである。

篇章形埒のある樣な道は、至道ではない。至道は、嘗めても味なく、視ても形なく、人に傳へることの出來ないものである。

大戟といふ藥は水氣を去り、亭歷といふ藥は腹の脹るのを癒やすが、之を用ひて分量回數を誤まれば反つて病を起すものである。物には似て非なるものが多いので常人は誤るが、唯聖人は其の微細な所を知つて居る。

善く御する者は其の馬を忘れず、善く射る者は其の弩を忘れず、善く人の上となるものは其の下を忘れない。誠に能く愛して利を與へるならば、天下でも從へることが出來る。愛しもせず利を與へもしなければ、眞の子でも父に叛く。

天下に至貴なるものがあるが、それは勢位ではない。至富なるものがあるが、それは金玉ではない。至壽なるものがあるが、それは千歲ではない。心に原づき性に反れば貴い。情に適し足るを知れば富む。死生の分を明にすれば壽である。

言が常に是しいことなく、行が常に宜しいことのないのは小人である。一事に審に一伎に通じてるものは中人である。萬物を兼ね蓋うて之を併有し、能を度つて裁制して之を使ふ者は聖人である。

第十一　齊俗訓

四方の俗萬物の理は一道に歸することを述べたもの

性に率つて行ふのが道である。其の天性を得るのが德である。性が失はれて仁を貴び、道が失はれて義を貴ぶに至つた。故に、仁義が立つて道德が去り、禮義が飾られて純樸が亡び、是非が形はれて百姓が惑ひ、珠玉が尊ばれて天下が爭つた。此の四者は衰世に造られ末世に用ひられた者である。禮は貴賤尊卑を差別するもの、義は君臣父子兄弟夫妻朋友の間を和合せるものだ。今日、禮を行ふ者は恭敬を粧うて人を害ひ、義を行ふ者は施して恩に著せ、君臣相誹り、骨肉相怨む。之は禮義の本を忘れた者である。故に、こしらへごとで責むべき所が多いのである。水が積もれば共食ひをする樣な大魚が生じ、土が積めば自ら穴を掘つて住む獸を生じる樣に、禮義が飾られれば善を僞り惡を慝す人を生じるのは當然である。古は人民が蒙昧で何も知らず、實質以上に外貌を修めず、實行以上に言葉を飾らず、其の衣は煖を取るでけで文采はなく、其の兵器は鈍くて刄がなく、其の歌は樂しむだけで曲折がなく、其の哭は哀しむのみで單調であり、井を掘つて飲み、田を耕して食ふのであるから、美を施す所もなく、亦求めもせず、親戚間にも朋友間にも毀譽恩怨といふものがなかつた。然るに禮義が生じ、貨財が貴ばれる樣になると、詐僞や毀議や恩怨等が起つて來た。そこで、曾參や孝己の樣な美しい行があり、

之に對して盜跖や莊蹻な樣な邪惡な行が生じたのである。故に一方に美しい車馬を馳せる者があれば必ず一方に諸種の盜賊がある。一方に美しい衣服を纏ふ者があれば必ず一方には貧しい生活をする者がある。高い者があれば下いものがあり、短いものがあれば長いものがあるのは明らかなことだ。

蝦蟇は鶉になり、水蠆は蜻蛉になる。皆異類のものになるが、唯聖人は其の化する理を知つて居る。北方の胡人は麻の實が布にならうとは思はないし、南方の越人は毳が毛氈にならうとは思はない。故に物に通じない者とは化の話は出來ない。昔太公望と周公旦とが周から領地を受けて後、出會つた時、太公が周公に魯を治める方法を問うた。周公が「尊を尊とし親を親とす」と答へると、太公は「魯は此から弱くなるだらう」と曰つた。周公が太公に齊を治める方法を問うと、太公は「賢を擧げて功を上ぶ」と答へたので、周公は「後世必ず劫殺される君があるだらう」と曰つた。其の後齊は日に大きく、終に霸となり、二十四世で田氏に奪はれた。魯は日に削られ、三十二世で亡びた。故に易に「霜が降つてから堅い氷がはる」と曰つて居るが、聖人は物の終始の微なる處を見るものだ。子路が溺者を救つて牛を謝禮に貰つたので、孔子は、「魯では

必ず好んで人を患から救ふだらう」と曰つた。子貢が魯人が他國に捕はれたのを贖戻して國庫の支辨を辭したので、孔子は「魯國では人を贖戻す者が無くなるだらう」と曰つた。子路は貰つて徳を勸め、子貢は辭して善を止めることになつた。孔子の明は、小を以て大を知り、近を以て遠を知つた。論に通ずる者である。此に由つて觀れば、廉といふことも何處でも行はれるものではない。故に、行は俗に一致すれば隨はれ、事は誰にも出來る事ならば爲し易い。矜り僞つて世を惑はし高尙な行をして衆に違ふ樣なことは、聖人は民俗とはしない。

大厦高樓は人の安居する所だが、鳥は之に入れば憂ふる。高山深林は虎豹の樂しむ所だが、人が之に入れば畏れる。川谷深淵は龜鼉の便とする所だが、人が之に入れば死ぬ。咸池・九韶等の音樂は人の樂しむものだが、鳥獸が之を聞けば驚く。峭岸峻木は猿狖の樂しむ所だが、人が之に上れば慄(おそ)れる。形が異なり性が違へば、樂しむ所は却つて哀しむ所となり、安は却つて危となる。然るに天地の覆載する所、日月の照臨する所に至つては、各其の性に便に、其の居に安んじ、其の宜しきに處り、其の能を爲させる。故に愚者にも餘あり、智者にも不足がある。柱は楊枝にはならない。簪は支柱にはならない。馬には重荷は曳かれぬ。牛は速くは驅けられ

ぬ。鉛は刄にはならぬ。銅は弩にはならぬ。鐵は舟にはならぬ。木は釜にはならぬ。各適する所に使用すれば、萬物は皆一樣で、優劣はない。明鏡は形を照らすに便だが、食物を容れることは簞に及ばない。牛の雜毛なき者は犧牲(いけにえ)にするには可いが、雨を降らせることは黑螟に及ばない。此に由つて觀れば、物に貴賤はない。貴ぶべき事に因つて貴べば何でも貴くなり、賤しむべき事に因つて賤しめば何でも賤しくなる。

玉璞(たま)は厚を厭はず、角觝(つの)は薄を厭はず、漆は黑を厭はず、粉は白を厭はぬ。此の四者は相反するが、其の必要なことは同一である。今蓑と蓑とはどちらが必要かといふに、雨が降れば蓑は用ひられず、家の中では蓑は著られない。それぞれ必要な場合があるのである。丁度舟は水を行き車は陸を行くのに宜い樣なものだ。故に老子が「賢を上(たつと)ばず」と曰つたのは、魚を木に上せ、鳥を淵に沈める樣な不自然な事を爲ない意味である。故に、堯が天下を治めた時は、舜が司徒になり、契が司馬になり、禹が司空になり、后稷が大田師になり、奚仲が工となつた。萬民を導くには、水邊の者には漁業を、山中の者には林業を、谷間の者には牧畜を、平地の者には農業をさせた。土地でも仕事でも道具でも人物でも、皆適所に用ひられ、互に有無を通じ工拙を易

へる様にさせたから、叛く者が寡くて従ふ者が衆かつた。

猿は茂つた木を得れば、之を舎てて穴に棲む様なことはなく、狢は堤防を得れば、之を去つて木に縁る様なことはしない。如何なる物も其の利とする所を避けて害とする所に就くことはしない。故に、隣國が近く鷄犬の聲が聞える程でも、互に往來しないのは皆各其の安んずる所を得て居るからである。故に、亂國は盛なるが如く、治國は虛なるが如く、亡國は足らざるが如く、存國は餘あるが如くである。虛とは人が無いのではなく、皆其の職を守つてるのである。盛とは人が多いのではなく、皆末を求めるのである。餘ありとは財が多いのでなく、欲が節せられ事が少ないのである。足らずとは貨が無いのではなく、民が躁いで費が多いのである。故に、先王の法令禁制は作爲したのではなく、因り守るものである。

凡て物を治めるには睦により、睦を治めるには人により、人を治めるには君により、君を治めるには欲により、欲を治めるには性により、性を治めるには德により、德を治めるには道による。人の蕪穢で清明になれないのは物が汚すからである。遠い外國の兒でも生れた時の聲は皆同じだが、生長すると言葉が通じなくなるのは、教化が異なるからである。今嬰兒を生後三月

で他國へやつてしまへば、故國の風俗を知ることは出來ない、此に由つて觀れば、衣服禮俗は人の性ではなくて、外から受けたものである。竹の性は浮ぶものだ。切つて札にして水に入れれば沈む。其の體を失ふからである。金の性は沈むものだ。之を舟に乘せれば浮ぶ。支へるものがあるからだ。素（しろぎぬ）の質は白い。涅で染めれば黑くなる。縑（かたこぎぬ）の質は黃だ。丹で染めれば赤くなる人の性は邪がない。久しく俗に沈めば易る。易れば本性を忘れて他の性になつてしまふ。故に日月は明を欲するも浮雲が之を蓋ひ、河水は清を欲するも沙石が之を穢し、人性は平を欲するも嗜欲が之を害する。唯聖人は能く物を遺れて己に反る。舟に乘つて方角に迷つても北斗星を見ればわかる。性も人の北斗星だ。自ら性を見れば物の眞情を失はないが、見なければ行に惑が生じる。孔子が顏回に謂つて「我は汝に心服して汝を忘れ、汝も我に心服して我を忘れて居るが、汝はまだ忘れない者がある。」と曰つた。孔子は本を知つて居るのである。欲を縱にして性を失へば正しい行は出來ない。身を治めれば危く、國を治めれば亂れ、軍に入れば破れる。故に、道を聞かなければ性に反ることは出來ないから、古の聖王は能く性を自得して居る。故に、令することは行はれ、禁ずることは止み、名は後世に傳はり、德が四海に施くのである。それ故、

凡て事を行ふには必ず先づ意を平にし、神を清くする。さうすれば物の判斷が正しくなる。故に堯が舜を擧げた時は目で決し、桓公が寧戚を取つた時は耳で斷じた。是の例を見で他の方法をすてて專ら耳目に任ずれば、甚しい誤を生ずるだらう。耳目が正しく判斷するのは情性に反つた場合である。耳は毀譽に迷はされ目は文采に亂されて居ては正しい判斷を望むことは出來ない。哀しむ者は歌聲を聞いて泣き、樂しむ者は哭者を見て笑ふ。樂しむべき者に對して泣き、哀しむべき者に對して笑ふのは、心に哀樂の情があるからである。それ故、心は虛を貴ぶのである。故に、水が激すれば波が興り、氣が亂れれば智が昏む。智が昏めば、政は出來ない。水が波たてば平にはなれない。故に、聖王は一の性を執つて失ふことなく、萬物の情は知り盡くされ、四夷九州が服從する。この一の性なる者は至貴にして天下に敵がない。聖人は、此の敵無きものに託するから民命が繫るのである。

仁を爲す者は必ず哀樂を以て之を論じ、義を爲す者は必ず取予を以て之を明にする。目では十里以外は見えないのに天下の民の哀樂を遍く觀ようとしても不可能だ。天下の委財もなくて萬民の利を贍(ゆたか)にしようとしても不可能だ。且つ喜怒哀樂は物に感じて自然に生ずるものだ。故に

哭聲が口から出、涕が目から出るのは、心に感じて外に形れた者だ。水が下に流れ烟が上に升る樣なもので、誰も推すのではない。故に强ひて哭すれば、苦しんでも哀しくはない、强ひて親しめば笑つても和さない。情が中に發して聲が外に應ずるのである。故に禮物は豐富でも誠心がなければ愛を效すに足らず、誠心があれば禮物は貧弱でも遠きを懷けることが出來る。親を養ふ方法、盟の儀式、服裝、風習の如きも、外形は違つても內心は同一だ。故に四夷の禮は同じでないが、皆其の主を尊び其の親を愛し其の兄を敬する。獫狁の俗は相反するが皆其の子を慈んで其の上を尊嚴にする。鳥が飛んで行をなし、獸が處て群を成す樣なもので孰も敎へたのではない。故に、魯は儒者の禮を行ひ孔子の術を行つたが、地は削られ名は卑しく、近を親しみ遠を懷けることは出來なかつた。越王句踐は斷髮文身で、禮服を著禮容を整へなかつたけれども、吳王夫差を破つて天下の覇者となり、泗上の十二諸侯が九夷を率ゐて來朝した。胡貉匈奴の國人は體を氣儘に扱ひ、髮を亂し、足を出して坐り、他人の言に逆らう樣な無作法なことをしながら、國が亡びなかつたが、是等の國に全く禮が無いとはいはれない。楚の莊王晉の文公の如きは儒者の所謂禮裝はしなかつたが、遂に諸侯の覇となつて威を天下に振つた。鄒魯の禮の

みが禮だとは謂はれないのである。是の故に他國へ行けば其の風習に從ひ、他家へ行けば其の諱を避ける。禁を犯して入らず、背き逆らつて進まなければ、風俗の違つた國遠い國へ行つても困しむことはない。

禮は實の文であり、仁は恩の效である。故に、禮は人情に由つて之が節文をなし、仁は色に發して容に見られるものである。禮が實を過ぎず、仁が恩を超えないのが治世の道である。儒者の三年の喪は人力の及ばないことを強ひるのである。之は人工的に情を輔けるのである。墨者の三月の喪は哀を絶つて人情を短縮するのである。儒者墨者は人情の自然を考へずして、務めて人情に反する忌服の制を行はうとするものである。悲哀は情に從ひ、埋葬は養に稱ひ、人の出來ぬことを强ひず、人の爲ずに居られないことを止めさせなければ、其の度が程好くて、毀譽の生ずることはない。古人も儒者のする樣な繁雜な禮儀をすることを知らなかつたのではない。日を費やし民を煩はして何の役にも立たないから、唯實を佐け意を喩すに足るだけの禮を作つたのである。古人も儒者のする樣な繁雜な樂が出來ないのではないが、財を費し政を亂ると思つたから、唯歡を合し意を宣べるに足るだけの樂を制したのである。古人も儒者の樣に金をか

けて葬式を立派にすることが出來ないのではないが、民を困窮させ生業を休めるだけで死人に何の益もないから、唯屍を收めて之を埋藏するだけにしたのである。昔、舜が蒼梧に葬られた時、市場は營業を休まなかつた、禹が會稽山に葬られた時、農夫は耕作を休まなかつた。死生の分を明にし、侈儉の宜しきに適ずる者である。亂國は之に反して言と行とは相悖り、情と貌とは相反し、禮は飾つて煩はしく、樂は優美で度を過ぎ、死を崇んで生を害し、喪を長くして勝れた行とする。そこで、世の風俗は惡くなり、朝廷には毀譽が萠す。故に、聖人は此の樣な禮樂は用ひないのである。

義とは理に循つて宜しきを行ふものである。禮は情を體して文を制する者である。義は宜である。禮は體である。昔、有扈氏は義を行つて亡びた。義を知るも宜を知らないからである。魯は禮を治めて國が削られた。禮を知るも體を知らないからである。有虞氏の祀は、社には土を用ひ、中室を祀り、田畝に葬る。樂は咸池、承雲、九韶。服は黃を尙ぶ。夏后氏は、社には松を用ひ、戶を祀り、葬牆に翣を置く。樂は夏籥、九成、六佾、六列、六英。服は靑を尙ぶ。殷人の禮は、社には石を用ひ、門を祀り、葬むるとき松を樹える。樂は大濩、晨露。服は白を尙

ぶ。周人の禮は、社には栗を用ひ、竈を祀る。葬るとき柏を樹ゑる。樂は大武、三象、棘下。服は赤を尚ぶ。此の樣に禮樂も服制も相異なるが、親疎の恩上下の倫を失はない。今一君の法典を握つて、傳代の習俗を誹るのは柱に膠して瑟を調へる樣なものだ。故に明王は禮義を制し至德を行うて儒者墨者の說に拘泥しないのである。

所謂明とは彼を見るのではなくて自ら見るのである。所謂聰とは彼を聞くのではなくて自ら聞くのである。所謂達とは彼を知るのではなくて自ら知るのである。故に、身は道の托する所で、身が知り得られれば道は知り得られる。道を知り得れば、眼は明に、耳は聰に、言は公に、行は從ふ。故に、聖人が物を裁制するのは工匠が劃つたり鑿つたりし、料理人が切つたり分けたりする樣だ。曲に其の宜しきを得て折傷することはない。拙工はさうは行かない。或は大きすぎて入らず、或は小さすぎて寬く、手が心のままに動かないで益醜いものになる。聖人が物を劃るのは、剖いたり判けたり離したり散したりし、度を過ぎて宜しきを失へば、復、道を以て度るから、道を出ても復道に歸つて來る。雕琢されても遂に以前の素樸に反る。合すれば道德となり、離れれば義表となり、轉ずれば玄冥に入り、散ずれば無形に應じる。禮義節行などは至治

の本を窮められるものではない。然るに、世の物知り達は多く道德の本を離れて、「禮義で天下が治められる。」と曰ふが、此は治術を知らぬものだ。所謂禮義なる者は五帝三王の法令で、歷史上の遺物である。祭に使はれる芻狗や土龍が祭の時は人から尊敬されるが、祭が終れば誰も貴ぶものはないのと同樣だ。故に、舜は有苗を服する爲に、政を修め、兵を偃せ、干戚を執つて舞はせた。禹は、天下に大雨のふつた時、民に命じて土を聚め薪を積み丘陵を擇んで居らせた。武王は紂を伐つ時、文王の位牌を載せて行つた。天下がまだ定まらないから、三年の喪をしなかつたのだ。始め禹は洪水の患に遭ひ、陂塘の仕事があつたから、朝死ねば暮に葬ることにした。此は皆聖人が時に應じ變に遇ひ形を見て適宜の處置をしたのである。今戰爭をつとめて農業を笑ひ、三年の喪を知つて一日の喪を誹る樣なことをして萬化に應じようとするのは一絃を彈じて諸樂器を合奏させようとする樣なものだ。到底出來ることではない。

一世の變だけを知つて之を以て化に遇ひ時に應じようとするのは、丁度冬に葛を被て夏に裘を被る樣なものだ。一枚の衣では一年は過されない。寒暑に適したものを用ひなければならぬ。同樣に時世が異なれば爲る事も變る。故に、聖人は時世に隨つて法を立て事を行ふ。法と成

つた者に依らないで、法となる者に從ふ。法となる者は化と推移る者である。能く化と推移る者には至つて貴い所がある。故に、狐梁といふ名人の歌は眞似は出來るが、如何してさう歌ふのだか分らない。聖人の法は觀ることは出來るが、如何して法となるのだか分らない。かの王子喬、赤松子は、吹嘔呼吸して、故を吐き新を納れ、形を遺れ智を去り、素を抱き眞に反り、玄眇に遊び、雲天に通じるが、其の道を學ぶ者が其の氣を養ひ神を處する所を自得しないで、只其の氣を呼吸し體を屈伸する所をまねるならば、到底雲に乘つて升天することは出來ない。五帝三王は天下を輕んじ、萬物を小とし、死生を一とし、變化を同視し、大聖の心を抱いて萬物の情を鏡し、神明に交はり、造化と合するが、其の清明玄聖なる所を自得しないで、只其の法籍憲令を守るならば、到底治を行ふことは出來ないのである。故に十の利劍を得るよりも歐冶の巧を得る方が可い。百の走馬を得るよりも伯樂の術を得る方が可い。

樸の至大なる者は形狀がない。道の至微なる者は度量がない。故に、天の圓いのは規では計れない。地の四角なのは矩では測れない。往古來今を宙と謂ひ、四方上下を宇と謂ふが、道は其の間に在つて其の場處が分らない。故に、見る所の遠くない者とは大を語ることが出來ない。其

の智の廣くない者とは極を論ずることが出來ない。昔、馮夷は道を得て大川に潛み、鉗且は道を得て崑崙に處り、扁鵲は病を治め、造父は馬を御し、羿は射、倕は斲つた、爲る事は異なるが、道を得て居ることは同一だ。道を受けて物に通じてる者は他を誹らない。譬へば、同じ貯水池から田に漑ぐ樣なもので、どの田も鈞しく水を受ける。今牛を殺して其の肉を煮るのに料理の仕方は色色あるが其の本は牛の體である。楩柟豫樟等の木を伐つて之を引割つて色色の物に用ひるが、其の本は一木の樸である。故に、百家の言は趣旨は相反しても其の道に合することは同一である。三皇五帝は異なる法典を作つて居るが、其の民心を得ることは同一である。故に、湯は夏に入つて其の法を用ひ、武王は殷に入つて其の禮を用ひた。桀紂は之を用ひて亡びたが、湯武は之を用ひて治を致した。故に、木工や金工の道具を前に列べても良工でなければ木を制し金を治めることは出來ない。屠牛吐は一朝に九牛を屠つたけれども、其の刀で毛を剃ることが出來たし、庖丁は十九年間一刀を用ひたけれども、其の刃は礪いだばかりの樣であつた。是は衆虛の間に遊んだからである。かの規矩鉤繩の如き者は巧の具ではあるが、巧にさせるものではない。故に瑟に絃がなければ師文（樂人の名）でも曲を奏することは出來ない。けれども只絃を

張つただけでは悲しむことは出來ない。故に、絃は悲の具だけれども悲しませるものではない。工匠が種種の意匠を凝らし、冥冥の微、神調の極に入り、心手の間に遊んで物と一體になる樣な所、は父でも子に敎へることは出來ない。樂人が意を放ち物を相し神を寫し舞に喩へて絃聲にあらは、す手段は、兄でも弟に告げることは出來ない。準は水平にする道具、繩は直線を作る道具であるが、準繩以外に於いて水平にし直線を作る樣なことは獨得の妙處で他人と共有することの出來ぬ技術である。瑟の宮の絃を彈いて宮の音が出、角の絃を彈いて角の音が出るのは、同音が相應ずるので當然なことであるが、五音を合せることなくて絃の二十五絃が皆律に應じて鳴る樣な事は人には傳授出來ない道である。故に蕭條は形の君であり、寂寞は音の主である。

天下の是非は一定したものではない。世人は各其の是とする所を是とし、非とする所を非とする。所謂是と非とは各異なるのに、皆己を是として人を非とする。此に由つて觀れば、己に合ふ事はあるが、始から是なる事はない。心に逆ふ事はあるが、始から非なる事はない。故に、是を求める者は道理を求めるのではなく己に合ふ者を求めるのであり、非を去る者は邪曲を去

るのではなくて心に逆ふ者を去るのである。我に逆つても人に合はないとは限らず、我に合つても俗に逆はないとは限らない。至是の是には非がなく、至非の非には是がない。此は眞の是非である。彼と此とによつて是非を異にする者は一是一非である。此の一是非は隅曲であるが、夫の一是非は宇宙である。今吾は是を擇んで之に居り、非を擇んで之を去らうとしても、世の所謂是非はどれが是でどれが非なのだか分らない。例へば、老子は「大國を治めるのは小魚を烹る樣に、あまり手を加へるな。」と曰ふ。寛裕な者は「屢民を撓すな」と曰ふ。苛酷な者は「民を苦しめろ」と曰ふ。晉の平公が道に外れた事を言つたので、師曠が琴を擧げて之を撞くと、公の衣の衽を破つて壁に中つた。左右の者が壁を塗らうとした時、平公が、「よせ、吾が過失の紀念にしよう」と曰つた。孔子が之を聞いて、「平公は其の體を痛まないのではないが、諫者を招かうと思つたのだ」と曰つた。韓子は之を聞いて、「群臣が禮を失しても誅さないのは、過を縱すのだ。平公が覇者にならないのは當然だ」と曰つた。客が人を宓子に引き逢はせた。其の人の去つた後、宓子が「あの人には三の過がある。我を望んで笑つたのは慢るのだ。談話に師のことを言はないのは反くものだ。交が淺いのに言の深いのは友道を亂すものだ。」と曰つた。客

は之に對して、「君を望んで笑ふのは公である。談話に師のことを言はないのは理に通じてるのである。交が淺いのに言が深いのは忠である。」と曰つた。逢つた人の容體は同一であるのに、或は君子とされ、或は、小人とされるのは、人の所見が異なるからである。故に、心が合へば、言が忠なら益々親まれ、身が疏んぜられれば謀が當つても疑はれる。實母が子の爲に頭の瘡を療治して血が耳迄流れても、見る者は愛の至情だと思ふ。若し繼母ならば、見る者は皆惡んだ爲だと思ふ。事情は同一でも人の見方が異ふのである。だから身を正しくして物に接しようとしても、世人が己を如何に觀るかわからない。若し自ら轉化して世の是非に隨つて行かうとすれば、雨を避けようとする樣なもので、何處へ行つても濡れないことはない。

常に虛に居らうとすれば虛となることは出來ない。虛になることを勉めないで自然に虛であることは、望んでも出來ることでない。故に、道に通ずる者は車軸の自ら運轉せずに轂と輿に無窮の野を行くが如くであるが、道に通じない者は路に迷つた樣なもので、方角を敎へられれば其の場だけは分るが、一曲りすれば忽ちまた分らなくなつて迷ひ出すのである。故に、終身人に隷屬して、風見(かざみ)の樣に暫時も靜まることはない。故に、聖人は道を體して性に反り、自ら化せ

ずして自然の化を待つから世の難を免かれるのである。

治世には、職は守り易く、事は爲し易く、禮は行ひ易く、責は果し易い。故に、一人一官、一官一事で、士農工商は鄕を別にし州を異にする。故に、農は農と力を言ひ、士は士と行を言ひ、工は工と巧を言ひ、商は商と數を言ふ。故に、皆各其の職を務め、各其の性に安んじて他を干すことはない。故に、伊尹が土功を興した時は、脛の長い者には鍤(すき)を蹋(ふ)ませ、脊の强い者には土を負はせ、眇(すがめ)者には水準を視させ、傴(せむし)者には地を塗らせた。各適所があつて人の性は齊しく之に安んずるものである。胡人は馬を便とし越人は舟を便とする。形を異にし類を殊にするものが、仕事を易れば順當には行かない。處を失へば賤しくなるが、勢を得れば貴くなる。聖人は總て之を用ひるがその手段は同一である。

先知遠見して千里を達視するものは人才の隆んな者であるが、治世には此を民に求めない。博聞强記口辯辭給は人智の美なる者であるが、明主は此を下に求めない。世に傚り物を輕んじ俗に汚されないのは士の高い行であるが、治世には此を以て民を敎育しはしない。自然に移動開閉する器具を造り彫刀の迹も留めないのは人工の妙であるが、治世には此を以て民業とはしな

い。故に、萇弘や師曠は先づ禍福を知り、言に遺策なく、公孫龍は析辯抗辭して同異を別ち堅と白とを離すけれども、此の様な人は民衆と同様に扱ふことは出來ない。北人の無擇は舜を誹つて自ら清冷の淵に投じたが、此を世の手本にすることはできない。魯般や墨子は木で鳶を作つて飛ばせたら三日も飛んで居る程の技巧があつたが、工人にすることは出來ない。故に、何事でも高過ぎて常人の及ばない様な者は一般の標準にはならないから、至人は務めない。物を手に載せて重量を精密に計る人があつても、聖人は之を用ひないで衡に懸ける。目で視て高低を精密に測る人があつても、明主は之に任せないで準を用ひる。人才は專用されないが、器械は世傳されるからである。故に、國政は愚人と守るべきもので、軍制は權を用ふべきものである。驥・騄・驁・飛兔の如き名馬に車を引かせようとすれば、世、車に乘ることは出來ない。西施や毛嬙の様な美人を妻にしようとすれば、終身妻は得られない。然るに古の勝れた者を得ないでも人人が不足を感じないのは、有る者を用ひて居るからだ。騏驥は一日に千里を走るが、駑馬でも十日かかれば千里に達する。之に由つて觀れば、人才は恃むに足らぬもので道術は公行すべきものである。亂世の法は標準を高くして及ばぬ者を罪し、責任を重くして勝へない者を罰し、禁制を

嚴にして從はぬ者を誅する。民が此に困しむから、智を飾つて上を詐り、邪を犯して免れることを求める。故に、峭法嚴刑を設けても其の姦を禁ずることは出來ない。力が足りないからである。故に、諺に「鳥が窮すれば喙で噣く。獸が窮すれば角で突く。人が窮すれば詐る」と曰ふのは、此を謂ふのである。

道德の論は譬へば日月の如きものだ。何處へ行つても其の趣旨、其の位置に變化はない。禮義に從ふのは家に棲む様なものだ。東家は之を西家と謂ふが西家は之を東家といふ。どんな賢人でも其の位置を定めることは出來ない。故に、同じことをしても、俗によつて毀譽を異にし、時によつて窮達を異にする。湯・武の累行積善は企及ぶべきも、桀・紂の世に遭つたのは天の授けである。今湯武の意があつても桀紂の時がなければ覇王の業は出來ない。昔、武王は紂を伐つ時には武を用ひたが、殷に勝つて後は文を用ひた。之は故意に變じたのではなく、時に應じたのである。周公は殷民が叛いた時、之に加擔した兄を放ち、弟を誅したが、之は不仁なのではない。亂を正したのである。故に、世に周き事を行へば功成り、時に合する事を務めれば名が立つ。昔、齊の桓公は平時の車を以て諸侯を會合させ、國へ歸つて誅戮を行つた。晉の文公は

戰時の車を以て諸侯を會合させ、國へ歸つて禮義を行つた。けれども、命令は天下に行はれ、權威は諸侯を制したことは同一だつた。時勢の變を審にしたからである。顏闔は魯君が相としようとしたが之に應ぜず、先づ使をやつて物を贈らせた時、屋後の墻を穿つて遁げたので天下の名士となつたが、若し商鞅や申不害に遇つたら、己の身は勿論、三族を殺されたらう。世人は多く古の人を稱して其の行を高いとするが、同時代に同樣な人があつても之を貴ぶことを知らぬ。之は才が下るのではなくて時が宜しくないのである。故に、江河を濟るには良馬よりも舟の方が好い。居る處がさうさせるのだ。故に功を立てる人は行を簡んで時をよく考へる。

今世俗の人は功の成るのを賢とし、患に勝つのを智とし、難に遭ふのを愚とし、節に死するのを愚直とする。吾は各最善と信ずる所を行つたのだと思ふ。王子比干は箕子の樣に狂人を裝うて居れば其の身を全くすることが出來ることは知つて居るが、行を直くし忠を盡くして節に死することを樂しむから、爲なかつたのだ。伯夷叔齊は祿を受け官に任ぜられて功を立てることが出來なくはないが、世を離れ行を高尙にし衆と絕つことを樂しんだから務めなかつたのだ。今箕子から比干を視れば愚と見えるだらう。比干から箕子を視れば卑しく見えるだらう。管仲や

晏嬰から伯夷を視れば愚直と見えよう。伯夷から管晏を視れば貪ると見えよう。去就が異なり嗜欲が反するが、其各の務を樂しむのだから誰に之を正させることも出來ない。曾子が、「舟に掉さして水中へ出れば、鳥は之を聞いて高く翔り、魚は之を聞いて淵に藏れる。」と曰つた。故に行く所は各異なつても、皆便とする所を得て居るのだ。惠子は車百乘を從へて孟諸の澤へ行つたが尙不足を感じた。莊子は之を見て、少しの魚で滿足して殘りの魚を棄てた。智伯は三晉を取つても十分だと思はないが、林類や榮啓は蓑の樣な衣を被ても恨まない。是に由つて觀れば、趣く所が各異なるのだから、他を誹ることはできない。

生を重んじる者は利の爲に己を害せず、節を立てる者は難を見て苟も免れず、祿を貪る者は利を見て身を顧みず、名を好む者は義でなければ苟も得ない。若し互に議論させれば、氷炭曲直の如くで何時になつても合することはない。若し聖人を中に立てれば、之を兼ね併せて是非すべき者は無からう。飛鳥は巢に接み、狐狸は穴に宿る。人は其の主義とする所に棲宿する。各其の安んずる所を樂しみ、其の至る所を致すのを成人と謂ふ。故に道によつて論ずる者は、一切を總べて之を齊一にする。

治國の道は上は苛令を發せず、官は煩治を行はず、士は行を僞らず、工を技巧に馳せない。其の事は治まつて亂れず、其の器は完くして飾らない。亂世はさうではない。行は高尙なことを競ひ、禮は人爲を爭ひ、器物は裝飾を極め、得難い貨を求めて寶とし、煩苛な法を制して智とする。爭つて詭辯をなし久しく滯つて決しないから、治に益なく、工は奇器を作り歲を歷て成るが、實用にはならない。故に、神農の法には「男子が丁度壯年に達して耕さなければ天下に饑ゑる者がある。婦人が年に當つて織らなければ天下に寒える者がある。」と曰つてる。故に、神農は身自ら耕し、妻は親ら織つて天下の先導をする。民を導くには得難い貨を貴ばず、無用の物を使はない。故に、耕を勉めなければ食べて行かれず、織を力めなければ衣が著られず、有餘も不足も皆其の身から出ることになる。衣食が十分ならば姦邪が起らず安樂無事だから天下が太平である。故に、孔丘も曾參も其の善を施す所なく、孟賁も成荊も其の威を行ふ所がない。衰世の俗は其の知巧詐僞を以て多くの無用な物を飾り、遠方の貨を貴び、得難い財を珍とし、養生の具を積まず、天下の淳を薄くし、天下の樸を析き、牛馬を制御して牢を作り、萬民を攪亂して淸を濁とし。性命は飛揚して皆亂れ惑ひ、貞信は散佚して人は其の情性を失ふ。そ

こで、美くしい裝飾物が出で人の目を亂し、珍らしい飲食物は其の口を貪らせ、樂しい音樂は其の耳を淫し、去就や進退や禮節や謗議が其の心を惑はす。そこで、百姓は騷ぎ亂れ、暴行して利を求め、事は煩はしく情は薄くなり、法は義と違ひ、行は利と反して、管仲が十人來ても治められなくなる。且又貧富の懸隔が甚しく、人君と從僕どころではない。奇技に乘じ邪曲を爲す者は十分な生活が出來るが、正を守り理を修めて苟も得ることをしない者は饑寒の患を免れない。故に、末を去つて本に反ることを民に望むのは、原を發いて流を塞ぐ樣なものだ。且彫刻や刺繡などの贅澤品を作ることは男子の農業の妨になり、女子の機業の害となる。農業機業が妨害されるのは饑寒の本原である。饑寒が並び至つて、法を犯し誅を干さない者は古も今もない。故に、尊卑は時に由るもので行に由るものではなく、利害は命に由るもので智に由るものではない敗軍の卒は勇者も遁逃して踏止まることが出來ない。勝軍の兵は怯者も前進して走ることの出來ないのを懼れる。故に、河の隄防が切れて一鄕が沈まうとする時は皆我先にと高丘に馳上つて父子兄弟を顧みる遑はないが、世が安樂で心が太平ならば鄰國の人の溺れるのを見てさへも尙哀むのである。故に、身が安ければ恩は鄰國に及び、之が爲に身を捨てようと思ふ。

身が危ければ其の親戚をも忘れて不可解な行をする。游ぐ者が溺者を救ふことの出來ないのは、手足が己の爲に必要だからである。灼けた者が火を救ふことの出來ないのは己の身體が痛んで居るからである。民は餘あれば讓り、不足なれば爭ふ。讓れば禮義が生じ、爭へば暴亂が起る。門を扣いて水火を求めれば與へない人のないのは、十分有るからである。林中では薪を賣らず、湖上では魚を賣らないのは餘る程あるからである。故に、物が豐富ならば欲は少なく、求めが滿足されれば爭は止む。秦王の時國人が其の子を漬物にしたのは、利が不足したからである。漢が政を行つて、獨身者が孤兒を養つたのは財が餘る程あるからである。故に、世が治まれば小人も正を守り、利を與へても誘ふことができず、世が亂れれば君子も姦を行ひ、法を用ひても禁することが出來ない。

第十二　道應訓

例を擧げ老子の語を引いて物が道に應ずることをのべたもの

太清が無窮に問うた。「汝は道を知つてるか。」無窮「知らない」。又無爲に問うた。「汝は道を知つてるか。」無爲「知つてる。」太清「汝が道を知るにも亦術があるか。」無爲「有る。」太清「どんな術だ。」無爲「吾は、道が弱にもなり、強にもなり、柔にもなり、剛にもなり、陰にもなり、陽にもなり、冥にもなり、明にもなり、天地を包むこともでき、無方に應ずることもできるのを知る。此が吾が道を知る術だ。」太清は無始に向つて無窮及無爲との前の問答を述べて、無爲の知るのと無窮の知らぬのとの是非を問うた。無始は「知らぬのは深く、知るのは淺い。知らぬのは内で知るのは外だ。知らぬのは精で知るのは粗だ。」と曰つた。太清は仰いで嘆じて曰ふには「然らば知らぬのは知るのか。知るのは知らぬのか。誰も、知るのが知らぬので、知らぬのが知るのだといふことを知る者はない。」無始「道は聞かれない、聞けば道ではない。道は見えない。見れば道ではない。道は言はれない。言へば道ではない。誰も、形を形とするのは形ではないことを知る者はない。」故に老子は「天下の人が皆善の善たることを知つてるが、斯れは善ではない。故に知る者は言はない。言ふ者は知らない。」と曰つた。

楚の白公勝が「人は秘密の話をしても可いか」と孔子に問うた。孔子は白公が父の讐を復さうとして居るのを知つてるから、返事をしなかつた。白公「若し石を水に投ずれば如何します。」孔子「吳越の善く水に沒する者が之を取るでせう。」白公「若し水を水に投ずれば如何します。」孔子「蓄水と澠水とが合すれば易牙は嘗めて之を知ります。」白公「然らば人は秘密の言葉を使ふことはできないものでせうか。」孔子「如何してできないことがありませう。誰か言葉の意味を知る者がありますか。言葉の意味を知るものは言葉で言ひはしません。魚を爭ふ者は濡れ、獸を逐ふ者は走りますが、之を樂しむ者ではありません。故に、至言は言なく、至爲は爲すことのないものです。かの淺知の爭ふ所は末です。」白公は之の意味が分らなかつたから、浴室で殺された。故に、老子が「言には宗があり、事には君がある。これを知らないから吾を知らないのだ」と曰つたが、白公の如き者を謂ふのである。

惠子が梁の惠王の爲に國法を作つた。出來上つて諸先生に示すと、皆善いと曰つたから之を惠王に奏した。惠王は悅んで、之を翟煎（くきせん）に示すと、善いと曰つた。惠王「善ければ行つてよいか。」翟煎「いけません。」惠王「善いのに行つてはいけないといふのは何故か。」翟煎「今大木を擧げる者は前で邪許（えんやこら）と呼べば後でも之に應じます。此は重を擧げ力を勸める歌です。外に美しい音樂

があつても用ひないのは、此の方がよいからです。國を治めるのは禮です、文辯ではありません。故に、老子が『法令が多く彰はれると盜賊が多く出る』と曰つたのであります。」

田駢が道術を齊王に說いた。王「吾は齊國を有して居るが、道術では患は除かれない。どうか國政の話を聞きたいものだ」。田「臣の言には政はありませんが政が出來ます。譬へば林には材はありませんが材ができる樣なものです。どうか臣の言を察して御自分で齊國の政をお取りなさいませ。患は除かれなくとも、天地の間六合の內を陶冶して變化することが出來ます。齊國の政などは問ふには足りません。」此が老聃の所謂無狀の狀、無物の象である。王の問ふ所は齊である。田駢の稱する所は材である。材は林に及ばず、林は雨に及ばず、雨は陰陽に及ばず、陰陽は和に及ばず、和は道に及ばない。

白公勝は楚國を得ても府庫の財物を人に分けず、七日も積んでおいた。石乞が入つて「不義を以て得ておきながら人に施しもしなければ必ず患が來ます。人に與へることが出來なければ焚き棄てて人から害せられない樣になさい。」と曰つたが、白公は聽かなかつた。九日目に葉公が、府庫の金や兵器を出して衆民に與へ、因つて之を攻めて十九日で白公を擒にした。國

が其の所有ではないのに之を所有しようとするのは至貪である。人の爲をも計らず己の爲をも考へないのは至愚である。白公の吝嗇は梟が其の子を愛育して子に食はれる樣なものだ。故に、老子は「手に持つて盈たすより已める方がよい。鍛へて銳くすれば長くは保たぬ。」と曰つてる。

趙簡子が襄子を後嗣とした時、董閼子が「無卹(襄子の名)は賤しいのにどうして後嗣としますか。」と曰つた。簡子「能く國家の爲に羞を忍ぶからだ。」他日、知伯が襄子と酒を飲んで襄子の首を打つた時、大夫が知伯を殺さうと願つた。襄子は「父が我を立てた時、能く國家の爲に羞を忍ぶと曰はれたが、能く人を刺せとは曰はれなかつた。」と曰つた。十月目に知伯が襄子を晉陽に圍んだ。襄子は隊を分けて之を擊ち、大に知伯を敗つて、其の首を破つて溺器にした。故に、老子は「其の雄を知つて其の雌を守れば天下が之に歸する。」と曰つてる。

齧缺が道を被衣に問ふ。被衣「汝の形を正し、汝の視を一にすれば天の和が至る。汝の知を攝し、汝の度を正せば神が來り舍る。德が來り附く。汝が美ならば道は汝の住居となる。新に生れた犢の如く何も知らず、物事の理由などを求めるな。」言葉の終らぬ中に齧缺は無言でじつと

視て居た。被衣は「形は枯骨の如く、心は死灰の如く、眞によく道を知り、知巧を以て自ら持せず、無言で廣く物を容れ、無心で與に謀ることができる。何と立派な人だらう。」と歌ひながら去つた。故に、老子は「心が明白で何事にも通じて居て能く何も知らないで居ようか」と曰つてる。

趙襄子が翟を攻めさせて勝つて二邑を取つた。使者が謁見した時、襄子は丁度食事をしようとしてゐたが、顏に憂を帶びて居つた。左右の者が曰ふには、「一朝にして兩城が下つたのは誰も善ぶことごであるのに、君が憂を帶びて居られるのは何故でございますか。」襄子は「江河の水も三日で減る。暴風雨も一日とは續かない。今趙氏の德行が積まれもしないのに、一朝にして兩城が下つたから、我家は亡びるのではないか。」と曰ふ。孔子が之を聞いて「趙氏は昌んになるだらう。」と曰つた。憂は昌をなすものだ。喜は亡を致すものだ。勝つのは難くはないが、之を維持するのが難いのだ。賢王は勝を維持するから福が後世に及ぶ。孔子は勁くて城門の戸を推擧げたけれども大力で有名にはならなかつた。墨子は攻守の術に長じて居たけれども戰術で有名にはならなかつた。善く勝を維持する者は强くても弱い樣にして居る。故に、老子は「道は空虛

にして用ひるもので、盈たさないものだ。」と曰つてる。

惠盎が宋の康王に見えた。康王が、足踏みをし咳をしながら早口に「吾は勇力ある者は好きだが、仁義を行ふ者は嫌ひだ。汝は何の話で來たのか。」と曰つた。惠盎「勇者が刺しても透らず、巧で力のある者が擊つても中らない術がありますが、如何でせう。」宋王「よろしい。聞きたいものだ。」惠盎「刺しても透らず擊つても中らないのではまだいけません。勇ある者でも刺せず、力ある者でも擊てない術があります。刺せないとか擊てないとかいへば、まだ刺さう擊たうとする意志がありますが、其の意志を無くする術があります。意志を無くしてもまだ愛利する心をもちませんが、天下の男女が皆愛利する心を持つ樣にする術があります。之は勇力よりも賢り、前の四の術の上に居るべきものですが、如何でせう。」宋王「修得したいと思ふ。」惠盎「孔子や墨子がさうです。此の二人は地なくして君となり、官なくして長となり、天下の男女が皆之を愛利しようとして頸を延ばして待つて居ます。今大王は萬乘の主ですから、誠に御志があるならば何處へ御出でなつても愛利せらませう。孔墨どろではありません。」宋王は返事をしなかつた。惠盎の去つた後、宋王が侍臣に向つて「辯者だ。辯說で吾に勝つた。」と曰つた。

故に、老子が「進んでせぬ方に勇氣があれば身を全うする。」と曰つたが。さうすると、大勇は反つて不勇である。

昔、堯は補佐が九人、舜は七人、武王は五人あつた。堯・舜・武王は補佐の人人に種種の仕事を命じ、自ら手を下さないで效果を收めて居るのは人の賢才に任せたからだ。故に、人は騏(千里の馬)と競走すれば負けるが、車に乘れば騏の方が負ける。北方に蹶といふ獸がある。前足が短く後足が長い。早く歩けば轉がる。常に蛩蛩駏驉の爲に甘草を取つて與へる。蛩蛩駏驉は前足が長くて後足が短い。蹶に患害があれば蛩蛩駏驉が必ず負つて走る。此は出來ることをして出來ないことはしないのである。故に、老子は「出來もしないのに名人に代つて木を削れば手を切らない者は少ない。」と曰つて居る。

薄疑が衞の嗣君に王者の術を說いた。嗣君「我は千乘の國を有する諸侯であるから、之を治めることを敎へてもらひたい。」薄疑「烏獲は三萬斤を持擧げます。一斤位は何でもありません。」杜赫が周の昭文君に天下を安んずることを說いた。文君「どうか周を安んずることが知りたい。」赫「臣の言ふ所が不可ならば周を安んずることは出來ません。可ならば周は自然に安くなりま

す。」此は所謂安んぜずして安んずる者である。故に、老子が「自然の大道は分割することは無い。故に車を各部に分割すれば車はなくなる。」と曰つてる。

魯國の法では、魯人が他國の僕妾となつたのを贖戻すものがあれば政府が其の金を與へることになつてる。子貢は魯人を贖戻して金を受けることを辭した。孔子が曰ふには、「賜(子貢の名)は宜しくない。聖人が事を行ふには、風を移し俗を易へ世に敎訓を施すべきものだ。唯一身の行に適せしむべきものではない。今國の富む者は少くて貧しい者が多い。贖つて金を貰ふのを不廉として金を受けなければ、今から後、魯人は人を他國から贖はなくなるだらう。」孔子も禮を知つてる。故に、老子は「小を見るを明と曰ふ。」と曰つてる。

魏の武侯が李克に吳の亡びたわけを問うた。李克「屢戰つて屢勝つたからです。」武侯「屢勝てば國の福なのになぜ亡びたのか。」李克「屢戰へば民が罷れ、屢勝てば主が驕ります。驕主が罷民を使つて國の亡びない者はありません。驕れば恣に、恣なれば物を極めます。罷れれば怨み、怨めば慮を極めます。上下俱に極まつて居るから吳の亡びたのはまだ晩い位です。夫差が干遂で自殺したわけです。」故に、老子は「功成り名遂げて身を退くのは天の道だ。」と曰つて居る。

寧戚は齊の桓公に仕へようと思つたが、貧乏で自ら逢ふことが出來ない。そこで旅商人になつて荷車を曳いて齊へ行き、暮に郭門の外に宿つた。桓公は客を郊迎し、門を開いて、荷車を避けさせた。炬火が甚盛んで從者が甚多かつた。寧戚は車の下で牛に秣を與へて居たが、桓公を望見して悲しみ、牛角を擊つて疾く歌つた。桓公が之を聞いて御者の手を抑へて曰ふには、「不思議だ。あの歌ふ者は常人ではない。」遂に後車に乘せて歸つて、衣冠を與へて謁見させた。寧戚が天下を治める術を說いたので、桓公は大に悅んで之を任用しようとすると、群臣が爭つて「彼は衞人です。衞は齊から遠くはありませんから、人をやつて問合はせて、賢人であることを確めてから用ひても晩くはありません。」と曰ふ。桓公「それはいけない。問合はせるのは小惡を患ふるからだ。人の小惡の爲に大美を忘れるから、人主が天下の士を失ふのだ。凡て聽いたことは必ず效驗がある。一度聽いて他に問はないのは、用ひようとする所に合するからだ。又人は完全なものはない。其の長ずる所を考へて用ひるだけだ。」桓公の行は當を得たものだ。故に、老子は「天は大、地は大、道は大、王も大である。域中に四大があつて王は其の一だ。」と曰つた。之はよく包容することを言つたのである。

大王亶父が邠に居た時、翟人が之を攻めた。皮帛珠玉を與へたけれども翟人は之を受けないで、「土地がほしいのだ。財物なんかはいらない。」と曰つた。大王亶父は民に向つて「人の父や兄と居てその子や弟を殺すことは吾には出來ない。皆勉めて處れ。吾の臣となつても翟人の臣となつても同じことだ。且聞く所によれば、人から養はれる者(君)の爲に人を養ふ者(民)を害することはしないものだ。」と曰つて策をついて去つた。民は續いて之に從つた。遂に岐山の下に國を建てた。大王亶父は能く生を保つものだ。富貴でも養の爲に身を傷らず。貧賤でも利の爲に形を害はしない。世人は、長い間、先人の爵祿を受ければ、之を失ふまいとして居るから、之を棄てるとなると惑はない者はない。故に、老子は「身を貴び身を愛して天下を治める人なら天下を寄託してもよい。」と曰つてる。

中山の公子牟が詹子に向つて「身は江游の上に處て閑散だが、心は魏闕の下に在つて權勢を慕ふ。如何すればよいか。」と曰ふ。詹子「生を重んじなさい。生を重んじれば利を輕んずる樣になります。公子牟「それは知つてるが、情欲に勝てないのだ。」詹子「勝てなければ、之を恣になさい。さうすれば己の心に怨がなくなりませう。自ら情欲に勝てないで、强ひて恣にしな

いのを、重傷と謂ひます。重傷の人は壽命の無い人の仲間です。」故に、老子は「和を知るのを常と曰ひ、常を知るのを明と曰ひ、生を益すのを祥と曰ひ、心が氣を使ふのを强と曰ふ。故に其の光を用ひて其の明に復歸する」と曰つてる。

楚の莊王が詹何に國を治めることを問うた。詹何「私は身を治めることは知つてますが、國を治めることは知りません。」楚王「吾は宗廟社稷を立てて居るから、之を守ることを學びたい。」詹何「臣はまだ身が治まつて國が亂れ、身が亂れて國の治まることを聞きません。故に本は身に在りますから、末の御答は致しません。」楚王「もつともだ。」故に、老子は「之を身に修めれば其の德は眞だ。」と曰つてる。

桓公が堂上で讀書して居ると、輪扁が堂下で輪を劉つて居たが、椎と鑿とを釋てて、桓公に「何の書を御讀みですか。」と問うた。桓公「聖人の書だ。」輪扁「其の人は何處に居りますか。」桓公「もう死んだ。」輪扁「是は聖人の糟粕に過ぎません。」桓公は顏色を變へて怒つて「吾が讀書して居るのを工人風情が譏るとは何事だ。申すことがあればよし、なければ殺すぞ。」輪扁「御座います。試に輪を斲る事を假りて申しませう。甚ば疾ければ澁くて入りません。甚だ徐けれは甘

てく固くなりません。甘くなく澁くなく手に應じ心に悟つて妙處に至ることは、臣が臣の子に教へることも出來ず、臣の子が臣から學び得ることも出來ません。それ故七十になつても輪を作つて居ります。今聖人の言ふ所も、自ら其の實を懷いて窮死して唯糟粕を殘したに過ぎません。」故に、老子は「道と指すべき道は常の道ではなく、名と稱すべき名は常の名ではない。」と曰つてる。

昔、司城子罕が宋の宰相になつて、宋君に曰ふには「國家の安危、百姓の治亂は君が賞罰を行ふことによつて生ずるものです。僭賞賜與は民の好むものですから、君が御自分でなさい。殺戮刑罰は民の怨むものですから、臣が之に當りませう。宋君「宜しい。吾は其の美に當り汝は其の怨を受ければ、吾は諸侯から笑はれないだらう。」國人は殺戮が專ら子罕の手で行はれることを知つて、大臣は之を親しみ、百姓は之を畏れた。一年たたぬ中に、子罕は遂に宋君を却けて政を專らにした。故に、老子は「魚は淵から出てはならぬ。國の利器は人に示してはならぬ。」と曰つてる。

王壽が書を負つて周へ行つて徐馮に見えた。徐馮は「事は變に應じて動き、變は時に生じる。

故に時を知るものには常行がない。書は言の發表だ。言は知者から出る。知者は書を貯藏しない。」と曰ふ。そこで王壽は其の書を焚いて、喜んで舞つた。故に、老子は「多言は屢窮する。それより中を守る方がよい。」と曰つてる。

令尹子佩が酒宴に莊王を招いた。莊王は許諾したが、子佩が京臺に席を設けたので往かなかつた。明日子佩が徒跣で立禮をして北面して殿下に立つて曰ふには「君には昨日御許になりましたのに、今日御出でがありませんが、臣に罪がございますか。」莊王「汝が京臺に席を設けたと聞いたが、京臺は南は料山を望んで方皇の水に臨み、江水を左にして淮水を右にし、死を忘れる程の樂がある。吾が如き薄德の者は此の樂に當ることは出來ない。恐らく留まつて反ることができないだらう。」故に、老子は「欲すべき所を見なければ心が亂されない。」と曰つた。

晉の公子重耳が亡命して曹へ立寄つた時、曹の君が無禮な待遇をしたので、釐負羈の妻が、釐負羈に向つて曰ふには、「主君は晉の公子に對して無禮です。私が其の從者を觀ますと皆賢人です。若し公子を相けて晉に反れば、必ず曹を伐ちませう。あなたは先づ恩德を施しておく方がようございます。」釐負羈はそこで公子に食物を贈り璧を添へた。重耳は食物を受けて璧を

返した。國に反つてから曹を伐つたが、軍隊に命じて釐負羈の里へは入らせなかつた。故に、老子は「曲れば全く、枉れば直だ。」と曰つてる。

越王勾踐が吳と戰つて負けて會稽山で困しんだ時、意氣を盛にし、兵を精練したが、身は臣となり妻は妾となることを請うて、親ら戈を執つて吳王の先驅となつた。越王は柔の道を守つたが果して吳王を干遂に擒へた。故に、老子は「柔が剛に勝ち、弱が强に勝つことは誰も知つてるが行ふものがない。」と曰つてるが、越王は之を行つたから、覇を中國に唱へたのである。

趙簡子が死んでまだ葬らないのに、中牟が齊に屬した。葬つた後五日目に、子の襄子が兵を起して攻めた。圍んでまだ合戰しないのに、城が自然に十丈程壞れた。襄子は退却を命じた。軍吏が諫めて曰ふには、「君は中牟の罪を誅して、城が自然に壞れたのは、天が我を助けるのです。何故に退却なさいますか。」襄子「吾は叔向に聞いたが、君子は己の利の爲に人の不利に乘ぜず、人の難に迫らないといふことだ。城を修繕させてから攻めよう。」中牟は其の義を聞いて降を請うた。故に、老子は「爭はないから誰も爭ふものがない。」と曰つてる。

秦の繆公が伯樂に問ふには「汝は年をとつた。汝の子に馬を求めさせてもよいものが居るか。

伯樂「良馬は外觀で分りますが、天下の名馬は滅すが如く、亡するが如く、其の身を亡ふが如くで、追及することは出來ません。臣の子は皆不材です。良馬なら分りますが、天下の名馬は分りません。九方堙（きうはういん）といふ者が居ります。此の者の馬を相（み）る技倆は臣に劣りません。之を謁見させませう。」穆公は之を見て、馬を求めさせた。三月の後反つて報じて曰ふには、「馬を見付けました。沙丘に居ります。」穆公「どんな馬か。」九方堙「牝で黃色です。」人を取りにやると、牡で黑かつた。穆公は悅ばず、伯樂を召して曰ふには「汝が馬を求めさせた人間は毛色も牝牡も分らぬものだ。馬などが分るものか。」伯樂が歎息して曰ふには、「誠に其の樣でございますか。臣の如き者が千萬人集つても、之に當ることは出來ません。堙の觀る所は天機です。其の精を得て其の粗を忘れ、其の內を察して其の外を忘れ、見るべき所を見て、見なくもよい所を見ず、視るべき所を視て、視なくもよい所を遺れて居ます。彼の相る所は馬よりも貴い者があります。」馬が來た。果して千里の名馬であつた。故に、老子は「大直は屈するが如く、大巧は拙なるが如し。」と曰つてる。

吳起が楚の令尹となつた。魏へ行つて、楚から亡命して居る屈宜若（くつぎじやく）に問うて曰ふには、「王は

起の不肖を知らずに令尹にしましたが、先生、起の人物を觀て下さい。」屈子「如何する積です。」吳起「楚國の爵を減じ、祿を公平にし、餘る所を削つて、不足を補ひ、甲兵を訓練して、利を天下に爭はうと思ひます。」屈子「昔、善く國家を治めた者は其の故態を變へず其の常を易へなかつたと聞いて居ます。今、あなたの行はうとすることは、其の故態を變じ其の常を易へることです。之を行ふのは不利です。又怒は逆德であり、兵は凶器であり、爭は人の末とする所であると聞いて居ります。今あなたは陰に逆德を謀り、好んで凶器を用ひ、人の末とする所を始めるのは逆の至りです。又あなたは、不幸にも、魯の將となつて齊を敗り、魏の爲に西河を守つて秦兵を防止しました。人に禍を與へなければ禍を受けることはないと聞いて居ますのに、吾が王が屢天道に逆ひ人理に戾つて今迄禍を受けないのを不思議に思つてましたが、天があなたを待つて居たのですなあ。」吳起が恐れて曰ふには、「まだ改められますか。」屈子「刑禍が已に成れば改められません。あなたは敦く愛し篤く行ふ外ありません。」故に、老子は「其の鋭を挫き、其の紛を解き、其の光を和し、其の塵に同ずる。」と曰つてる。

晉が楚を伐つ。楚が九十里退いたが晉は尙進んで來た。楚の大夫が擊たうと願つた。莊王が

「先君の時には晉は楚を伐たなかつた。吾が身に及んで晉が楚を伐つたのは吾の過である。誠に辱かしいことだ。」と曰ふと、群大夫が「先臣の時には晉は楚を伐ちません。臣の身に及んで晉が楚を伐つたのは臣の罪です。どうか之を擊ちませう。」と曰ふ。王は涕を流して起つて群大夫を拜した。晉人が之を聞いて「君臣各過を己に引受け、且君が臣に下つて居るから、伐つことは出來ない。」と曰つて夜引還した。故に、老子は「能く國の垢を受けるのが、社稷の主だ」と曰つてる。

宋の景公の時、熒惑の星が、心の星宿にあらはれた。公が懼れて子韋を召して、「熒惑が心に在るのは何故か。」と問うた。子韋「熒惑は天罰です。心は宋の分野です。君が禍を受けることになりますが、宰相に移されます。」公「宰相は國家を治める役だから、死を移すのは、よくない。」子韋「民に移されます。」公「民が死ねば吾は誰の君とならう。自分が死なう。」子韋「歳に移せます。」公「歳は民の命である。歳が饑ゑれが民は必ず死ぬ。人君となつて民を殺して自ら活きようとするならば誰が我を君とするだらう。吾が命は盡きたのだ。もう何も言ふな。」子韋は席を退いて北面再拜して曰ふには「お喜び申上げます。天は高い處に居ても卑い處の事を聽いて居ます。君には人の君たるべき言葉が三つありますから、天が君に三つの賞を與へませう。今夕星は三舍徙るでせう。君の御年は二十一歳延びるでせう。」公「どうしてそれが分る」。子韋「人の君たるべき言葉が三つあるから、天が三つの賞を與へ、星が三舍徙るのです。一舍は七里で、三七二十一ですから、君の御年が二十一歳延びるのです。今夜天文を觀測して若し星が徙らなければ私は死にます。」是の夕星は果して三舍徙つた。故に、老子は「能く國の不祥を受けるのが天下の王だ。」と曰つてる。

昔公孫龍が趙に居た時、弟子に向つて、「能のない人と吾は遊ぶことはできない。」と曰ふ。褐を被て繩を帶としてる人が見えて曰ふには、「臣は能く呼ぶことができます。」公孫龍は弟子を顧みて「門下に能く呼ぶ者があるか。」と問うと、「ありません」と曰つたから、此者を弟子にした。數日の後、燕王に說かうとして河上へ行くと、渡舟が遠くの水涯にある。彼の善く呼ぶ者に呼ばせると一呼で舟が來た。故に聖人が世に處するには伎能ある士に逆はないと曰はれる。故に老子は「人に棄人はなく、物に廢物はない。是を襲明と謂ふ。」と曰つてる。

子發が蔡を攻めて、之に勝つた。宣王が郊迎して田百頃を與へて、執圭(爵の名)の身分にした。

子發は辭して受けないで「國政を行ひ諸侯が入朝するのは君の德です。號令を發してまだ合戰しないうちに敵が遁げるのは將軍の威です。軍隊が戰つて敵に勝つのは庶民の力です。民の功勞によつて爵祿を取るのは仁義の道ではありませんから、御辭退申します。」と曰つた。故に、老子は「功が成つても功としないから功を失ふこともない。」と曰つてる。

晉の文公が原を伐つ時、大夫と約束して三日攻めることにした。三日で原が降らなかつたので引擧げることにした。軍吏が「一二日で原は降ります」と曰ふ。文公「吾は三日では降すことのできないのを知らないで大夫と約束した。期限が過ぎても罷めなければ信を失ふ。原を得ても信を失ふことはできない。」原の人が之を聞いて「此の樣な君なら降らなければならない。」と曰つて遂に降つた。溫の人も亦降つた。故に、老子は「幽冥の中に精があり。其の精は甚だ眞なるもので其の中に信がある。故に美言は尊を得、美行は人に施すに足るものである。」と曰つてる。

公儀休が魯の相となつた。魚が好きなので、一國の人が魚を獻じたが、公儀子は受けなかつた。其の弟子が諫めて曰ふには、「あなたは魚が御好きなのに、どうして御受けなさらぬのですか。」公儀子「魚が好きだから受けないのだ。魚を受けて相をやめさせられれば、魚が好きで

も自ら得られない。魚を受けないで、相をやめさせられなければ、長く自ら魚が得られる。」此は人の爲にし己の爲にするに明らかなものである。故に、老子が「其の身を後にして身が先になり、其の身を外にして身が存するのは無私の爲ではないか。故に能く其の私を成すのである。」と曰つてる。又「足るを知れば辱められない。」とも曰つてる。

狐丘丈人が孫叔敖に曰ふには、「人には三怨があるが、知つてますか。」孫叔敖「何を謂ひますか。」丈人「爵が高ければ士が妬む。官が大ならば主が惡む。祿が厚ければ怨が宿る。」孫叔敖「吾が爵が益々高くなれば志は益〻下る。吾が官が益〻大ならば吾が心を益〻小にする。吾が祿が益々厚ければ吾が施を益〻博くする。かうして三怨を免かれたら好いでせう。」故に、老子は「貴は必ず賤を本とし、高は必ず下を基とする。」と曰つてる。

大司馬に屬して釣鉤(つりはり)を作る者が八十歲になつても鉤の尖をよく作る。大司馬が「汝は巧なのか。術があるのか。」と問ふと、「臣は守る所があります。二十歲の時好んで鉤を鍛へ、鉤の外、他物は一切視ません。」と答へた。是に由つて知られる如く、用ひる者は必ず用ひないことによつて長く用ひられる。況して用ひないことを主義とすれば何物も皆用ひられる。故に、老子は「道に從

事するものは道と同じくなる。」と曰つてる。

文王が徳を礪き、政を修めること三年で天下の三分の二が之に歸した。紂が聞いて患へて曰ふには、「余が朝早く興き夜おそく寢て之と行を競へば、心が苦しみ形が勞する。此の儘でおけば余に代つて天下を取るだらう。」崇侯虎「周伯の昌(文王)は仁義を行つて善く謀り、太子の發は勇敢で疑はず、中子の旦は恭儉で時を知つてます。之と爭つてはやりきれません。此の儘にしておけば、吾身が必ず亡びます。冠は弊れても頭に載すべきものです。我は王ですから、彼等の事業のまだ成らないうちに、どうかしませう。」紂の臣の屈商が文王を羑里(いうり)に囚へた。そこで文王の臣の散宜生が千金を以て天下の珍怪を求めて紂に献じ、紂の佞臣に因つて紂に逢つた。紂が見て悅んで文王を免し牛を殺して賜うた。文王は歸つて居宅を壯麗にし、歌舞などをして樂しんで、紂の過失を待つた。紂は之を聞いて「周伯の昌が道を改め行を易へたから、もう憂はない。」と曰つて、益〻暴逆を縱にした。文王は遂に其の謀を遂げた。故に、老子は「其の榮を知つて其の辱を守つて居れば天下が之に歸する。」と曰つてる。

周の成王が政を尹佚に問うた。「如何なる徳を行へば民が上を親しむだらう。」尹佚「民を使ふ

に農時を誤らぬ樣にして之を敬愼なさい。」王「敬愼の度は如何程か。」尹佚「深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如くになさい。」王「人の王たる者は隨分懼れるものだな。」尹佚「天下の民が善いと思へば吾を畜ひますが、善いと思はなければ吾が讎となります。昔、夏や商の臣は反つて桀や紂を讎として、湯王や武王の臣となりました。宿沙の民は皆自ら其の君を攻めて神農に歸服しました。此は世人が明かに知つて居ります。どうして懼れず居られませう。」故に、老子は「人の畏れる事は畏れなければならぬ。」と曰つてる。

盜跖の子分が、跖に「盜にも道があるか」と問うた。跖「どうして道があるどころではない。所藏を考へ中てるのは聖だ。先に入るのは勇だ。後から出るのは義だ。均しく分配するのは仁だ。可否を知るのは智だ。此の五が備はらないで大盜となるものはない。」之に由つて觀れば、盜賊の心は必ず聖人の道に託して初めて行はれるのである。故に、老子は「聖を絶ち智を棄てれば民利が百倍する。」と曰つてる。

楚の將の子發が好んで技道の士を求めた。楚に盜の名人があつて、往つて見えて曰ふには、「技道の士を御求めになると聞いて參りました。臣は盜です。どうかこの技を以て一卒にお加へ

下さい。」子發は之を聞いて帶もしめず冠も正さずに急いで出て面會した。侍臣が諫めて曰ふには、「彼は天下の盜です。どうして御面會なさいます。」子發「お前達の知つたことではない。」後幾程もなく、齊が兵を起して楚を伐つた。子發は軍を將ゐて之に當つて、三度退却した。楚の賢良大夫は皆計を盡し誠を悉くしたけれども、齊軍は愈〻强かつた。時に彼の盜が進んで其の技を行ひたいと願つた。子發は之を許して何も問はずに遣つた。盜は夜、齊の將軍の幬帳(とばり)を解いて之を獻じた。子發は人をやつて齊軍に送り返させて曰ふには「卒が薪を取りに出で將軍の帷を得ましたから御返し申します。」翌日復往つて其の枕を取つて來た。子發は又送り返させた。翌日は復往つて簪を取つて來た。子發は又送り返させた。齊軍が之を聞いて大に駭いた。將軍は軍吏と謀つて、「今日去らなければ、楚軍は恐らく吾が頭を取るだらう。」と曰つて軍を還して去つた。故に、「細小だとて輕んずるな、人君の用ひ方如何に在る。」と曰つてる。故に、老子は「不善人は善人の資となる。」と曰つてる。

顏回が仲尼に向つて「回は益を得ました。」と曰ふ。仲尼「如何した。」顏回「禮樂を忘れました。」仲尼「可いが、まだ不十分だ。」他日復見えて「仁義を忘れました。」と曰つたが、仲尼の言葉は

前と同じだつた。然るに他日復見えて、「回は坐忘しました。」と曰ふと、仲尼は遽然として曰ふには、「坐忘とは何を謂ふのか。」顏回「肢體を棄て、聰明を黜け、形を離れ、知を去り、空虛で造化と通じるのを坐忘と申します。」仲尼「空虛ならば善はなく、造化と通じれば常はない。さうすると汝は先賢だ。吾は後に從はう。」故に、老子は「魂魄を載せ道を抱いて離れない樣にしよう。氣を散ぜず至柔にして嬰兒の樣にならう。」と曰つてる。

秦の穆公が軍を起して鄭を襲はうとした。蹇叔が曰ふには、「それはいけません。國を襲ふ者は車を用ひれば百里以外へは行かず、人を用ひれば三十里以外へは行かないといふことです。其位なら、謀も泄れず、兵も鈍らず、糧量も缺乏せず、人民も疲勞せず、氣力が盛んですから敵を犯して威を振ふことが出來ます。今數千里を行き、屢諸侯の地を過ぎて他國を襲ふのは宜しいとは思はれません。よく御考へなさいませ。」穆公は聽かなかつた。蹇叔は軍を送り喪服を被て哭した。軍は遂に進んで周を過ぎて東へ行つた。鄭の商人の弦高が鄭の君の命だと稱して牛二十頭を贈つて秦軍を慰勞して之を導いた。秦の三帥は懼れて謀つて「吾は數千里を行いて人を襲はうとして、まだ至らぬうちに知られてしまつた。敵は十分用意してるから襲ふことはでき

ない。」と曰つて軍を返して去つた。此時、晉では文公が薨じてまだ葬らなかつた。先軫が文公の子の襄公に曰ふには、「昔先君が穆公と交はつたことは誰も知らぬ者はありません。今吾先君が薨じてまだ葬らないのに、弔ひもせず道を假りもしません。是は先君は死んだし、今の君は弱いと見て我を侮るのですから、之を擊ちませう。」襄公が許した。先軫は兵を擧げて秦軍を殺に破り、其の三帥を擒にして歸つた。穆公は之を聞いて喪服で朝に臨み衆人に說いた。故に、老子は「知つて知らぬとするのは尊い。知らないで知るとするのは病だ。」と曰つてる。

齊王の后が死んだ。王は后を置かうとしたが定まらぬので群臣に議させた。薛公は王の意を知らうと思つて、十個の珥(みみかざり)を獻じて、中の一個を美しくしておいた。明日かの美しい珥を持つてる婦人を問うて、それを后に立てることを勸めた。齊王は大に悅んで薛公を重んじた。故に、人主の嗜欲が外に見はれれば人臣に制せられる。故に、老子は「其の口を塞ぎ其の門を閉ぢれば終身勤勞しない。」と曰つてる。

盧敖が北海に游び、太陰を經て玄闕山に入り、蒙穀山の上に至つて一士を見た。目は深く、鬢は黑く、頸は太く、肩は聳え、上は肥は下は瘦せ、今丁度風を迎へて舞つてる處だつた。盧敖を

顧みて舞をやめて碑の陰に遁隱れた。盧敖が行つて見ると、龜甲に腰をかけて蛤を食べて居た。盧敖が之と語つて曰ふには「群に背き黨を離れて六合の外を窮め觀た者は唯敖だけです。敖は幼時から遊を好んで、成長しても怠らず、四極を遍歷しました。唯北陰をまだ闕はないだけです。今是所であなた逢ひました。あなたは殆んど敖の友となれるでせう。」彼の士がからからと笑つて曰ふには、「ああ、あなたは中國の人だ。どうして此處へ來て遠いといふのです。此處はなほ日月が照らし、星が輝き、陰陽が行はれ、四時が生じてゐます。私の遊ぶ不名の地に比べると室の中位なものです。私は南は罔筤の野に遊び、北は沉墨の鄉に息ひ、西は窅冥の黨を窮め、東は鴻蒙の光を貫きました。下には地がなく、上には天がなく、聽いても聞えず、視ても見えません。此の外に汰沃の涯がありました。其の外は、一擧して千萬里に達しますが、私はまだそこへは行かれません。今あなたの遊びは此から始まるのに、窮め觀たなどといはれるが、前途遼遠ではありませんか。あなたは此處に入らつしやい。私は汗漫と九天の上で會ふことになつてますから長く此處には居られません。」と曰つて臂を擧げ身を竦(そばだ)てて遂に雲中に入つた。盧敖は仰いで視たけれども見えない。そこで駕を止めて悅ばず、心が亂れて喪神者の如くなつて、「吾を

あの人に比べるのは黄鵠と幼蟲とを比べる様なものだ。終日行くも咫尺を離れることが出來ないのに、自ら遠いと思つて居た。悲しいことだ。」と曰つた。故に、莊子は「小人は大人に及ばない。小知は大知に及ばない。朝菌は晦朔を知らない。蟪蛄は春秋を知らない。」と曰つたが、自ら明らかに見ると思つても、見えない所のあるのを言つたのだ。

季子が亶父を治めて三年になる。巫馬期が粗服を被て微行して德化を視察に往つた。夜漁者が魚を得て之を逃がすのを見た。巫馬期「汝は魚を捕りに來て居ながら、魚を得て之を逃がすのはどういふわけか。」漁者「季子は人が小魚を取ることを欲しません。今のは小魚だから逃がしたのです。」巫馬期は歸つて孔子に報じて曰ふには、「季子の德は至極です。人は闇の中でも嚴刑が側にある時の樣に行動します。季子はどうして斯樣な結果を得たのですか。」孔子「吾は嘗て季子に治を問うた時、『此に誠があれば彼に形はれる。』と曰つたが、必ず此の術を行つたのだらう。」故に、老子は「彼を去つて此を取る。」と曰つてる。

罔兩が景に問うて曰ふには、「昭昭たる者は神明であるか。」景「ちがふ。」罔兩「どうして分る。」景「日の光は昭昭たる者で四海を照らすが、戸を閉ぢ牖を塞げば入つて來られない。神明は四

方に流通して行かない所はない。上は天に交り、下は地に蟠り、萬物を化育して、名狀することは出來ない。暫の間に四海の外迄も安撫する。昭昭たる者は明とするには足りない。」故に、老子は「天下の至柔は天下の至堅の間を走る。」と曰つてる。

光耀が無有に向つて「汝は有るのか無いのか。」と問ふ。無有は答へない。光耀は問ふことができないので、よく其の狀貌を視ると、冥然忽然として、形も見えず聲も聞えない。捕らうとしてもつかまらず、望んでも見さかひがつかない。光耀が曰ふには、「貴いものだ、誰が此の樣になれるだらうか。予は無を有にすることはできるが、まだ無を無にすることはできない。だが無を無にしようとすれば無有の樣にはなれない。」故に、老子は「有を無にして空虛な者は間隙の無い處へも入る。吾はこの故に無爲の有益なことを知る。」と曰つてる。

白公勝が兵亂を起さうと思つて朝を退いて立つて居た。倒に策を杖いたので、先端の針で頤を突いて血が流れて地上に滴つても知らなかつた。鄭の人が之を聞いて「頤を忘れる位だから、何でも忘れない物はなからう。」と曰つて懼れた。此は精神が外へ出、智慮が內を動かせば其の形を理めることができないことを言つたものだ。それ故、精神が遠くに用ひられれば近くが

遺れられる。故に、老子は「戸を出ないで天下を知り、牖を窺はないで天道を見る。遠く出れば出る程知ることが少ない。」と曰つてる。

秦の始皇帝は天下を得たが、守ることのできないのを恐れて、邊地へ守備兵を出し、長城を築き、關所や橋梁を修め、城塞を設けなどしたが、劉氏は何の苦もなく之を奪つた。昔、武王は紂を破つたが、比干の墓を祭り、商容の村を表彰し、箕子の門を護り、湯王の廟を拜し、紂の貯へた米や錢を人民に與へ、鼓を破り枹を折り、弓を弛へ絃を絶ち、野宿をして平和を示し、劒を觧き笏を帶びて敵とする者のないことを示した。そこで天下の人が歌ひ樂しみ、諸侯が幣を執つて入朝して、三十四世まで奪はれなかつた。故に、老子は「善く閉ぢる者は鍵をかけなくも開かれず、善く結ぶ者は繩を縛らなくも解かれない。」と曰つてる。

尹需が車を御する術を學んで三年たつても修得できず、自ら心配して常に臥して考へて居た。夜半に巧に御する術を師から授けられた夢を見た。明日師の處へ往くと、師が之を望んで曰ふには、「吾は道を傳へるのを惜みはしないが、恐らく、汝には授けてもわかるまい。今日は巧に御する術を教へよう。」尹需は後へさがつて北面再拜して曰ふには「臣は天の幸を得て今夕夢

で授けられました。」故に、老子は「虛を致して其の極に達し、靜を守ることが篤ければ、萬物が並び至つても其の本に復る時を觀る。」と曰つてる。

昔、孫叔敖は三度令尹になつても心に喜ばず、三度令尹を去つても顏に憂がなかつた。延陵の季子は吳の人が王になることを願つても聞き入れなかつた。許由は天下を讓られても受けなかつた。晏子は崔杼と盟つて死地に臨んでも其の義を變へなかつた。此は皆遠く通じて居るからだ。精神が死生に通じれば何物も惑はすことはできない。楚に佽非(じ)といふ者があつた。吳の干遂で寶劒を得て江を渡つて還つた。江の中程へ來ると、陽侯(水神の名)が波を起し、蛟が二匹其の船を繞つた。佽非が船頭に「嘗て此の樣な時に命の助かつた者があるか。」と問ふと、無いと曰ふ。そこで佽非は目を瞋らせ臂を攘げ劒を拔いて曰ふには、「武士は仁義の禮を以て說くべきも劫かして奪ふことはできない。吾身は江中の腐肉朽骨になるのだ。劒を棄てよう。何も惜しいことはない。」と曰つて江に入つて蛟を刺して其頭を切つた。風波が靜まつて船中の人は皆助かつた。楚は爵を與へて執圭の身分にした。孔子が之を聞いて「善くした。身も劒も愛まないといふのは佽非のことだ。」と曰つた。故に、老子は「生を思はない者は生を貴ぶ者より賢る。」と曰つてる。

齊の人淳于髡が魏王に合從を說いた。魏王は辯才があるとして、車十乘を仕立てて楚へ使にやらうとしたので、暇乞をして行かうとしたが、又合從は不十分だと思つて、連衡を說いた。其の詞が尤らしかつた。魏王は其の出發を止めさせて、其の身を疏んじた。遂に合從も出來ず又連衡も出來なかつた。是は偏固な爲である。言には宗があり事には本がある。其の宗本を失へば技能は多いよりも寡い方がよい。故に周の鼎には倕といふ名工を描いて其の指を齕ませてある。先王が大巧の爲すべからざることを示したものである。故に、愼子は「門は開閉を主るのに、匠人が、開くけれども閉ぢられない樣な門を作つたならば、門の主要な點を知らない者だ。」と曰つてる。

墨者に田鳩といふ者があつて。秦の惠王に見えようとして一年間秦に居たが見えることができなかつた。之を楚王に推薦する人があつたので、往つて楚王に見えた。楚王は甚だ悅んで秦へ使にやつた。因つて惠王を見て悅んだ。退出して客舍へ行つて、嘆息して從者に告げて曰ふには「吾は三年間秦に留まつて居たが見えられなかつた。楚から行くことを識らなかつたのだ。物は固より近くて遠く、遠くて近いのがある。」故に、大人の行は規則にたよらずに至る處に至

るのである。此は管子に「鳥は勝手な方向に飛ぶが、結局行くべき處へ行く」と謂つてるのと、同樣だ。

澧水は深さ千仞もあつて、金鐵の針を投じれば外から見える程に淸んで居るが、魚鼈龍蛇は棲まうとはしない。それ故、石の上に五穀は生ぜず、禿山には麋鹿は游ばない。隱れる陰がないからである。

昔、趙文子が叔向に問うて曰ふには、「晉の六將軍の中で誰が先づ亡びるでせう。」叔向「中行氏と知氏でせう。」文子「どうしてです。」叔向「其の政を見ると、細苛を察と考へ、迫切を明と考へ、下をいぢめるのを忠と考へ、計略の多いのを功と考へて居ます。譬へば革を引延ばす樣なもので、大きくはなるが革は裂けます。」故に、老子は「其の政が聰明を用ひなければ其の民は純樸である。其の政が煩瑣ならば其の民は失望する。」と曰つてる。

齊の景公が太卜の官に「汝の道はどんな事が出來るか。」といふと、太卜が「地を動かす事ができます。」と曰ふ。晏子が公に見えた時に公は此の話をして「地は動かすことのできるものか。」と問ふ。晏子は默然として答へず、退出して太卜を見て「昨夜句星が房と心との間にあるのを見

ましたが、地が動きませうか。」と曰ふ。太卜「動きます。」晏子の去つた後、太卜は走つて公の所へ往つて「臣が地を動かすのではありません。地が動くのです。」と曰つた。田子陽が之を聞いて「晏子が默然として答へなかつたのは、太卜の殺されることを欲しないからである。太卜の所へ往つたのは、公が欺かれることを恐れたのである。晏子は上に忠を盡し下に惠を施した人だ。」と曰つた。故に、老子は「方であり廉であるが、物を傷けることはしない。」と曰つてる。

魏の文侯が曲陽で諸大夫に酒を飲ませた時、酒宴半ばに嘆息して「豫讓の樣な臣がほしいものだ。」と曰ふ。蹇重が酒を進めて曰ふには「君に罰杯を差上げます。」文侯「どういふ譯だ。」蹇重「天の命を得た父母は孝子を知らず、有道の君は忠臣を知らないと聞いて居ります。豫讓の君は皆亡びたではありませんか。」文侯は酒を飲みほして杯を返さずして曰ふには、「管仲鮑叔の樣な臣がないから、豫讓が功を立てたのである。」故に、老子は「國家が昏亂して忠臣があらはれる。」と曰つてる。

孔子が魯の桓公の廟で宥巵(いうし)といふ器を觀た。孔子は此の器を見たことを喜んで、弟子に水を持つて來させた。水を灌ぐと半分なら正しく立つが、盈ちれば覆る。孔子は容を改めて「感心だ。

盈を保つものだ。」と曰ふ。子貢が側に居て盈を保つことを問うた。孔子は「抑へて之を損せよ。」と曰ふ。子貢は更に其の意味を問うたから、孔子は之を説明した。「物は盛になれば衰へ、樂は極まれば悲しみ、日は中央へ來れば移り、月は盈ちれば虧ける。故に聰明睿知は愚で守り、多聞博辯は陋で守り、武力毅勇は畏で守り、富貴廣大は儉で守り、德が天下に及べば讓で守る。先王が天下を守つて失はないのは此の五者にあるのだ。此の五者に反すれば危くならないことはない。」と曰つた。故に、老子は「此の道を保つ者は盈ちることを欲しない。盈たさないから古いままで新に成すことはない。」と曰つてる。

武王が太公に問うた。「吾が紂を伐つのは臣として主を殺し、下として上を伐つのである。恐らく、後世の者が兵を用ひて休まず、鬪爭して已まないだらう。如何したらよからう。」太公「誠に善い御下問です。まだ獸を得ない内は大きな創を與へて殺さうとしますが、得てしまへば、なるべく肉を傷けない樣にします。王が若し天下を久しく保つ御考ならば、民の耳目口鼻を塞いで、無用の事、煩擾の敎を以て民を導きなさいませ。彼は皆其の業を樂しみ、其の情を安んじ、昭々から冥冥に導かれます。そこで冑を去つて冠を戴かせ、劍を解いて笏を持た

せ、三年の喪をなして種族を蕃殖させず、上に辭し下に讓つて民を爭はせず、酒肉を以て交際させ、音樂を以て娛しませ、鬼神を以て畏れさせ、繁文縟禮を以て民の質を掩ひ、厚葬久喪を以て民の家業を空しくし、死者に珠を含ませ美服を著させて民の財産を少なくし、墓穴を深くし冢を高くして民の力を盡くさせなさいませ。かうすれば民の家は貧しく族は少なくなつて國の患になる樣なことを考へるものはなくなります。此の方法で俗を移せば天下を失ふことはありません。」故に、老子は「物の變化が起らうとすれば吾は自然の道を以て之を鎭める。」と曰つてる。

第十三　氾論訓

博く世間古今の得失を論じ
聖人の變通を述べたもの

古は髪を結ばず頸に物を纏ふといふ素樸な風で天下の王となつた者があつた。其の德は、生かして殺さず、予へて奪はなかつたから、天下の人は其の服を誹らず、皆其の德に懷いた。當時は、陰陽は和らぎ風雨は時に適つて萬物が蕃息し、何物も人を畏れないから、鳥鵲の巢は俯して手で探ることが出來、禽獸は繫いで牽くことができた。どうして衣冠を美しく飾る必要があらうか。古は民は澤に居り穴に棲んだが、冬日は霜雪霧露に勝へず、夏日は暑熱蛟虻に勝へなかつた。そこで聖人が宮室を造つて風雨寒暑を避ける樣にしたので、人民は安心して生活することが出來た。伯余が初めて衣を作つた時は、麻を績ぎ縷をよつて、手や指を以て織つたので、出來上つたものは網の樣に粗かつた。後世機織道具を作つて使用が便利になつたから民は身を掩ひ寒を禦ぐことができた。古は木の相を銳くして耕し、蛤を摩つて耨り、木の鎌で薪を伐り、瓶を抱いて水を汲んだ。民の勞力が多くつて利益が少なかつた。後世、耒耜耰鋤を作つて耕耨に用ひ、斧で薪を伐り、桔皐で水を汲むことにした。民は樂で利が多くなつた。古は大川名谷が道路を斷絶して交通が出來なければ、木を筏め、版を並べて舟の代りにした。故に有無を通ずることが出來た。然るに、靴を穿いて千里を超え、肩や背で物を運ぶのが骨が

折れるから、車を作つて馬や牛に引かせたので、民は遠方へ行くにも骨が折れなくなつた。鷙禽や猛獸が人を傷害しても之を防止することが出來ない爲に、武器を作つたので、禽獸は害を加へることが出來なくなつた。故に、民は難に迫れば、便利な方法を求め、患に困めば備をする。人は各其の知るを以て、其の害とする所を去つて利とする所に就く。習慣や故實は隨ふべきものでなく、器械は因るべきものではないから、先王の法度は移り易ることがある。

舜が父に告げないで娶つたのは古禮ではない。文王が長子の伯邑考をおいて武王を立てたのは古制ではない。文王が長子の伯邑考をおいて武王を立てたのめておき、殷人は堂上の兩柱の間に停めておき、周人は西階の上に停めておく。此は禮の同一でない例である。有虞氏は瓦棺を用ひ、夏后氏は瓦を累ねて土を蔽ひ、殷人は槨を用ひ、周人は柩衣に羽の飾を置く。此は葬の同一でない例である。夏后氏は室中で夜半に祭り、殷人は堂上で平旦に祭り、周人は庭中で日出に祭る。此は祭の同一でない例である。堯は大章、舜は九韶、禹は大濩、湯は大濩、周は武象を作つた。此は樂の同一でない例である。故に、五帝は道を異にして德は天下を覆ひ、三王は事を殊にして名が後世に傳はる。此等は皆時變に因つて禮

樂を作つたので、譬へば師曠が琴柱を動かして絃の調子を合はせる樣なもので、定められた法度に從ふのではない。故に、禮樂の情に通ずる者が能く制作するのは、中に根本を握んで居て、法度の行はれる所を知つてるからである。魯の昭公が己の乳母を愛したので、死んだ時其の爲に喪に服したから、乳母の忌服が出來た。陽侯が蓼侯を殺して其の夫人を竊んだので、大饗の時に夫人を置く禮を廢した。此の樣に先王の制度でも宜しくなければ之を廢し、末世の事でも善ければ之を用ひるのである。それ故、禮樂は始めから一定したものではないから、聖人は自ら禮樂を制して禮樂に制せられはしない。

國を治めるのには常道があつて民を利するのを本とし、政敎には常經があつて令の行はれるのを上とする。苟も民を利すれば古を法とする必要はない。苟も萬事に都合がよければ舊に循ふ必要はない。夏・殷二朝の衰へた時は、法を變じなかつたので亡び、三代の起つた時は前代を沿襲しなかつたので王となつた。故に、聖人は時に應じ俗に隨つて法や禮を變化し、衣服や器械は各便宜に從ふのである。故に、古制を變じたとて、誹ることもできず、故俗に循つたとて賞めたことでもない。百川は源を異にしても皆海に入り、百家は業を殊にしても皆治を務めるので

ある。王道が缺けて詩が作り、周室が廢れ禮義が壞れて春秋が作つた。詩や春秋は學の美なるものであるが、皆衰世に造られたものである。儒者は之に循つて世を敎導するが三代の盛には及ばない。詩や春秋を古の道として貴ぶが、未だ詩や春秋の作られなかつた時があるのである。缺けた者を道とするよりは全いものを道とする方がよい。先王の詩書を讀むよりも其の言を聞く方がよい。其の言を聞くよりも、其の本意を知る方がよい。本意は言はうとしても言ひあらはせるものではない。故に言葉で說明の出來る道は眞の道ではない。

周公が父の文王に事へた時は、專斷の行なく、何事も父の命を請ひ、身は衣に勝へぬ樣であり、言は口から出ぬ樣であつた。文王の爲に物を捧持する時は婉順にして敬愼の心を失はなかつた。能く子たる道を盡くしたものである。武王が崩じ成王が幼少であつた時、周公は文王の業を繼ぎ、天子の位を履み、天下の政を聽き、夷狄の亂を平らげ、管蔡の罪を誅し、南面して諸侯を朝せしめ、誅賞制斷して顧問することなく、威は天地を動かし、名は四海を懾れさせた。能く武をあらはしたものである。成王が成長した時、周公は圖籍を授け政を歸し、北面して臣となつて之に事へ、命を請うて爲し、申上げてから行ひ、擅恣の志なく、矜伐の樣子がなかつた。

能く臣たる道を盡くしたものだ。一人の身で三變したのは時に應じたのである。然るに君は屢世を易へ、國は屢君を易へ、人は其の位に因つて好惡の情を滿たし、其の威勢を以て嗜欲に供して居るのに、一定した過去の法や禮を用ひて時に應じ變に臨まうとしても、時宜に適しないことは明らかである。故に聖の由る所を道と曰ひ、爲す所を事と曰ふ。道は鐘や磬の調子が一定不變ないのに似てる、事は琴や瑟の每絃調子を變へるのに似てゐる。故に法制禮義は人を治める道具であつて、治を爲すものではない。故に仁義を經紀とすることは萬世不變であるが、人の才を考へ時に其の行を省みて善い者を用ひる方法などは每日變じても差支ない。天下に常法などはあるものではない。世事に合し、人道を得、天地に順ひ、鬼神に順へば正しく治めて行かれるのだ。

古は人は醇厚で、工は堅緻の器を作り、商は詐らず、女は貞正であつたから、政敎で化し易く、風俗は移し易かつた。今世は德が益〻輕薄になつた。古の法で今の民を治めるのは銜(くつわ)も鞭もなくて騂馬を御する樣なものだ。昔、神農は制令なくとも民が從つた。堯舜は制令はあつたが刑罰はなかつた。夏后氏は言に負くことはなかつた。殷人は言葉で誓つた。

周人は儀式をして盟つた。只今の世は詬(はぢ)を忍んで辱を輕んじ、利を貪つて羞恥心が少ない。神農の道を以て之を治めようとすれば必ず亂れる。堯の時の伯成子高は諸侯となることを辭して耕したので、天下の人が之を尊んだ。今の人が官を辭して隱退すれば鄕里の下等の人になる。どうして同じ行ができよう。古の兵は弓劔だけであつた。木矛に鐵の刄がなく、長戟に鋒がなかつた。後世の兵は城を壞る道具で攻め、塹(ほり)や天幕で守り、弩を連ねて射、刄を左右に著けた車で鬪ふ、古の國を伐つ者は幼者を殺さず老人を捕へなかつた。古は義とされた事が今では笑はれる。古は榮とされたことが今では辱とされる。古は治を致した方法が今では亂を起す方法となる。神農や伏羲は賞罰を施さなかつたが、民は惡を行はなかつたけれども、政を立てる者は法を廢して民を治めることはできない。舜は武の舞をさせて有苗を服したりれども、征伐する者は甲兵を釋てて强暴を制することはできない。此に由つて見れば法度は民俗を諭して緩急を調節するものである。器械は時變に因つて適宜なものを定めたのである。聖人が法を作つて萬民が制抑され、賢者が禮を立てて不肖者が拘束される。法に制せられる民は與に遠く行くことはできない。禮に拘はる人は變に應じさせることはできない。淸濁の別を知らない者は音を調

べさせることはできない。治亂の源を知らない者は法を作らせることはできない。必ず獨で聞く耳と獨で見る目とがあつて始めて道を擅にして行ふことができる。殷は夏を變じ、周は殷を變じ、春秋は周を變じた。三代の禮は不同である。どうして古に從はう。大人が作れば弟子が之を遵行するが、法治の由る所を知れば時に應じて變るし、法治の源を知らなければ古に循つても今を亂す結果になる。世の法籍は時と與に變じ、禮義は俗と與に易る。學者は先例に循つて業を襲ぎ、典籍に據つて舊い敎を守り、此でなければ治まらないと思つてる。之は四角の栓を圓い穴に充てがふ樣なものだ。適當なものを得て固くはめることは出來ない。今、儒者墨者は、三代文武を稱するが行はない。是は行はないことをいふのである。今の時世を非とするが改めない。是は非とすることを行ふのである。口には其の是とすることを稱し、身には其の非とすることを行ふから、終日思慮を盡くしても治に益なく、神身を勞しても君主の補にはならないのである。世の畫工が鬼魅を描くことを好んで狗馬を描くことを嫌ふのは何故かといふと、鬼魅は世に居ないが、狗馬は毎日見るもので巧拙がすぐわかるからである。儒墨がそれだ。危を存し亂を治めることは智者でなければできないが、先例を言ひ古を稱することは愚者でも十

分できる。故に聖王は用ひられぬ法を行はず、明主は驗のない言を聽かないのである。

天地の氣は和より大なる者はない。和とは陰陽が調ひ晝夜が平分することだ。萬物は春分に生じ秋分に成る。生ずると成るとは必ず和の精氣を得る。故に聖人の道は剛柔寬猛を兼ね用ひる。太だ剛ならば折れ、太だ柔ならば卷く。聖人は剛柔の間に在つて道の本を得る。積陰は沈み積陽は飛ぶ。陰陽が相接して能く和を成す。繩(すみなは)は卷いて懷中に入れられるが、之を引き伸ばせば直くなつて直線の標準となる。故に聖人は身を以て之を行ふ。長くても橫ならず、短かくても窮まらず、直くても剛ならず、久しくても忘れることのないのは繩に限る。故に恩は移り變ると懦になる。懦になると威がなくなる。嚴は移り變ると猛になる。猛になると和を失ふ。愛は移り變ると縱になる。縱になると令が行はれなくなる。刑は移り變ると虐になる。虐になると親(したしみ)がなくなる。昔齊の簡公は國家の統治權を釋てて專ら其の大臣に任せたので、將や相は威を假り勢を擅にし、臣下が黨を作つて君の命令は行はれなかつたから、陳恆等の爲に殺された。簡公が亡ぼされて陳氏が之に代る樣になつたのは柔懦の結果である。鄭の子陽は剛毅で罰を好んだ。罰を受ける者があれば、執へて赦さなかつた。家臣に弓を折つた者がある。罪を以て誅せられ

ることを恐れて、國の擾亂に乘じて子陽を殺した。此は剛猛の結果である。今、道を知らない者は柔懦なる者が侵される.のを見れば 剛毅を務め、 剛毅なる者が亡びるのを見れば柔懦を務める。此は中に本主がなくて、外の見聞に誤られたものだ。故に終身安定を得ない。譬へば音律を解せぬ者が歌ふ樣なものだ。聲を濁らせれば湮(ふさが)つて繼かず、聲を清ませば力がなくて調子が外れる。韓娥・秦青・薛談・侯同・曼聲等の名人の歌になると、心に憤り內に積み、盈ちて音に發するので、律に合し人心を和げないことはない。是は中に本主があつて淸濁を定め、外に受けないで自ら法度となるからである。今 かの盲人が道を行くのを見ると、人が左といへば左へ行き、右といへば右へ行く。君子に遇へば無事に行かれるが、小人に遇へば溝へ陷る。是は目で見ることができないからだ。故に、魏の文侯は樓翟・吳起の二人を用ひて西河の地を失つた。齊の湣王は淖齒を專用して東廟で殺された。之を御する術を知らなかつたからである。 文王は呂望・召公奭の二人を用ひて王となつた。楚の莊王は孫叔敖に專任して霸となつた。之を御する術を知つて居たからである。

弦歌鼓舞して樂をなし周旋揖讓して禮を修め葬を厚くし喪を久しくして死者を送るのは孔子

の敎であるが、 墨子は之を非とした。 兼愛して賢を上(たふと)び鬼神を右(たふと)び天命を非とするのは墨子の敎であるが、 楊子は之を非とした。 性を全くし眞を保ち外物の爲に身を累はさないのは楊子の敎であるが、孟子は之を非とした。 取捨する所は人によつて異なるが、皆心に曉る所がある。故に是も非も居るべき處があつて、其の處を得れば非でなく、其の處を失へば是でなくなる。丹穴・大蒙・反踪・空同・大夏・北戶・奇肱・修股などの遠方の國國の民は、是非する所は各異なつて習俗が相反し、君臣上下夫婦父子互に相使ふことがある。此の國の是は彼の國の是として行ふ所ではない。此國の非は彼の國の非として廢する所ではない。斧斤椎鑿(つちのゝ) の類が各用途を異にする樣なものだ。」禹の時は五音を以て治を聽き、鐘・鼓・磬・鐸(ふりつづみ)を懸け(かねつづみけいすず)鞀(ふりつづみ)を置いて四方の士を待ち、令を發して「吾に道を敎へる者は鼓を擊て。吾に義を諭す者は鐘を擊て。吾に事を告げる者は鐸を振れ。吾に憂を語る者は磬を擊て。訴訟のあるものは鞀を搖かせ。」と曰つた。當時、禹は一食の間に十度起ち、一沐の間に三度髮を捉つて天下の民を慰勞した。こんな時に善を行ひ忠を效すことができなければ才が足りないのだ。秦の時には盛に土木工事を起し、民に重稅を課し、壯丁を徵發して四方の邊塞の防備に充て、道路の死人は溝で數へる程多かつた。こんな

時に忠諫すれば不祥である。仁義を口にすれば狂である。高皇帝に至つて亡絶した國家を存續し、天下の大義を唱へて、自ら劔を執つて無道を伐ち、百姓の命を助けることを皇天に祈つた。當時、天下の豪傑は野澤に身を曝し、前めば矢石を蒙り、退けば谿壑に落ち、百死を出でて一生を得て天下の權を爭ひ、武を奮ひ威を盛にして一時の運命を決した。こんな時に豐衣博帶で儒墨の道を說くならば愚者である。暴亂に勝つて海內が大に定まると、天命を受け無道を誅して天子の位を履み、劉氏の冠を造り、鄒魯の儒墨を總べ、先聖の遺敎を行ひ、天子の旗を戴き、大路の車に乘り、九旒の旗を建て、鐘を撞き鼓を鳴らし、咸池の樂を奏し、干戚を執つて舞はせた。こんな時に武を行ふ者があれば嫌疑を受ける。高皇帝の一世の間でも文武兩道は時に應じて更代して用ひられたのである。今、世の武を修める者は文を非とし、文を修める者は武を非とし、文武互に非として時世の用を知らない。此は室內の一隅を見て八極の廣大なのを知らないのだ。故に東へ向いて望めば西の牆は見えず、南へ向いて視れば北の方は見えない。唯何方へも向かなければ、見えない所はないのである。

國が存するのは道が行はれるからである。家が亡びるのは理が塞がるからである。堯は百戶

の邑も持たず、舜は錐を立てる程の土地も持たなかつたが、遂に天下を有し、禹は十人の部下もなく、湯王は七里の領地もなかつたが、遂に諸侯の王となつた。文王が岐周の間に處た時は、領地は方百里に過ぎなかつたけれども、立つて天子となつたのは王道があつたからだ。夏の桀王殷の紂王の盛な時は、人跡の至る所、舟車の通ふ所は皆其の領地であつたが、身は人に殺されて天下の笑ひものとなつたのは亡形があつたからである。故に聖人は化を見て其の結果を知る。德に盛衰があれば氣が先づ見はれる。故に王道を得る者は小さくとも必ず大になる。亡形ある者は成るとも必ず敗れる。夏の亡びる時、太史令の終古は先づ商に奔つた。三年で桀王が亡びた。殷の敗れる時、太史令の向藝(しやうげい)は先づ文王に歸した。一年で紂王が亡びた。故に、聖人は、鳴條の野で湯王が桀を擒にしたり、甲子の日に武王が紂に克つのを見ないうちに、其の存亡成敗を知るのである。今の人は彊者が勝を得ると思つて地を度り兵を計へ、富者が利を得ると思つて粟を量り金を算へるが、其の通りならば、千乘の君は皆霸王になり、萬乘の國は破亡することはない筈だ。存亡の迹がこんなに知り易ければ愚夫愚婦でも之を論ずることができる。然るに事實はさうではない。趙襄子は一の晉陽城を以て霸となつた。智伯は三晉の地を領

してゐたが擒へられた。齊の泯王は大なる齊國の君であつたが殺された。田單は卽墨の一城を以て功を立てた。故に國が亡びる時は大きくとも恃むに足らず、道が行はれる時は小さくとも輕んずることはできない。此に由つて觀れば、存の條件は道を得ることであつて大ではなく、亡の條件は道を失ふことであつて小ではない。詩に「西を顧みて周に居る」とあるのは、天が大きな殷を去つて小さな周に遷つたことを言つたものだ。國を亂す君は其の地を廣めることを務めて仁義を務めず、其の位を高くすることを務めて道德を務めないが、是は存する方法を棄てて亡びる方法を取るものだ。故に桀は焦門に囚はれた時、自ら其の行を非としないで、湯を夏臺で殺さなかつたことを後悔した。紂は宣室に拘はれた時、其の過を反省しないで、文王を羑里で誅さなかつたことを後悔した。此の二君が强大の勢を有し仁義の道を修めたならば、湯は己の罪を救ふに遑なくて、之を誅する謀などを考へはしない。若し上は三光の明を亂り、下は萬民の心を失ふならば、湯武が出なくとも、誰でも奪へる。今己を省みて愼んで德を行はうとしないで、反つて人が己を誅めるのに備へようとしても、天下には多くの湯武が居るから、一人を殺しても必ず繼いで起るものがある。且つ湯武が小弱であつて王となることのできたのは有道の爲である。桀

紂が强大であつて終に奪はれたのは無道の爲である。今、王になることを行はないで反つて奪はれることを行ふのは滅亡に趣く道である。武王が殷に克つて宮を五行山に築かうとした時、周公が「いけません。五行山は固塞險阻の地です。我が德が天下を覆へば天下の貢を納める者は道が迂回するので難儀するでせう。我に暴亂の行があるならば天下の我を伐つ者が困難するでせう。」と曰つた。此の德に依つて險を恃まない所が、周の三十六世も他から奪はれなかつたわけだ。周公は能く滿を維持したものだ。周書に「上の言は下が用ひる。下の言は上が用ひる」とある。上の言は常である。下の言は權である。此が存亡の術である。唯聖人のみが能く權を知る。

言ふことは必ず信あり、期することは必ず當るのは天下の尊い行である。直躬は己の父が他から來た羊を取つた事を證言し、尾生は婦人との約を守つて溺死した。直でも父を證言し、信でも溺死しては誰も之を貴びはしない。三軍が命を矯ることは罪過の大なる者である。然るに秦の穆公が鄭を襲はうとして周を過ぎて東へ行つた時、鄭の商人の弦高が西方へ牛を販りに行つて、秦軍に周と鄭との間で出遇つたので、鄭の君の命を矯つて牛十二頭を慰勞として贈つ

て、之を却けて鄭國を存した。故に信も反つて過となり、誕も反つて功となることがある。昔、楚の恭王が晉と陰陵に戰つて擒へられた時、楚の潘尫・養由基・黄衰微・公孫丙の四大夫が之を奪還した。恭王は懼れて正體を失つた。黄衰微が足で其の體を蹴たので王は正氣づいて、其失禮を怒り、體を奮つて起上つたので四大夫が車に載せて去つた。此は禮を失して大功のあつた例である。昔、蒼吾繞は、妻を娶つたが美しかつたので兄に讓つた。此は所謂忠愛にして行ふべからざる者である。是故に聖人は事の曲直を論ずるのに之と屈伸俯仰して一定の法度に從はない。屈したり伸びたりして、蒲葦の樣に柔弱であるが、懾れるのではない。剛强猛毅で青雲を凌ぐ志があるが、誇るのではない。時に乘じ變に應じるのである。君臣の相接する時は膝を屈して卑く拜して尊敬するのが禮である。患に迫る時は足を擧げて其の體を蹴ても天下の人が非としない。故に忠の在る所では、禮は之を難ずることは出來ない。孝子が親に事へるには顏を和らげ體を卑くし、帶を捧げ履を進めるが、其の溺れた時は髮を捽んで拯ふ。驕侮するのではない。死を救ふのである。故に溺れれば父を捽み、神に事へるには君の諱をいふのは、自然さうしなければならないからである。此が權が設けられるわけだ。故に孔子は「共に學ぶことはできるが、

道に適くことはできぬ。共に道に適くことはできても立つことはできぬ。立つことはできても權を共にすることができぬ。」と曰つた。權は聖人の獨り見る所である。故に逆つて後に合ふのを權を知ると謂ふ。合つて後に逆らふのを權を知らないと謂ふ。權を知らなければ、善が反つて惡となる。故に禮は實の華で人工的の文である。急迫の際には役に立たない。それ故、聖人は文を以て世に交はり、實を以て時宜に適する樣にする。一つの途に滯つて化することのないものではない。是の故に事を敗ることが少く、事を成すことが多く、號令は天下に行はれて之を非とするものがない。

猩猩は過去を知るが未來を知らず、乾鵲は未來を知るが過去を知らぬ。此は長處短處が違ふのである。昔、萇弘は曆術を以て周に仕へた人だ。天地の氣、日月の行、風雨の變、律曆の術に於いて通ぜぬものはなかつた。けれども、自ら車裂にされて死ぬことを知らなかつた。蘇秦は賤しい人であつた。草鞋ばきで諸侯を歷說して之を承諾させたが、自ら車裂の患を免れることはできなかつた。徐の偃王は慈惠を施し仁義を行ひ、三十二國の諸侯が來朝したが、身は殺され國は亡びて子孫が絕えた。夫種は越王句踐を輔けて、之が爲に怨を報じ恥を雪ぎ、吳王

夫差を擒にし、數千里の地を獲たけれども、君から死を賜はつた。此は皆治亂の機に通じては居るがまだ性を全くする術を知らないのである。故に、萇弘は天道を知つてるが人事を知らず、蘇秦は權謀を知つてるが禍福を知らず、徐の偃王は仁義を知つてるが時を知らず、大夫種は忠を知つてるが身を謀ることを知らぬ。聖人は何んでも知らないことはない。世を論じて事をなし、事を權つて謀をなす。それ故、之を大きく延ばせば大きくもなり、小さく縮めれば小さくもなる。今天下が亂れて、禮義は絶え、法令は廢れ、强は弱を凌ぎ、互に武力を以て他を除かんとし、君臣上下の別なく、甲冑には虱を生じ、燕雀は帷幄に巣くつて戰爭が休まない時になつて、始めて謹愼の貌をなし恭儉の禮を行へば必ず滅抑されて興つことはできなくなる。之に反して、天下が安寧で、政教は和平に、百姓は恭敬で、上下は相親しむ時になつて、始めて勇氣に誇り勇力を奮へば必ず刑罰を免れない。聖人は陰にもなり陽にもなり弱くもなり强くもなる。時に隨つて動靜し事に因つて功を立てる。物が動けば其の翻轉を知り、事が萌せば其の變化を察る。化すれば之に象り、運れば之に應じる。それ故一生行つても困しむことはない。故に、事には行へて口に言へない者がある。口に言へて行へない者がある。爲し易くて成り難い者がある。成り

難くて敗れ易い者がある。行へて口に言へないといふのは取捨である。口に言へて行へないといふのは僞詐である。爲し易くて成り難いといふのは事である。成り難くて敗れ易いといふのは名である。此の四策は聖人が獨見て意を留めるものである。

寸を屈して尺が伸びれば、聖人は之を爲す。小を枉げて大が直くなれば、君子は之を行ふ。周公は弟を殺したが義を以て其の缺を補ひ、桓公は國を爭つたが功を以て惡を滅し、共に賢人と曰はれる。今、人の小過を以て其の大美を掩へば、天下に聖王賢相はなくなる。故に、目の中に疵があつても視力に差支なければ灼いてはならぬ。喉の中に病があつても呼吸に差支なければ穴をあけてはならぬ。河邊には塚が澤山あるが、猶平地だといふ。水が激して波を興せば高低の差は一丈もあるが、猶水は平らなものだといふ。昔、曹子は魯の將となつて三戰して勝たず、地を千里も取られた。若し曹子が後事を考へずに陳中で自殺したならば、敗軍の擒將で終つたらう。彼は敗軍を羞ぢないで、功なくして死ぬのを耻ぢた。柯の盟の時に三尺の刄を引いて桓公の胸に當て、三戰で取られた土地を一朝で取り返し、勇名は天下に聞え、功を魯國に立てた。又管仲は公子糾を輔けて成功しなかつたから智とは謂はれない。遁げて公子糾の爲に死

ななかつたから勇とは謂はれない。桓公の捕虜になつて恥とも思はなかつたから、貞とは謂はれない。此の三行に當る者は、布衣の士も友とせず、人君も臣としない。しかし、捕虜たることを免されて齊國の政を立て、諸侯を九合して天下を一匡した。若し管仲が軀を損てて後事を顧みなかつたなら、どうしてこの覇功が立てられよう。今、人君が其の臣を論ずるのに、其の大功を謀り大行を總べないで其の小善なる忠を求めるのは賢人を失ふ道だ。故に人に厚い德があるならば小節を問ふな。大きな譽があるならば小事を疵とするな。牛の足跡の溜水には大きな魚は居ない。蜂の巣の中には大きな卵はない。小形は大體を包むことができないからだ。人には短所のない者はないから、大體がよければ小過があつても邪魔にはならぬ。若し大體がわるければ小善があつても大に用ひることはできない。顏涿聚は梁父の大盜であるが齊の忠臣となつた。段干木は晉の仲買人であるが文侯の師となつた。孟卯は其の嫂を妻として五子を生んだが魏の相となつて其の危を安んじ其の患を去つた。景陽は酒に溺れ髪を被り婦人を愛したが諸侯を威服した。此の四人は皆短所があつたが功名の滅びないのは其の道を得たからである。季襄陳仲子の二人は節を立て行を高くし、汚君の朝に入らず、亂世の食を食はず、遂に餓死し

て、國家の亡絶を存續することのできなかつたのは小節を用ひて大道を廢したからである。故に小謹は成功なく、行に缺陷ある者は衆に容れられない。體の大きい者は節が長く、足の大きい者は行くことも遠い。」古から今までの中に、五帝三王でもまだ完全の行をする者はない。故に易に「小過は亨る。貞に利なり。」とあるが、人には過のない者はない、大きな過を欲しないのだといふ意味である。堯舜湯武は人君の中の盛んなものである。齊桓晉文は五覇の中の勝れたものである。しかし、堯は子を愛さないといはれ、舜は父を臣にしたと謗られ、湯武は君を放ち君を弑し、五覇は暴亂を謀つた。それ故、君子は完全を一人に責めない。自ら方正でも人には望まず、自ら廉直でも人には迫らず、自ら博通でも人を訾らず、自ら文武を備へても人には求めない。人に求めるのは力相應のことであり、自ら修めるのは道德を以てする。力相應の事を人に求めれば償はれ易く、道德を以て自ら修めるのは爲し難い事だ。爲し難ければ行は高く、償はれ易ければ要求は滿足される。」夏后氏の璜も明月の珠も無疵ではないが、天下の人が之を寶とするのは、其の小惡が大美を妨げるのに足りないからである。今、人の短所を記して長所を忘れ、そして賢者を天下に求めてもむづかしい。百里奚は牛を飼ひ、伊尹は料理をし、太公は

獸を屠り、甯戚は商調で歌つたが、其の美なる所は失はれなかつた。衆人は其の地位が卑いのと仕事の賤しいのを見て、大略のある人とは知らないで愚人だと思つたが、後天子の三公となり諸侯の賢相となるに及んで、始めて衆人に異なることを信じたのである。料理人・屠殺者・囚人・牛飼から引き擧げて、水火で洗ひ清め、朝廷の上に置いて三公の位を與へて、内は國家に慙ぢず外は諸侯に愧ぢないのは、符勢が君の心に合つたからである。故にまだ功のない中に其の賢を知るのは堯が舜を知つたのと同じだ。功成り事遂げて後其の賢を知るのは市人が舜を知つたのと同じだ。是の爲に賢を度る術を釋てて、之を民間に求めるならば人を失ふことが必ず多いだらう。其の故は、求めはしても人を取る術を知らないからである。

物が相類すると世主は惑はされる。性質形狀が相似ると衆人は迷はされる。故に狠者は自分の考で事を行ふ處は知に類するが知ではない。愚者は裁斷のできない所は仁に類するが仁ではない。贅者は危難を畏れない所は勇に類するが勇ではない。人の相違が玉と石か或は葵と莧位なら、人を論ずることは容易である。人を惑はすものは芎藭と藁本とである。蛇牀と欒蕪とである。此は皆相似る者である。故に鈹工は鈹の莫邪名鈹の名に似た者に惑はされるが、良工は其の

種類を見分ける。玉工は玉の碧盧玉に似た石に似たものに迷はされるが、猗頓は其の性質を見誤らない。闇主は姦臣小人の君子と紛らはしい者に惑はされるが、聖人は能く微を見て明を知る。故に、蛇は一尺首を擧げれば長短がわかる。象は其の牙を見れば大小がわかる。薛の燭庸子は鈹の一小部を見れば利鈍を識り、臾兒・易牙は淄澠二水の水を混合させても一口嘗めて、甘苦を知る。聖人は人の一行を見れば賢愚がわかる、孔子は齊から廩丘の地を貰はなかつたが、終に人の刀鉤を盜まなかつた。許由は天子を辭したが、終に封侯を得ようとしなかつた。本來、人が、火傷したことがなくとも火を握らうとしないのは、火が燒くことを見てゐるからだ。負傷したことがなくとも刄を握らうとしないのは、刄が害することを見てゐるからだ。此に由つて觀れば、見たことで未發のことを論ずることができ、小節を觀れば大體を知ることができる。故に人物を論定する道は、その人が貴ければ其の擧用する所を觀、富めば其の施與する所を觀、窮すれば其の受けぬ所を觀、賤しければ其の爲さぬ所を觀、貧しければ其の取らない所を觀、困難を經過するのを視て其の勇を知り、喜樂の情を動かして其る守る所を觀、財貨を委せて其の仁を論じ、恐懼させて其の節を知るのである。さうすれば人の眞相が十分にわかる。

古の善く賞する者は、費やす所が少くて衆を勸め、善く罰する者は刑が少くて姦が止み、善く與へる者は用ひる所が少なくて徳とされ、善く取る者は入ることが多くて怨まれることがない。趙襄子は晋陽の圍の解けた時に、有功者五人を賞して高赫を第一とした。侍臣が曰ふには、「晋陽の難に赫は大功がありません、然るに受賞者の第一となるのはどういふわけですか。」襄子は答へて「晋陽が圍まれて、國家が危くなつたので、群臣は皆吾を驕侮する心があつたのに、赫だけは君臣の禮を失はなかつたからだ。」と曰つた。故に一人を賞して天下の人臣で忠を其の君に盡くさない者はなくなつた。此は賞が少なくて衆を勸めるものだ。」齊の威王は大鼎を庭に設けて、無鹽の令を責めて「汝を譽める報告を毎日わしは受取つたが、汝の治績を視ると、田野は荒れ、倉稟は空虛で、牢獄は滿員である。汝は姦を以て我に事へる者だ。」と曰つて之を烹た。齊は此の爲に三十二年間、道路の遺失物を拾得する者のない程によく治まつた。此は刑が少なくて姦が止んだものである。」秦の穆公が出遊した時、車が敗れて馬が逃げた。穆公が追つて岐山の南へ行くと、野人が之を得て殺して食つて居た。穆公は「駿馬の肉を食つて酒を飲まないと身を傷める。汝等が身を傷めるといけない。」と曰つて皆の者に酒を飲ませた。一年たつて穆公

は晋の惠公と韓原で戰つて、晋軍に圍まれて捕へられ相になつた、此の時、かの馬の肉を食つた者三百餘人が皆死を決して穆公の爲に車の下で戰つて、遂に晋に克つて惠公を虜にして歸つた。此は用ひる所が少なくて徳とされたものである。」齊の桓公が征伐しようとした時甲冑と武器が不足した。重罪人には三甲一戟を出させ、輕罪人には罪の大小によつて金を出させ、訟へて勝たない者には一束の箭(やだけ)を出させた。百姓が皆悅んで之に應じた。そこで箭を矯(た)めて矢とし、金を鑄て刄とし、不義を伐ち、不道を征し、遂に天下に覇となつた。此は入ることが多くて怨まれることのないものである。」故に、聖人は民の好む所に因つて善を勸め、民の惡む所に因つて姦を止める。故に、一人を賞して天下が之を譽め、一人を罰して天下が之を畏れる。故に、至賞は費やす所がなく、至刑は濫な所がない。孔子が少正卯を誅すると魯國の邪が止み。子產が鄧析(とうせき)を誅すると鄭國の姦がやんだ。之は近を以て遠を諭り、小を以て大を知つたのである。故に、聖人は守る所が簡約で治める所が廣いと謂ふのは此のことをさすのだ。

天下に善をするより易いことはなく、不善をするより難いことはない。善をすると謂ふのは靜で無爲なことだ。不善をすると謂ふのは躁いで多欲なことだ。人は情に適し餘りを辭して誘

惑せられることがなければ性を修め眞を保つて己を變することがない。故に善をするのは易いと曰ふのだ。城郭や險塞を乘り踰え、符節や管籥や印章を盜み、位を簒ひ、君を弑し、命を矯め、人を誣ひることは、人の本性ではない。故に不善をするのは難いといふのだ。人が罪を犯して牢獄に入れられたり刑戮を受けたりするのは、嗜欲が際限なく、法度に循はないからである。天下に布告して、「墓を發く者は誅する。竊盜する者は刑する。」と曰つてゐるが、此は政柄を執る者の司る所である。法令は姦邪に對して網を張り、役人が之を追捕するから、愚夫愚婦でも姦を爲し禁を犯せば免れられないことを知つてゐる。然るに不才の者は其の欲を制しきれずに、死亡の罪を蒙つて刑戮の羞を被り、立秋後の刑を行ふ時節になると、刑を行ふ人が絶え間なく來て、市で殺さる人は血が路に流れる程澤山ある。何故かといふと、財利を得るのに迷つて死亡の患が見えないからである。今戰爭して兩軍が對陣してる時、大將が令を下して、「首を斬れば爵を授ける。敵に屈した者は腰斬する。」と曰つても、隊中の士卒は皆進んで敵の首を斬ることはせずに、退いて腰斬の罪を受ける。是は未定の死を去つて必定の死へ行くのである。故に、利害の相反するのと禍福の相接するのとは、審に知らなければならない。

事は、之を欲して居ながら之を失ふ樣なことをし之を避けようとして居ながら之に就く樣なことをすることがある。楚人に船に乘つて大風に遇つた者があつて、波が來ると自ら水に投じた。彼は生を貪り死を畏れないのではないが未定の死に惑うて反つて生を忘れたのである。人の嗜慾も此に似てゐる。齊人に金を盜む者があつた。人の出盛る時、市へ行つて金を取つて逃げた。役人が、「どうして市中で金を盜んだのか」と問ふと、彼は「ただ金を見ただけで、人を見なかつた」と答へた。心に欲する所があれば行爲の如何を忘れるものだ。それ故、聖人は動靜の變を審にし、受與の度を適へ、好憎の情を理め、喜怒の節を和する。動靜が審ならば患に遇はない。受與が適へば罪に累はされない。好憎が理まれば憂に近づかない。喜怒が節あれば怨に犯されない。故に、道に達してゐる人は、得ることを苟もせず、禍を却けず、其の有するものは棄てず、其の有するものでなければ索めず、常に滿ちて溢れず、常に虛しくて足り易い。今、霤水は少ないが壺や榼を溢らすことができる。江河の水は多いが漏る扈を實たすことはできない。人心も是に似てゐる。自ら道術法度に從つて、食は饑を充たし衣は寒を禦ぐに止めるならば、七尺の體を養ふに十分である。若し道術法度に從つて自ら儉約にしなければ、萬乘の位を得ても

尊いとは思はれず、天下の富を得ても樂しいとは思はれない。採叔敖が三度令尹の職を去つても憂色のなかつたのは爵祿に累はされないからである。楚の佽非が兩蛟に船を圍まれても心を動かさなかつたのは怪物に驚かされないからである。聖人は心が平易で內に守る所があつて、外物は之を惑はすことができないのである。醉ふ者は俯して城門を入つて七尺の小門だと思ひ、大河を超えて狹い小溝だと思ふ。酒が其の心を濁らすからである。怯者は、夜、立札を見て化物だと思ひ、臥てゐる石を見て虎だと思ふ。懼れが其の氣を奪ふからでさる。天下の怪物を無いと考へることなどは到底できない。

雌雄が相接し陰陽が相交はつて、羽のある者は鵝鷺となり、毛のある者は駒犢となり、柔かい者は皮肉となり、堅い者は骨角となるが、人は怪しまない。水には蠅蜄を生じ山には金玉を生ずるが人は怪しまない。古い槐は火を生じ、長い月日を經た血は燐となるが人は怪しまない。然るに山から山の精の梟陽が出、水から水の精の罔象が出、木から木の精の畢方が出、井から土の精の墳羊が出ると人が之を怪しむのは、見聞が少なくて物を識ることが淺いからだ。天下の怪物は聖人が獨見る所である。利害の反覆は知者が獨明らかに通ずる所である。同異の疑

はしいのは世俗の惑ふ所である。見る所は海內に布かれず。聞く所は百姓に明らかにすることができないから、聖人は、鬼神吉凶に因つて之が爲に禁戒を立て、形を總べ類を推して之が爲に象を變じて見せるのである。如何してそれが分るかといふと、世俗の言に「先祖を祭るには彘を上牲とする。死人を葬るには褒を棺に入れるな。刄を以て戲れると先祖に肘を推される。敷居を枕にして臥ると鬼神に首を踏まれる。」と曰ふが、此等は皆法令には見えず、聖人の口傳しないことである。先祖を祭るのに彘を上牲とするのは、彘が他の獸類より勝れてゐるからではない。然るに神が唯之を饗けるのは、彘は家に畜つてあるもので得易いと思ふからである。故に便利なので之を尊ぶのである。褒を棺に入れるなといふのは、綿や絹で十分溫煖だといふのではない。褒は得難く値が貴いから後世に傳ふべき物で、死者の役には立たないが生者を養ふのにといと思つたからである。故に之を使用する爲に之を忌んだのである。刄を以て相戲れると先祖に肘を推されるといふのは、刄を以て相戲れれば必ず過失が起る。過失で互に傷つけば其の患は必ず大きい。血を踏み涉る樣な大爭鬪もなく小さな事で自ら刑戮に陷る事は愚人は避けようとしないものだ。故に先祖に因つて其の心を恐れさせたのである。敷居を枕にして臥ると鬼神

が其の首を履むといふのは、元來鬼神は變化自在で、戸牖がなくとも出入できるから、履むことのあらう筈はないが、戸牖は風氣の往來する所で、風氣は陰陽の相爭ふ者だから、之に遭へば必ず病氣になるので、鬼神に託して之を誡めたのである。凡て此の種類の事は皆書物に記載して官府に藏めることのできないものである。故に吉凶を以て之を明らかに示すのである。愚者が其の害を知らないから、鬼神の威を借りて其の教を知らせたもので其の由來は遠いのである。然るに愚者は吉凶を信じるが、何事にも自說を通す狠者は之を非とする。唯有道の者は能く其の心に通じて居る。

今、世間で井竈門戸箕箒臼杵等を祭るのは其の神が祭を饗けると思ふからではない。絕えず其の恩德を受けて居るからである。それ故、時時祭つて其の恩德を見はすので、功を忘れない爲である。石に觸れて湧き出た雲の小片が相合して朝の終らぬ中に雨を天下に下すのは唯泰山のみである。三年の大旱にも流を絕たず、澤は百里に及んで草木を潤すのは唯江河のみである。それ故、天子は次第を以て之を祭る。故に、人を難から免かれさせた馬は、死ねば、帷を衾として之を葬る。人に德を與へた牛は、死ねば、大車の箱を薦(しきもの)にして之を葬る。牛馬の功ある者

すら忘れてはならぬ。人は尙更である。此が聖人の仁を重ね恩を累ねるわけである。故に、炎帝は火を作り、死んで竈の神となり、禹は天下の爲に勤勞し、死んで后土の神となり、后稷は農業をなし、死んで五穀の神となり、羿は天下の害を除き、死んで災害を禳ふ神となつた。此が鬼神の出來たわけである。

北楚に任俠を行ふ者があつた。其の子孫が屢諫止したけれども聽かなかつた。縣に賊が居たので、官から其の家を搜索された。その爲に法を破つて居たことが發覺したから、夜驚いて逃げた。追ひ付かれた時、嘗て恩を施しておいた者が、皆此者の爲に戰つた。免れて家に歸つて其の子に向つて、「汝は屢吾が俠を行ふことを止めたが、俠を行つた爲に難に臨んで身を免れることができたのだ。だから諫めても用ひられない。」と曰つた。此は難を免かれることを知つて、難を無くすることを知らないのだ。此の樣に事を論ずるのは惑と曰はなければならぬ。」宋人に子を嫁する者があつた。其の子に告げて曰ふには、「是で嫁入が濟んだものと思ふことはできない。離婚されることがあるかも知れないから、財物を私藏しなければならぬ。私藏して富めば再婚は容易だ。」其の子は父の計を聽いて竊(ぬす)んで之を私藏した。其の夫は其の盜むことを知

つて離婚してしまつた。其の父は之を悪とは考へず、反つてよくやつたと思つた。此は離婚の爲に財を私藏することを知つて財を私藏することは離婚される結果になることを知らないのである。此の樣に事を論ずるのは悖ると曰はなければならぬ。」今、雇はれて物を車に載せる者は車や牛の力の極限まで積んで、軸が折れない爲に、其の上に添木をするが、添木の重さで軸の折れるのを速めることを知らないのである。楚王は玦を佩びて兎を逐つた時走ると其の玦が破れるので、二つの玦を佩びて豫備としたら、二つの玦が相觸れて、破れることが愈、疾かつた。亂國の治は此に似た所がある。

鵠は目が大きいけれども視力は鼠に及ばない。蚿は足が多いけれども走ることは蛇に及ばない。物には、本來、大きくても小さいのに及ばないものがある。多くても少ないのに及ばないものがある。強くて弱く、弱くて強く、危くて安く、存して亡びることになると、聖人でなければ、誰にも觀ることはできない。大小尊卑などは論ずる價値がなく、唯道の在る所が貴いのである。どうしてそれが分るか。天子が廟堂を出て郊亭に居れば、九鄉は趨り、大夫は走り、坐る者は伏し、倚る者は恭しくする。此の時に廟堂の方の人は、冠を脱ぎ、劍を解き、帶を緩

めて寢てゐる。郊亭が大きくて廟堂が狹いからではない。天子が居るからである。天道の貴いことは天子が尊ばれるどころではない。どこに在つても衆が之を仰ぐ。冬籠りする蟲の穴でも鵲の巢でも皆齊しく天に向ふのは、至和があるからである。帝王が誠に能く天道を體し至和に合すれば禽獸草木迄も其の恩澤を被らない者はない。人民は言ふに及ばぬ。

第十四　詮　言　訓

虛無無爲の道に就いて
其の效驗をのべたもの

天地を同體とし、渾沌として純樸の狀態をなし、未だ何物も造られぬ時に物を作成すのが太一である。萬物は唯一絶對の本源から出るが、出來たものは各異ふ。鳥がある。魚がある。獸がある。之を方物といふ。方は類を以て別れ。物は群を以て分れるものである。性命は不同だけれども、皆有形なもので、隔を設けて相通ずることなく、分れて萬物となつて、本源に反ることができないのである。故に動けば之を生と謂ひ、死ねば之を窮といふ。皆物である。物でなくて物を創造する者ではない。物を創造する者は萬物の中にはない。天地の初に當つて、人は無から生じて有形なものとなつた。形が有れば物に制せられる。能く生れ出た無に反つてまだ形がなかつた狀態にあるのが眞人である。眞人はまだ始めから太一と分れないものである。聖人は名の主とならず、謀の源とならず、事の責任者とならず、智の所有者とならず、無形に藏れ、無迹を行き、無朕（きざしの無いところ）に遊び、福の先とならず、禍の始とならず、虛無に居て、已むを得ざる時に動く。福を欲する者は禍を招くことがあり、利を欲する者は害に遭ふことがある。故に無爲にして安寧な者は安寧であるべき道を失へば危くなる。無事にして治まる者は治まるべき道を失へば亂れる。星は天に列つて明らかだから人が之を指す。義は德に列

つて見はれるから人が之を視る。人の指さす者は動けば章（かたち）にあらはれ、人の見る所は行へば迹がのこる。動いて章にあらはれれば詞に上り、行つて迹がのこれば議せられる。故に聖人は明を無形で掩ひ、迹を無爲の中に藏すのである。王子慶忌は劒で刺殺され、羿は桃の杖で擊殺され、子路は衞で葅（しほづけ）にされ、蘇秦は辯口の爲に死んだ。人は其の長所を貴び短所を賤しまないものはない。しかし、皆その貴ぶ所に溺れて賤しむ所に拯はれる。貴ぶ所は有形で賤しむ所は無朕だからである。故は、虎豹は强い爲に弓で射られ、蝯狖（さる）は捷（はや）い爲に繩で縛られる。人が能く其の賤しむ所を貴び、其の貴ぶ所を賤めば、與に至論を語ることができる。

自ら信ずる者は毀譽を以て遷すことはできない。足ることを知る者は勢利を以て誘ふことはできない。故に性の眞相を知る者は性のしようとしないことはしない。命の眞相を知る者は命のどうともできないことは憂へない。道に通ずる者は何物も其の和を亂すことはできない。詹何が「身が治まつて國が亂れた者を聞いたことがない。身が亂れて國が治まつた者を聞いたことがない」と曰つたが、矩が正しくなければ方形は作られず、規が正しくなければ圓形は作られないと同じく、身は事の規矩だから、已を枉げて能く人を正す者はないのである。天命に原

づき、心術を治め、好憎を理め、情性に適すれば治道は行はれる。天命に原づけば禍福に惑はず、心術を治めれば妄に喜怒せず、好憎を理めれば無用な物を貪らず、情性に適すれば、欲が度を越えない。禍福に惑はなければ動靜が理に循ふ。妄に喜怒しなければ賞罰が正しく行はれ、無用な物を貪らなければ欲の爲に性命を害することはない。欲が度を越えなければ性を養ひ足るを知る。此の四つは外に求めず、人に借りず、已に反求して得られるものである。

天下は知を以て治めることはできない。慧を以て識ることはできない。事を以て治めることはできない。仁を以て懷けることはできない。強を以て勝つことはできない。此の五つは皆人才だ。德が盛でなければ一つでも成すことはできない。德が盛ならば五つが皆成る。五つが見はれれば德の立つ所がなくなる。故に道を得れば愚者も餘力あり、道を失へば智者も力が不足する。水を渡るのに、游泳術を知らなければ強くとも必ず沈む。游泳術を知れば羸くとも必ず渡れる。船に乘れば尙のことである。

國を治める本は民を安くするのに在る。民を安くする本は用を足すのにある。用を足す本は時を奪はぬのに在る。時を奪はぬ本は事を省くのに在る。事を省く本は欲を節するのに在る。

欲を節する本は性に反へるのに在る。牲に反へる本は飾を去るのに在る。飾を去れば虛である。虛ならば平である。平は道の素である。虛は道の舍である。能く天下を有つ者は必ず其の國を失はぬ。能く其の國を有つ者は必ず其の家を失はぬ。能く其の家を治める者は必ずその身を遺れない。能く其の身を修める者は必ず其の心を忘れない。能く其の心に原づく者は必ず其の性を虧かない。能く其の性を全くする者は必ず道に惑はない。故に廣成子は「愼んで汝の內を守り、周く汝の外を閉ぢよ。多く知れば敗れるものだ。視るな。聽くな。神を抱いて靜かならば形は自然に正しくなる。」と曰つた。已に得る所なくして能く他を知る者はないのである。故に易に「囊を括る。咎もない。譽もない。」とある。

能く覇王の業を成す者は必ず勝を得る者である。能く敵に勝つ者は必ず强い者である。能く强い者は必ず人力を用ひる者である。能く人力を用ひる者は必ず人心を得る者である。能く人心を得る者は必ず自得する者である。能く自得する者は必ず柔弱である。强は已に及ばぬものには勝てるが、已と同等の者に向へば抵抗される。柔は已に勝る者に勝つ。其の力は度られない。故に能く衆人の勝つ能はざる道を以て大勝を成すことは唯聖人だけにできることだ。

善く游ぐ者は舟を刺すことを學ばないで能く之を用ひ、筋力の強い者は馬に騎ることを學ばないで能く之に乘る。天下を輕んずる者は身が物に累はされないから、能く之に處る。太王亶父が邠に處た時、狄人が之を攻めた。皮幣珠玉を與へても聽さなかつた。そこで父老に告げて岐周に徙つた。百姓は幼を携へ老を扶けて之に從ひ遂に國を成した。此の意を推せば四世で天下を有するに至つたのは當然だ。

天下を治める仕事に自ら當らない者は必ず能く天下を治める者だ。雨露霜雪が萬物を生殺して、天は何もしないけれども、人は猶天を貴ぶ。文書に據り法度を提げて官民を治める者は役人で、君は何もしないけれども、人は猶君を尊ぶ。地を辟き草を墾つたのは后稷で、河を決し江を濬くしたのは禹で、獄を聽き中正を得しめたのは皐陶であるのに、聖の名を有する者は堯である。故に道を得て御すれば、己は無能でも能者が己の用をする。其の道を得なければ伎藝が多くとも益はない。

船を方べて江を濟る時、側から、人の乘つてゐない船が來て、衝突して之を覆へすならば、忌忌しいとは思ふが、必ず怨みはしない。人が一人でも乘つて居れば、彼方へやれとか此方に

寄れとか謂ふ。再三呼んで應じなければ、必ず其の人を罵るだらう。前には怒らないで今怒るのは、前は虛で今は實だからである。人が能く己を虛にして世に遊べば誰も訾るものはない。故に道を釋てて智に任ずる者は必ず危く、術を棄てて才を用ふる者は必ず困しむ。

多欲を以て亡びる者はあるが、無欲を以て危くなる者はない。治めようと思つて亂れる者はあるが、常を守つて失ふ者はない。故に、智は患を免れられるものでなく、愚は失ふに至るものでないから、安んじて其の分を守り其の理に循ひ、失つても憂へず得ても喜ばぬのである。故に、成つても自ら爲したのではなく、得ても自ら求めたのではない。入る者は受けるが進んで取りはしない。出る者は授けるが進んで予へはしない。天は春になれば草木を生じ、秋になれば枯らすが、生ぜられた者も德とせず、枯らされた者も怨まない。此の樣になれば道に近い。

聖人は誹られる樣な行はしないが、他人が己を誹るのを憎まない。譽めるに足りる德を修めてゐるが、他人が己を譽めることを求めない。禍の來ない樣にはできないが、己は禍を迎へないと信じてゐる。福を來させることはできないが、己は福を却けないと信じてゐる。禍が來ても己が求めた結果でないから、困窮しても憂へない。福が來ても己が求めた結果でないから、

榮達しても矜らない。禍福は己の自由にならないことを知つてるからである。故に閑居して樂しみ、無爲にして治る。

聖人は已に有る所を守つて、まだ得ない所を求めない。まだ得ない所を求めれば、有る所の者が亡くなる。已に有る所を修めれば欲する所の者が來る。故に兵を用ひる者は、先づ敗られない樣にしておいて敵に勝つ機會を待つ。國を治める者は先づ奪はれない樣にしておいて敵を奪ふ機會を待つ。舜は此の道を歷山で修めて、海內が德化に從ひ、文王は之を岐周で修めて、天下が風俗を易へた。若し舜が天下の利に趨つて己を修める道を忘れたなら、一身を保つこともできないから、どうして一尺の地でも有つことができよう。本來、治は必ずしも亂を生じないものではないのに、專ら治を務めれば必ず危い。行は必ずしも非がないものではないのに、專ら名を求めれば必ず削られる。福は禍がないの程大きいのはなく、利は喪はないの程美なのはない。動といふ物は、損らなければ益し、成らなければ毀れ、利がなければ害がある。皆險難である。之に道るのは危い。故に秦は戎に勝つて殺に敗れ、楚は諸夏に勝つて柏莒に敗れた。故に道は勸めて利に就くべきものではなく寧んじて害を避くべきものである。故に禍のな

いのを尙んで福のあるのを尙ばない。罪のないのを尙んで功のあるのを尙ばない。聖人は思慮もしないし、準備もしない。來る者も迎へず。去る者も送らない。人は東西南北へ行つても、獨中央に立つ。故に多くの枉つた者の中に居ても其の直を失はない。天下が皆流れても、獨其の居場所を離れない。故に善を爲さず惡を避けずして天の道に遵ひ、始をなさず已を專らにせずして天の理に循ひ、豫め謀らず時を棄てずして天と合することを期し、得ることを求めず福を辭せずして天の法則に從ひ、無い物を求めず、得た物を失はず、內には不慮の禍なく外には不慮の福がない。禍福が生じないから、どうして人から害せられよう。

善を行へば人から觀られる。不善を行へば人から議せられる。觀られれば責を生じ、議せられれば憂を生じる。故に道術は進んで名を求めようとしないで、退いて身を修めようとする。利を得ようとしないで害を離れようとする。故に聖人は行を以て名を求めず、智を以て譽を現はさず、自然を法として之に循つて已は關係しない。思慮は術に勝たず、行は德に勝たず、事は道に勝たない。爲せば成らないことがある。求めれば得られないことがある。人は窮しても道は通じないことはない。道と爭ふのは凶事である。故に詩に「識らず知らず、帝の則に順ふ。」と

ある。智があつても何も爲ないで無智の者と道を同じくし、能があつても何もしないで無能な者と德を同じくする。其の智は之に告げる者が來て初めて其の動く所を覺り、其の能は之を使ふ者が來て初めて其の爲す所を覺る。智あれども智なきが如く、能あれども能なきが如くであるのは道理を標準とするからである。故に功績は天下を蓋ふ程でも其の美を顯はさず、恩澤は後世に及んでも其の名を有たないのは、道理は無窮であるが人爲は滅亡するからである。名と道とは兩立しないのもので、人が名を受ければ道は用ひられず、道が人に勝てば名が息む。道と人とは長を競ふ者で、人を章にすることは道を息めることになる。人が章で道が息めば遠からずして危難が來る。故に、世に盛名があれば衰へる日が來る。名を求めようとする者は必ず善をする。善をしようとする者は必ず事を起す。事を起せば公を釋てて私に就く。術に背いて己に任ずる。善をするといふことで譽を見はし、賢であるといふことで名を立てようとすれば、治は故法に循はず、事が時に順はなくなる。治が故法に循はなければ責が多く、事が時に順はなければ功がない。責多く功なくて之を止めなければ、妄に何かして當てようと思ふ。こんなことをすれば功が成つても責を償ふに足らず、事が敗れれば、己の身を斃すことになる。善をする

ことを愼しむことが、惡をすることを愼しむ樣ならば道に近い。

天下に信ある人がなくはないが、貨財を分ける時は必ず籌を探つて分配の額を定める。公平の點に於いては、心有る者は心無き者に及ばないと思ふからである。天下に廉なる人がなくはないが、重寶を守る者は必ず戸を關して封を全くする。廉の點に於いては、欲有る者は欲無き者に及ばないと思ふからである。人が己の疵を指し示せば其の人を怨むが、鑑が己の醜を見せば鏡をほめる。人は能く物に接して己を關係させなければ累を免れる。

公孫龍は辭を弄して定說を易へ、鄧析は辯を巧にして法を亂り、蘇秦は善く說いて身を亡ぼした。其の道に由れば善でも章になることなく、其の理を修めれば巧でも名はない。故に巧を以て力を鬪はせる者は善に始つて常に惡に終り、慧を以て國を治める者は治に始まつて常に亂に終る。水を下に流すことは誰にもできるが、激して上にやることは巧なるものでなければできない。故に文が勝てば質が掩はれ、邪が巧ならば正が塞がるのである。

德は自身を修めることはできるが、人を暴にすることはできない。道は自身を脩めることはできるが、人を亂にすることはできない。聖賢の素質があつても、暴亂の世に遇はなければ、

身を全うすることはできるが覇王にはなれない。湯武が王になつたのは、桀紂の暴に遇つたからである。桀紂が湯武の賢の爲に暴になつたのではない。湯武が桀紂の暴に遭つて王になつたのである。故に、賢王でも必ず遇を待つ。遇は能く時に遭つて之を得るのである。知能が求めて成したのではない。

君子は、行を修めて善が名に立たない樣にし、布施して仁が章にならない樣にする。故に士は善を行つて善の由來を知らず、民は利が十分で利の出處を知らないから、無爲にして自ら治る。善が明らかになれば士は名を爭ひ、利の本がわかれば民は功を爭ふ。名と功との爭が起れば賢者でも治めることはできない。故に、聖人は善を行ふが人には知られない樣にし、仁を行ふが名に立たない樣にする。

外國に交つて援とし、大國に事へて安を謀るよりは、國內を治めて時を待つ方がよい。凡て人に事へるには、寶幣を用ひなければ必ず卑辭を用ひる。玉帛を用ひれば、我が貨は盡きても彼の欲は充たされない。體を屈め辭を丁寧にすれば、說諭しても交は結ばれない。約束誓盟をすれば、定つてもすぐに背く。國內の僅かな金迄も取り出して人に事へても、自ら恃む道がな

ければ、國を全くすることはできない。若し誠に外交の策を釋てて愼んで其の境內の事を修め、其の地力を盡くして其の蓄積を多くし、其の民を勵まして國難に死する心を起させ、其の城を固くし、上下君臣心を一にして與に社稷を守り、死を效して民が離れなければ、名を欲する者は罪の無い國を伐たず、利を欲する者は勝ち難い城を攻めないから、此は萬全の道である。

民は同じ道を行ひ、同じ法を守つては居るが、之を固著する義がなく、之を强制する威がないから、君を立てて民を統一するのだ。君が一の道を執れば治まる。常の道がなければ亂れる。君道は爲るのではなくて爲ないのである。爲ないといふのは、智者は位に因つて事を爲ない。勇者は位に因つて暴を爲ない。仁者は位に因つて惠を爲ない。之が爲ないのである。爲ないのは一の道を得るのである。一は萬物の本である。無敵の道である。凡て人の性は、少ければ昌狂で、壯なれば暴强で、老いれば利を好む。一人の身が既に屢〻變化する。まして君は屢〻法を易へ、國は屢〻君を易へれば、人は其の位に因つて其の好憎を行ひ、下は分れた小路に走つて行つて、遂に理めきれなくなる。故に、君が一を失へば、亂は君のない時よりも甚しい。故に、詩に「愆らず忘れず、舊法に率ひ由る。」とある。

君が智を好めば、時に背いて己に任せ、術を棄てて思慮を用ひる。天下の物は博くて智は淺い。淺を以て博を知りつくすことは誰にもできない。獨其の智に任せれば失ふことが必ず多い。故に智を好むのは窮する術だ。勇を好めば、敵を輕んじて備を簡にし、自負して援助を辭する。一人の力で强敵を禦ぎ、衆多に仗らないで專ら其の才を用ひれば、必ず堪へられない。故に勇を好むのは危くなる術だ。與へることを好めば一定の限度がなくなるから下の望が止まない。若し租稅を多くして府庫を充實すれば民と讐になる。取るのは少しで與へるのを多くすれば、數が足りない。故に與へることを好むのは怨まれる術だ。知仁勇は人の美才であるが天下を治めることはできない。此に由つて觀れば、賢能は任ずるに足らぬもので、道術は修むべき者だといふことが明らかである。

聖人は心に勝つ。衆人は欲に勝つ。君子は正氣を行ふ。小人は邪氣を行ふ。內は性を便くし、外は義に合ひ、理に循つて動き、物に繫がれないのが正氣である。滋味を重んじ、聲色に淫し、喜怒を發し、後患を顧みないのが邪氣である。邪と正とは相傷つけ、欲と性とは相害ふ。兩立しないもので、一が置かれれば他が廢する。故に聖人は欲を損して性に從事する。目は色

を好み、耳は聲を好み、口は味を好む。接して之を悅んで利害を知らないのが欲である。食官が體を寧くせず、聽官が道に合はず、視官が性を便くせず、三官が相爭ふ時に、義を以て制するのが心である。腫物を切れば痛くないことはない。毒藥を飲めば苦くないことはない。しかし、さうするのは身を安くする爲である。渴して水を飲めば快くないことはない。饑えて大食すれば腹が塞がらなくはない。しかしさうしないのは性を害ふからである。此の四つに就いては、耳目鼻口は去就を知らないから、心が之を制して、各適所を得させるのである。此に由つて觀れば、欲を勝たせてならぬことは明らかである。凡そ身を治め、性を養ひ、寢處を節し、飲食を適へ、喜怒を和らげ、動靜を便くすれば、己に在る者は其の所を得て、邪氣は生じない。病氣の發するのを憂へて豫め之に備へるよりも遙に勝れてゐる。

牛を容れる位の鼎が沸けば蠅や蚋は入らない。崑山から出た名玉が拭はれれば塵垢は汚さない。聖人は惡を去る心がなくて心に惡がなく、美を取らうとしなくて美を失はない。故に、祭祀には親を思つて福を求めない。賓を饗すれば敬を修めて德を思はなない。求めない者のみが、能く他人の求めようとするものを得るのである。

尊位に處る者は公道を行つて私說を行はないから、尊いといはれて賢いとはいはれない。大を有つ者は常術を行つて權謀を行はないから、平らかだといはれて智があるとはいはれない。內は暴事を行つて百姓から怨まれることなく、外は賢い行をして諸侯から忌まれることなく、上下の禮は相因つて離れず、評論する者は漠然として捉へ所がない。此が、無形に藏れるといふものだ。無形に藏れるのであるから誰が形を論ずることができよう。

三代の道といふのは因ることである。故に禹が江河を決したのは水に因つたのである。后稷が種を播き穀を樹ゑたのは地に因つたのである。湯武が暴亂を平らげたのは時に因つたのである。故に天下は自然に得べき者で强いて取るべき者ではない。霸王は受くべきもので求むべきものではない。智に任せれば人が之と訟へ、力に任せれば人が之と爭ふ。人を智のない樣にすることはできないが、人が其の智を己に加へない樣にすることはできる。人を力の無い樣にすることはできないが、人が其の力を己に加へない樣にすることはできる。此の兩事は常に在つて久しく見えてゐる。故に、君の賢が見えなければ諸侯が備をしない。愚が見えなければ百姓が怨まない。百姓が怨まなければ自然に民を用ひることができ、諸侯が備をしなければ天下を得る時が

自然に來る。事は衆と共同してするものであり、功は時と共に成るものであるから、聖人は之を眼中に置かないで常に無爲である。老子が「虎も其の爪を立てやうがなく、兕も其の角を觸れやうがない。」と曰つたのは此を謂ふのであらう。

鼓は聲を藏めないから能く聲を出す。鏡は形を設けないから能く形を寫す。金石は聲があつても叩かなければ鳴らず、管籥は音があつても吹かなければ聲を出さない。聖人は內に藏めて物に先だつことをしない。事が來れば之を制し、物が至れば之に應じる。

其の外を飾る者は其の內を傷る。其の情を扶ける者は其の神を害ふ。其の文を現はす者は其の質を蔽ふ。須臾も賢者となることを忘れない者は、必ず性を困しめる。百步行く中でも容貌を作ることを忘れない者は、必ず其の身を累はす。故に、羽翼の美しい者は骨骸を傷り、枝葉の美しい者は根莖を害ふ。兩方の美しい者は天下にない。

天は光を持つて居るが民の晦いことを憂へない。百姓は戶を穿ち牖をあけて自ら明を取る。地は財を持つて居るが民の貧しいことを憂へない。百姓は木を伐り草を芟つて自ら富を取る。至德の道は丘山の如き者で獨立して動かないが道行く人は目標にする。自ら萬物を生じて百姓

を贍にし百姓の爲に故意に生ずることはしない。之を用ひる者も亦恩を感じない。故に寧くして久しきに堪へる。天地は予へないから奪ひもしない。日月は恩に被せないから怨もない。恩に被せることを喜ぶ者は必ず怨が多く、予へることを喜ぶ者は必ず奪ふことを喜ぶ。唯無爲の中に姿を消して天地の自然に隨ふ者は唯能く理に任じて名を愛することをしない。名が興れば道が行はれず、道が行はれれば人は位を論じなくなる。故に、譽が生じれば毀が之に隨ひ、善が見はれれば怨が之に從ふ。利は害の始となり、福は禍の先となる。唯利を求めさへしなければ害がなく、唯福を求めさへしなければ禍がない。侯が覇を求めれば必ず其の侯を失ひ、覇が王を求めれば必ず其の覇を失ふ。國は全いのが常態で、覇王は寄生したものでる。身は生きてるのが常態で、富貴は寄生したものである。能く天下を以て其の國を傷らず、國を以て其の身を害はない者があるならば天下を託することができる。道を知らない者は有つてゐるものを釋てて、まだ得ないものを求め、苦心愁慮して私曲を行ふ。故に、福が來れば喜び、禍が來れば怖れる。精神は謀に勞れ智は事に勞れ、福禍は己から起るものであるのに、終身自ら悔いないで反つて他人を怨み、喜ばなければ憂へて居り、心中嘗て平靜なことはなく、玄德に鑑みることがないか

ら、之を狂生と謂ふのである。

人主が仁を好めば功のない者が賞せられ、罪のある者が釋される。刑を好めば功のある者が廢せられ、罪のない者が誅せらる。好むことのない者は誅しても怨まれず、施しても德とされず、規則に循つて身は事に與らず、天の覆はぬ物なく、地の載せぬ物なきが如くである。故に衆と合して舍すのは君であり、罪を制して誅するのは法である。民が誅を受けても怨まないのを道といふのである。道に任じれば人は無事である。

聖人は奇異の服を著ず、奇怪の事を行はず、服は人から視られず、行は人から觀られず、言は人から議せられず、通達しても榮華とせず、困窮しても慴伏せず、榮えても顯はれず、隱れても窮せず、異なつても怪しまれず、容して衆と和合し、何とも名狀しようがない。之を大通といふのである。

禮儀作法は已むを得ず行ふのである。性として身にあるものでないから、情は之を樂しまない。已むを得ず事を行ふので、爲ようとも止めようともしないのである。どうして故らにすることがあらう。故に、已むを得ず歌ふ者は人を悲しませようとしない。已むを得ず舞ふ者は麗し

いことを矜らうとしない。歌舞して悲麗を事としない者は皆悲麗に對して無關心なのである。

善く博突する者は勝つことを欲せず、勝てないことを恐れず、心を平らかにし意を定め、其の道に從つて之を行ふから、必ず勝つとは定らないが、必ず多く點を取る。なぜかといふに、勝は術によるので欲によるのでないからである。善く競馬をする者は一番先にならうとせず、一番後になるのを恐れず、緩急は手で加減し、心で適度に馬を御するから、必ず一番先になるとは定らないが、馬は必ず十分の力を出す。なぜかといふと、先になるのは術によるので欲によるのではないからである。それ故、欲を滅せば術が勝ち、智を棄てれば道が立つ。

商人は多くの業に手を出せば貧しく、工匠は多くの技を修めれば窮する。心が專一でないからである。故に、木の大きな者は其の枝を害し、水の大きい者は其の深さを害する。智があつても術がなければ、物を鑽つても透徹せず、百の技能があつても一の道がなければ、之を得ても守ることができない。故に、詩に「淑人君子は其の道が一である。其の道が一だから心が結ぶ如くだ。」とある。君子は一の道に結ぶのであらうか。

舜は五絃の琴を彈じ南風の詩を歌つて天下を治めた。周公は常に肴や肉を供へ常に鐘鼓を奏

して成王を輔けて天下を太平にした。匹夫が百畝の田を耕して寸暇のないのは自ら之を行ふからである。聖人が一人で天下の政を聽いて時間にも力にも餘裕があるのは人にさせるからである。尊位に居る者は尸（神の代となるもの）の如く、官吏は神官の如くである。尸は狗を剝ぎ彘を燒くことができても自ら爲ない。できなくとも差支はない。祭器の位置や供物の順序を知つてゐても教へない。知らなくとも差支はない。祭のできない者は神官にはなれないが、尸になるには差支ない。馬を御することのできない者は僕とはなれないが、主人として車に乘るには差支ない。故に、位が愈〻尊ければ身は愈〻樂であり、官が愈〻大なれば仕事は愈〻少なくなる。譬へば瑟を張るのに、小弦は急でも大弦は必ず緩い樣なものだ。

無爲は道の體である。執後は道の容である。無爲が有爲を利するのは術である。執後が先を制するのは數である。術に依れば强く、數を審にすれば寧い。今人に卞和の寶玉を與へるとする。之を受けられないのは先んずる者である。求めて之を得、怨んでも逆はれないのは後れる者である。三人が同舍して、其の中の二人が爭へば、爭ふ者は各已を直とし他の說を聽かない、他の一人は愚かでも必ず傍から之を裁決する。智がある爲ではなく、爭はない爲である。兩人

が鬪ふ時、一人の弱者が側に居て一人を助ければ勝ち、一人を救へば免れる。鬪ふ者は強くとも一人の弱者に制せられる。勇がある爲ではなく、鬪はない爲である。此に由つて觀れば、後が先を制し、靜が躁に勝つのは數である。道に背き數を棄てて苟も遇ふことを求め、常を變じ故を易へて要道を知らうとし、過てば自ら非とし、中れば道を得たしるしだと思ひ、闇行謬改して修身寤らない者は狂である。禍があれば屈し、福があれば餘利ありとし、過があれば悔い、功があれば矜つて、遂に道に反ることを知らないのを狂人と謂ふ。

員は規に中り、方は矩に中り、行けば賢善をなし、止まれば文采をなす。此は少を率ゐる道で、衆を率ゐる道ではない。蓼や菜を行列させ、瓶や甌を安定にさせ、粟を量つて舂き、米を數へて炊ぐ。此は家を治める道で、國を治める道ではない。杯を滌いで食ひ、餙を洗つて飲み、手を浣つて後に食を進める。此は家の老人を養ふ道で、三軍を饗する道ではない。易でなければ大は治められない。簡でなければ衆は合せられない。大樂は必ず易で、大禮は必ず簡だ。易だから天たるを得、簡だから地たるを得る。大樂は怨なく、大禮は責めない。四海の内に繫統しないものがないから、帝たるを得るのである。

心に憂のある者は、平らな床や柔かい席の上に居ても安くはない。菰の飯や牛の肉も甘くはない。瑟や笛も樂しくはない。患が解け憂が除けば、食も甘く寢も寧く居も安く遊も樂しい。是に由つて觀れば、生は樂しいことがあり、死は哀しいことがある。今は務めて性が樂しむことのできないものを益して、性が樂しむものを害ふ。故に、天下の富を有し天子の貴い位に居ても哀しむ人となることを免れない。凡そ人の性は恬を樂しんで憂を惡み、逸を樂しんで勞を憎む。心が常に無欲なら恬である。身が常に無事ならば逸である。心を恬に遊ばせ、身を逸に宿して天命を俟ち、自ら内に樂しんで外にあせることがなければ、天下の樣な大きな者でも其の一部にあたらず、日月が隱れても心にかけない。故に、賤しくとも貴いと同じく、貧しくとも富んだと同じである。大道は形無く、大仁は親なく、大辯は聲なく、大廉は不足を言はず、大勇は誇らない。此の五つを棄てなければ道に向ふことができるだらう。

軍に命令が多ければ亂れ、酒を飲むのに規約が多ければ言ひ爭ふ。故に始は上品だが末は下品になり、始は樂しむが末は悲しむ。始が簡ならば終は必ず和する。今美酒嘉穀を以て饗應し、體を卑くし詞を丁寧にして之に接し、共に樂しまうとするが、酒を杯に滿す滿さないを爭

つて反つて鬪を生じ、鬪つて相傷つき、親族は怨を結び、相憎むことになる。此は酒の禍である。詩の缺點は僻になることで、樂の缺點は刺ることであり、禮の缺點は責めることである。

徵の音は羽の音が出せないことはなく、羽の音は徵の音が出せないことはない。五音は皆他の音が出せるのに、徵とか羽とか名を付けるのは、それが著しいから言ふのである。故に、仁義智勇は聖人の兼有する所であるが、皆一名を立てるのは其の大きな者を言ふのである。

陽氣は東北から起つて西南に盡きる。陰氣は西南に起つて東北に盡きる。陽陰の始は皆調和して相似たものであるが、日日其の類を長じて漸く相遠ざかり、或は沙を焦がす熱さとなり、或は水を凍らせる寒さとなる。故に聖人は積む所を愼む。

水は山から出て海に入る。穀物は野に生じて廩に藏められる。始を見れば終がわかる。

席は萑や葦で造つたものを先にし、樽は玄酒を入れたのを尊び、供物の臺には生魚を先にのせ、供物を盛る器には大羹（味を調へぬ羹）を先に盛る。此は見た所もわるく、食べてもまづいが、先王が之を貴ぶのは、本を先にして末を後にするのである。

聖人は物に接して千變萬轉するが、必ず自ら化せずして化に應ずる。寒と煖とは相反する

が、大寒には水が凍つて地が析けるけれども火の熱は衰へない。大暑には金を流し石を爍かすけれども火の勢は益さない。寒暑の變が己を損益しないのは質が一定してゐるからである。

聖人は常に後れて先だたない。常に人に應じて自ら唱はない。進んで求めない。退いて讓らない。三年時に隨つてゐれば、時が去つて我が先になる。三年時を去れば、時が在つても我は後れる。聖人は去ることもなく就くこともなく、其の所に中立する。

天道は親しむ者なく唯德に與する。有道者は時と人とを失はず、無道者は時を失つて人に取る。己を直くして命を待つても、時の來るのは迎へて反すことはできない。待受けて合はうとしても、時の去るのは追つて引止めることはできない。故に、我は天下を己の仕事にしないから天下が遠ざかつたとも曰はれず、我は天下を欲しないから天下が來ないとも曰はれない。

古の己を存する者は、德を樂しんで賤を忘れる。故に名の爲に心を動かさない。道を樂しんで貧を忘れる。故に利の爲に心を動かさない。名利が天下に充ちても志を向けようとしない。故に廉にして能く樂しみ、靜にして能く贍る。故に其の身の治まる者は與に道を語ることができる。

己が生れた時から太古迄は遠いし、死んでから後も天地は窮りないから亦長い。盡きる壽命

で天下の亂を憂へるのは、猶、河水の少いのを憂へて涙で之を益さうとする樣なものだ。龜は三千年生き、蜉蝣は生れて三日で死ぬ。蜉蝣が龜の爲に養生の完備を憂ふれば人は必ず之を笑ふ。故に天下の亂を治めないで其の身の治まることを樂む者は與に道を語ることができる。

君子が善を行つても、禍が必ず來る樣にはできない。非を行はなくも、禍が來ない樣にはできない。福が來ても、其は己の求めたものではないから其の功に伐らない。禍が來ても、其は自ら生じたものではないから其の行を悔いない。身がよく修まつてゐるのに不慮の禍が來るのは皆天の所爲で、人の所爲ではない。故に、心中が常に安靜で其の德を累はされず、狗が吠えても驚かず、自ら其の情を信じる。故に、道を知る者は惑はない。命を知る者は憂へない。

萬乘の主が死ねば、骸は曠野の中に葬られ、神は明堂の上で祀られる。神は形よりも貴いのである。神が形を制すれば形が從ひ、形が神を制すれば神が窮して去る。聰明を用ひても、必ず內に其の神を守るのを太沖と謂ふ。

第十五　兵略訓

兵を用ひる方法を述べたもの

古の兵を用ひる者は土地を廣めようとか金玉を得ようとかするのではなく、亡を存し絶を繼ぎ、天下の亂を平げて萬民の害を除かうとするのである。凡て血氣のある蟲は牙を含み角を戴き爪が前にあり距が後にある。角のある者は觸れ、齒のある者は噬み、毒のある者は螫し、蹶のある者は趺り、喜べば相戲れ、怒れば相害ふのは天性である。人は衣食を得ようといふ情があるが、物は之を滿足させるだけない。故に群居雜處して分配が均しくなく、要求が滿たされなければ爭ふ。爭へば强は弱を脅かし、勇は怯を侵す。人は强い筋骨もなく利い爪牙もない。故に革を割いて甲とし、鐵を熔かして刄とする。慾の深い人が天下を殘賊すれば、萬民が騷動して安寧を失ふから、聖人が奮ひ起つて强暴を討じ、亂世を平らげ、險を平らかにし、穢を除き、濁を淸ませ、危を寧んずる。故に人類が中絶しなかつたのである。

兵の起原は古いものだ。黃帝は嘗て炎帝と戰ひ、顓頊は嘗て共工と爭ひ、黃帝は涿鹿の野で戰ひ、堯は丹水の浦で戰ひ、舜は有苗を伐ち、啓は有扈を攻めた。五帝の頃から止めることはできなかつたのだから、衰世は猶更のことだ。」一體兵は暴を禁じ亂を討ずるものだ。炎帝が火災を起したから黃帝が之を擒にし、共工が水害を起したから顓頊が之を誅したのである。道を

敎へ德で導いても聽かなければ、威武を以て之に臨む。威武を以て臨んでも從はなければ、兵革を以て之を制するのである。故に聖人が兵を用ひるのは、髮を櫛り苗を耨る樣なもので、去る所は少なくて利する所が多い。

無罪の民を殺して無義の君を養ふ程害の大きなことはなく、天下の財を彈くして一人の欲を賑はす程禍の深いことはない。夏の桀王や殷の紂王が民に害を與へるとすぐに其患を被つたならば、炮烙の刑などは行はなかつたらう。晉の厲公や、宋の康公が、一の不義を行ふと身は死し國は亡びたならば、侵奪して暴虐をするには至らなかつたらう。此の四君は皆小過があつても之を討つ者がなかつたから、天下を亂し、百姓を害し、一人の邪を肆にし、天下の禍を長ずるに至つたのだ。之は天道の取らざる所である。君を立てるのは暴を禁じ亂を討つ爲であるのに、其の君が、萬民の力に乘じて反つて殘賊を行ふならば、是は虎の爲に翼を附けてやる樣なものだから、どうして除かずにおかれよう。池の魚を畜ふ者は必ず猵獺を去り、禽獸を養ふ者は必ず豺狼を去る。人を治める者が民害を除くのは勿論のことだ。故に、覇王の兵は、論を以て之を慮り、策を以て之を圖り、義を以て之を扶ける。存する者を亡ぼすのではなくて亡びた者を存

する様にするのである。故に、敵國の君に民に暴虐を加へる者があると聞けば、兵を擧げて其の境に臨み、其の不義を責め、其の過を刺り、兵が其の郊外へ行つた時、軍隊に令して「樹木を伐るな。墳墓を抉くな。五穀を燒くな。貯藏を焚くな。民を捕虜にするな。家畜を取るな。」と曰ふ。そこで號令を出して「某國の君は天に傲り、鬼を侮り、無罪の者を獄に入れたり殺したりする。此は天の誅する所、民の仇とする所である。我が兵は不義を廢して有德に復する爲に來たのである。天の道に逆つて民の賊に從ふ者は、其の身を殺し、其の一族を滅ぼす。家を以て我に從へば、其の家に祿を與へる。里を以て我に從へば其の里を與へる。鄕を以て從へば、其の鄕に封じる。縣を以て從へば、其の縣を與へて諸侯にする。」と曰ふ。國に剋つも其の民を害せず、其の君を廢して其の政を易へ、其の秀士を尊んで其の賢良を顯はし、其の孤寡を振ひ、其の貧窮を恤み、其の牢獄の囚人を出し、其の有功者を賞するから、百姓は門を開いて之を待ち、米を漬して之を儲へ、唯來ないことを恐れる。此が湯王武王が王になつたわけであり、齊桓・晉文が覇となつたわけである。故に、君が無道を行へば、民が覇王の兵を思ふことは旱に雨を望み、渴して飲を求める樣である。誰が覇王と兵刄を交へることができよう。故に、義兵

が來れば、戰はないで戰はやんでしまふ。晩世の兵は君は無道でも、塹濠を設け堞に付いて守らないことはない。攻める者は暴を禁じ害を除くのではない。地を侵し領土を廣めようとするのである。故に、伏尸流血が前に交はつても覇王の功が世に顯はれないのは己の利の爲に戰ふからであるだ。地を得る爲に戰ふ者は王にはなれず、一身の利の爲に戰ふ者は功を立てることはできぬ。人の爲に事を起せば衆人が助ける。己の爲に事を起せば衆人がすてる。衆人から助けられれば弱くも必ず强くなる。衆人からすてられれば大きくても必ず亡びる。

兵は道を失へば弱く、道を得れば强くなる。將は道を失へば拙く、道を得れば工になる。國は道を得れば存し、道を失へば亡びる。道とは圓を體し方に法り、陰を背にし陽を抱き、柔を左にし剛を右にし、幽を履み明を載き、變化常なく、一の原を得て無方に應じるもので、是を神明と謂ふのである。圓とは天である。方とは地である。天は圓形で端がないから其の形を觀ることができない。地は方形で限がないから其の門を窺ふことができない。天は萬物を化育するが形象はわからず、地は萬物を生長させるが、計量することは出來ない。廣大で其の藏する所を知る者はない。萬物は皆朕があるが道ばかりは朕がない。朕がないのは一定の形勢がない

からである。輪轉して窮ないことは日月の運行に象る。春秋の推移るが如く、日月に晝夜がある様で、終つて復始まり、明けて復晦く、其の道を親ふことはできない。形を制して自らは無形であるから功が成るし、物を作つて自ら物とならないから勝つて屈しない。形は兵の極である。無形は極の極である。故に兵の大なる者は創傷することなくて鬼神と通じる。各種の武器を礪がなくても之に當る者は天下にない。建鼓を庫から出さなくても、諸侯が皆恐懼するのである。故に、廟戰する者は帝となり、神化する者は王となる。廟戰とは天道に法るのである。神化とは四時に法るのである。政を國內に修めて遠方が其の德を慕ひ、勝を未戰に制して諸侯が其の威に服するのは內政が治まるからである。

道を得た人は、靜なのは天地に法り、動くのは日月に順ひ、喜怒は四時に合し、叫呼は雷霆に比し、音氣は八方の風に戾らず、屈伸は五行を誤らず、鳥獸蟲魚草木等萬物百族の本から末に至るまで秩序整然として居る。それ故、小さい處へ入つても窮屈でなく、大きな處に居ても間隙がなく、金石を浸し、草木を潤し、宇中六合のどんな小さい者でも順ひ親しまぬものはない。道はどんな細かい所でも浸みこまないことはないから勝を制することが多いのである。射

は法を失へば的に中らず、驥も一鞭あてなければ千里には行かない。戰つて勝つのは戰の日に勝つのではなくて久しく無形に行つてゐるからである。故に、道を得る兵は、車を驅り出さず、馬に鞍をおかず、鼓を擊たず、旗を擴げず、甲は矢を受けず、刃は血を染めず、朝臣は位を易へず、賈人は肆(みせ)を去らず、農夫は野を離れず、義を掲げて之を責めると、大國は必ず朝し、小城は必ず下る。民の欲に因り民の力に乘じて、之が爲に殘を去り賊を除くからである。故に、利を同じくすれば共に死し、情を同じくすれば共に成し、欲を同じくすれば相助ける。道に順つて動けば天下は我の方に向ひ、民に因つて慮れば天下は我が爲に鬪ふ。獵者が禽を逐へば車が馳せ人が趍つて各其の力を盡くす。刑罰の威を借りないでも人が見張つたり取抑へたりするのは利を同じくするからである。同じ舟で江を渡つて風波に遇ふと、諸種の人が大急ぎで船を救つて左右の手の如くに働く。他に恩を施さうとするのではない。同じ憂にあつたからである。

故に、明王が兵を用ひるのは天下の爲に害を除いて萬民と共に其の利を享けるのであるから、民が用をすることは、子が父の爲にし弟が兄の爲にする様である。其の威の加はる所は山を崩し塘を決する様で、如何なる敵も當ることはできない。故に、善く兵を用ひる者は自ら進んで用

ひられる者を用ひる。兵を用ひることのできない者は己の爲に働く者を用ひる。進んで用ひられる者を用ひれば天下に用ひられない者はない。己の爲に働く者を用ひれば得る所は少ない。

兵に三の要事がある。國家を治め、境内を理め、仁義を行ひ、德惠を布き、正法を立て、邪道を塞げば、群臣は親附し、百姓は和輯し、上下心を一にし、君臣力を同じくし、諸侯は其の威に服し、四方は其の德に懷き、政を廟堂の上に修めて千里の外に折衝し、拱揖指揮して、天下が響の如くに應じる。此は用兵の上の部である。地は廣く民は衆く、主は賢に將は忠に、國は富み兵は强く、約束は信に、號令は明に、兩軍對陣して鐘鼓相望み、まだ兵刃を交へない內に敵が亡げ走る。此は次の部である。土地の便宜を知り、險隘の利益に慣れ、奇正の變化を明らかにし、隊伍を集散する方法を考察し、枹を執つて攻太鼓を擊ち、白刃が合し、流矢が接し、血を涉り、腸に續き、死者を荷ひ、傷者を扶け、血を千里に流し、屍を戰場に滿たして勝を決する。此は下の部である。今天下は皆其の末を治めることを知つて其の本を務め修めることを知らない。是は其の根を釋てて枝を樹ゑるのである。

兵には勝を佐ける者は多いが、必ず勝たせる者は少ない。甲は堅く、兵器は鋭く、車は固く、

馬は良く、貯蓄は十分で、士卒は衆多なのは軍の大資であるが、勝つことはここにはない。日月星辰の運行や、刑德奇秘の術や、背嚮左右の變を明らかにするのは戰の助であるが、全くすることはここにはない。良將が必ず勝つのは、常人にすぐれた窺知ることのできぬ智と道とを常に有つてゐるからである。賢を論じ吏を任ずることを謹しみ、動靜は其の時を得、吏卒は用を辨じ、兵甲が治まる樣にするのは司馬の官である。行二十五人組伍五人組を正し、什十人伯百人を連ね、旗鼓を明らかにするのは尉の官である。進退するに險易を知り、敵を見て難易を知り、敵情を見たり探つたりするのは侯の官である。道路は速かに、輜重は治まり、壘の尺度を均等にし、軍隊を輯睦する樣にし、井や竈を通じるのは司空の官である。軍の後に在つて物を收藏し、遷つても舍つても軍を離れず、餘りの人もなく殘りの荷物もない樣にするのは輿の官である。此の五官は將に對して身に於ける股肱手足の關係にある。必ず其の人を擇び、其の才を度り、官は其の任に勝へ、人は其の事を能くする樣にし、之に政を告げ、更に令を下し、虎豹の爪牙あり、飛鳥の六翮あるが如くにさせるならば、用をなさぬことはない。けれども皆勝を助ける道具で、必ず勝たせるものではない。

兵の勝敗は、本、政にある。政が其の民に勝つて、下が其の上に附けば兵は強い。民が其の政に勝つて下が其の上に畔けば兵は弱い。故に、德義は天下の民を懷けるに足り、事業は天下の急に當るに足り、人の登用は賢士の心を得るに足り、謀慮は強弱の勢を知るに足るならば、此は必勝の本である。地が廣く人が衆いのは強とはいはれない。堅甲利兵は勝つとはいはれない。高城深池は固めとはならない。嚴令繁刑は威力にはならない。存政を行ふ者は小さくも必ず存し、亡政を行ふ者は大きくも必ず亡びる。昔楚國は廣大の土地を有し、要害の地に據り、士卒は勇敢で甲兵は精鋭で、善く軍事上の訓練もしてあつたが、遂に敗軍の禍に遭つた。楚は强國で地も人も天下の半分をもつて居たのに、懷王は齊を畏れて國を去つて秦に行き、兵は挫け地は削られ、身は死ぬまで還ることができなかつた。秦の二世皇帝は天子であり、天下の富を有つて居たが、耳目の欲を縱にして奢侈に耽り、百姓の饑寒窮乏を顧みず、大きな工事を起し、人民を徵發して征役に從はせ、重稅を課し、百姓の捕へられて極刑を受けたり車を挽いて路で死ぬ者が一日に何千萬といふ程あつて、天下の苦は非常なもので上下吏民誰一人心を安んずる者はなかつた。此の時に戍卒の陳勝が大澤から起つて反旗を翻すと、天下は之に響應し

た。彼は粗末な武器を執つて秦の精鋭な武器に當つて忽ち數千里の土地を取つた。勢位は至賤で、器械は甚だ不利であつたが、一人唱へて天下が之に應じたのは、民の心に秦に對する怨が積つて居たからである。武王が紂を伐つた時は、東に向つて歲を迎へ、汜へ行くと水にあひ、共頭山迄行くと山が崩れ、彗星が出て殷の方に柄があつて周を掃ふ樣に見えた。戰ふ時になると十個の日が上に亂れ、風雨が中を擊つた。而も進んで難を侵しても賞與はなく、退いて遁げても刑罰はなく、白刃を畢く拔かないで天下を得た。故に、善く守る者は禦がず、善く戰ふ者は鬪はぬ。禁ずると舍すと開くと塞ぐとの道を明かにし、時勢に乘じ民欲に因つて天下を取るのである。故に、善く政をなす者は其の德を積み、善く兵を用ひる者は其の怒を畜へる。德が積めば民が用ひられる。怒が畜へられれば威が立つ。故に文の加はる所が淺ければ勢の勝つ所は小さく、德の施す所が博ければ威の制する所は廣く、從つて我は强く敵は弱い。故に善く兵を用ひる者は先づ敵を弱めて後に戰ふ。故に費用は半にも及ばないで功は倍する。湯王が七十里の地を以て王となつたのは德を修めたからだ。智伯が千里の地を有して亡びたのは武力を窮めたからだ。故に、千乘の國でも文德を行へば王となり、萬乘の國でも好んで兵を用ひれば亡び

る。故に、全兵は先づ勝つて後に戰ふ。敗兵は先づ戰つて後に勝を求める。德が同一ならば衆は寡に勝つ。力が匹敵すれば智者は愚者に勝つ。勢が等しければ術ある者は術なき者を擒にする。

凡そ兵を用ひる者は必ず先づ自ら廟戰する。主は孰れが賢か、物は孰れが能か、民は孰れが懷くか、國は孰れが治るか、蓄積は孰れが多いか、士卒は孰れが精か、甲兵は孰れが利か、器備は孰れが便かを考察する。故に籌を廟堂の上に運らして勝を里の外に決するのである。

形態のある者は天下一般に之を見る。書籍のある者は世人が之を傳學する。此は皆形を以て相勝つのである。形を善くする者は法に從はない。道に於て貴ぶ所は、其の形のないのを貴ぶのである。形がなければ、制迫することもできず、度量することもできず、巧詐することもできず、規慮することもできぬ。智が見はれれば人が謀を運らし、形が見はれれば人が功を立て、兵衆が見はれれば人が伏を設け、器が見はれれば人が備をする。己の一擧一動が他人の巧詐を招く樣なのは皆善なる者ではない。善なる者の動くのは、神の出で鬼の行き星の輝き天の運るが如くで、進退屈伸に兆候もなく際限もなく、鷙の擧り鷘の振ひ鳳の飛び龍の騰るが如く、猋風の樣に發り、駭電の樣に疾い。生を以て死を擊ち、盛を以て衰に乘じ、疾を以て遲を

掩ひ、飽を以て饑を制するから、水で火を滅し、湯を雪に沃ぐが如くで何處へ行つても成功しないことはない。中に於いては神を虛にし、外に於いては志を漠にし、無形を運り、不意に出で、往來出入が迅速で、何處へ之くのか何處に集まるのかわからない。急なことは雷霆の如く、疾いことは疾風の如く、地から出る如く、天から下る如く、獨り出で獨り入り、能く之に應じて禦ぐものはない。疾いこと鏃矢の如くだから之と並ぶことは出來ない。或は晦く或は明るくなるから其の端緒がわからない。まだ其の出發を見ないのに、已に行つてゐる。故に、善く兵を用ひるものは敵の虛を見たら、之に乘じて假さない。追つて舍さない。追つて去らない。其の猶豫疑惑してるのを擊つて疾雷の耳を塞ぐ暇なき如く、疾霆の目を掩ふ暇なき如く、目に物が入つて撫でる間もなく、息を呼いて吸ふ間もない程に急速である。此の時に當つては、仰いでも天を見ず、俯しても地を見ず、手は戈を揮はず、兵器は盡くは拔かず、雷の如くに擊ち、風の如くに薄り、火の如くに燒き、波の如くに侵し、靜かな時には其の守る所がわからず、動く時には其の爲る所がわからない。故に鼓が鳴り旗が麾けば、敵が敗れ崩れないことはない。天下に誰が威を勵まし節を抗げて其の前に當る者があらう。故に、人を凌ぐ者は勝ち、

人を待つ者は敗れ、人に擊たれる者は死ぬ。

兵は靜ならば固く、專一ならば威があり、部署が決すれば勇があり、心が疑へば北(に)げ、力が分れれば弱い。故に、能く人の兵を分ち人の心を疑はせれば、僅な兵で餘があり、人の兵を分ち人の心を疑はせることができなければ、數倍しても足りない。故に、紂の卒は百萬の心に分れ、武王の卒三千人は皆專一であつた。故に、千人が心を同じくすれば千人の力を得、萬人が心を異にすれば一人の用も出來ない。將卒吏民の動靜が我が身の樣ならば、敵に應じて合戰してよい。故に、計が定まつて發し、部署が決して動き、將に疑謀なく、卒に二心なく、動くのに惰容なく、口に虛言なく、事は試に行ふことなく、敵に應ずれば必ず敏に、發動すれば必ず亟(すみやか)である。故に、將は民を體とし、民は將を心とする。心が誠ならば支體は親しみ、心が疑へば支體は背く。心が專一でなければ體は動を節せず、將に誠心がなければ卒は勇敢でない。故に良將の卒は虎の牙の如く、兕の角の如く、鳥の羽の如く、蚿の足の如くで、行くことも擧げることも嗤むことも突くこともでき、强くても相敗らず、衆くても相害さない。心を一にして之を使ふからである。故に、民が誠に其の令に從へば少なくても畏れはない。民が令に從はなければ衆

も寡となる。故に、下が上に親しまなければ用ひることはできぬ。卒が將を畏れなければ戰はできぬ。守りが必ず固くできれば攻めて必ず勝つことができる。兵刃を交へないでも存亡の機は已に形(あらは)れて居る。

兵には三勢と二權とがある。三勢とは氣勢と地勢と因勢とをいふ。將は勇に充ちて敵を輕んじ、卒は果敢で戰を樂しみ、三軍の衆百萬の師の志は靑雲を凌ぎ、氣は飄風の如く、聲は雷霆の如く、誠は積んで遠くに及び、威は敵人に加はる。此を氣勢と謂ふ。狹路、津關、大山、名塞、龍蛇が蟠る樣な場所、笠を偃せた樣な場所、一屈一伸した道、入れば出られない門などは、一人が隘(せま)い處を守れば千人も過ぎようとはしない。此を地勢と謂ふ。其の勞倦怠亂飢渴凍熱に因つて、其の仆れようとするのを推し、其の拔けようとするのを擠(おと)す。此を因勢と謂ふ。二權とは知權と事權とをいふ。善く間諜を用ひ、審に規慮を交へ、草木の繁みに伏兵を置き、其の形を隱して不意に出れば、敵兵は之に備へることはできない。此を知權と謂ふ。陣卒は正しく、先鋒は選び、進退は俱にし、隊伍は搏ち、前後は相踏まず、左右は相干さず、刃を受ける者は少なく、敵を傷ける者は多い。此を事權と謂ふ。權と勢とが必ず形はれ、吏卒が專

精であり、良を選び才を用ひて官は其の人を得、計定まり謀決して死生に明らかに、擧錯時を得て、敵が振驚しないことはない。故に、攻めれば攻城の車や觀望する梯を用ひないで城が拔け、戰へば兵を交へ刄を接するに至らないで敵が破れる。必勝の術を明らかにしてゐるからである。故に、兵は必ず勝つとは定らないから、苟も刄を交へず、攻めれば必ず取るとは限らないから、苟も發せず、勝算が定まつて後に戰ひ、鈴が懸けられて後に動き、兵衆が衆まれば必ず何かする。出れば徒手では歸らない。唯一も動くことはないが、動けば天を凌ぎ、地を振ひ、泰山を抗げ、四海を蕩かし、鬼神は移徙し、鳥獸は驚駭する。此の樣ならば野には兵を交へるものがなく、國には城を守るものがない。

靜を以て躁に當り、治を以て亂と對持し、無形を以て有形を制し、無爲を以て變に應じることは、敵に勝つことはできなくとも、敵から負かされない道である。敵が我に先つて動けば其の形が見はれる。敵が躁いでも我は靜にしてゐれば其の力が罷れる。形が見はれれば勝を制することができ、力が罷れれば威を立てることができる。敵の爲す所を視て之と與に化し、敵の邪正を觀て其の命を制し、敵の欲する所を餌にして其の足を罷らせる。敵に間隙があれば急に

之を塡め、其の變化を極めて之を束ね、其の節を盡くして之を斃す。敵が若し靜に返れば、之が爲に奇を出す。敵が吾に應じなければ、吾は獨り其の調を盡くす。若し動いて應じれば爲る所がわかる。敵が後から動かうとするならば之と推移る。一方に積む所があれば必ず他に虧けた所があるから、敵の精力が東に轉じれば其の西を陷れることができる。敵が潰えて走れば、必ず其の後へ移るがよい。敵が、迫つても動かないのを奄遲といふ。之を擊つこと雷霆の如く、之を斬ること草木の如く、之を燿かすこと火電の如く、疾速でありたい。敵の兵卒は步く暇もなく、兵車は動く暇もなく、武器はあつても役に立たないから、人が如何に多く居ても我に抵抗することはできない。」有象の者は皆勝つことができ、有形の者は皆應じることができる。それ故、聖人は形を無に藏して心を虛に游ばせる。風雨は避けられるが寒暑は避けられないのは無形だからである。能く滑澤精微で、金石を貫き、至遠を窮め、九天の上に至り、黃泉の下に蟠るのは、唯無形なる者のみである。

善く兵を用ひる者は敵の亂れたのを擊つて敵の治まつてゐるのを攻めない。正正堂堂として居る敵は擊たない。敵の樣子がわからなければ、謀を以て相對持し、敵に死形があれば之を制す

る。敵が謀を執れば、己は動いて陰に就く。虚を以て實に應じれば、必ず之を擒にする。虎豹は動かなければ陷阱に入らず、麋鹿は動かなければ罝罘に離らず、飛鳥は動かなければ網羅に絓らず、魚鼈は動かなければ唇喙を釣針で貫かれることはない。何物も動かないで制せられる者はない。夫故、聖人は靜を貴ぶ。靜ならば能く躁に應じ、後れれば能く先に應じ、密ならば能く疎に勝ち、博ければ能く缺を擒にする。故に、良將が兵卒を用ひるのには、其の心を同じくし、其の力を一にし、勇者も獨進むことを得ず、怯者も獨退くことを得ず、止まれば丘山の如く、發すれば風雨の如く、凌ぐ所は必ず破れて氣勢を摧かれないものはなく、動けば一體の如くで之を禦ぐものはない。それ故、敵を傷けることは多くて親ら戰ふ者は少ない。五本の指で交代に彈くよりは一個の拳で打つ方が效果があり、萬人が交代に進むよりは百人が同時に行く方が效果がある。虎豹は敏捷で熊羆は多力だけれども、人から其の肉を食はれ其の革を敷かれるのは、彼等は其の智を通じ其の力を一にすることができないからである。水は火に勝つけれども、高樓の燒ける時柄杓で沃いだのでは井や池の水を殘らず使つても、如何することもできないが、樽や壺の様な大きい物で水をかければ、直に消すことができる。今、人は他人に對して水

が火に對する様に勝つことはできない。少を以て衆に敵しても功を成すことができないのは明らかである。兵家は少は衆に敵することができると曰ふかもしれないが、此は將ゐる兵を言ふので戰ふ兵ふ言ふのではない。將ゐる兵が衆くて、用ひる兵が寡いのは力を同じくしないからである。將ゐる兵が衆いのは力を同じくするからである。若し人が盡く其の才や力を用ひる場合に少を以て衆に勝つた例は古から今まで聞いたことはない。

神は天より貴い者はなく、勢は地より便な者はなく、動は時より急なものはなく、用は人より利な者はない。此の四つは兵の根本である。然し、必ず道を待つて行つて始めて役に立つのである。地の利は天の時に勝ち、巧に戰へば地の利に勝ち、勢は人に勝つ。故に、天に任ずる者は迷はすことができる。地に任ずる者は拘束することができる。時に任ずる者は迫ることができる。人に任ずる者は惑はすことができる。

仁・勇・信・廉の四は人の美才である。けれども、勇者は誘ふことができる。仁者は奪ふことができる。信者は欺き易い。廉者は謀り易い。衆を將ゐる者が此の一つでも見はせば人の擒となる。此に由て觀れば、兵は道理を以て勝を制するので人才の賢によらないことは明らかで

ある。故に、敵が麋鹿であるならば置罘を設ける。魚鼈ならば網罟で取る。鴻鵠ならば矰繳を加へる。唯無形なものは如何ともすることができない。それ故、聖人は無原に藏れるから、其の情を觀ることはできない。無形を運るから其の陣を度ることはできない。法もなく則もなく、何か來れば之に應じて宜しい處置をし、名もなく狀もなく、物が變れば之に應じて象をあらはす。深く、遠く、四時に亙り、上は至高の末を窮め、下は至深の底を測り、變化生滅して凝滯する所なく、心を窈冥の野に建て、志を九旋の淵に藏す。それ故、どんな明らかな目でも其の情を覩ふことはできない。

兵の隱議するのは天道である。圖畫するのは地形である。明言するのは人事である。勝を決するのは權勢である。故に、上將が兵を用ひるのは、上は天道を得、下は地利を得、中は人心を得、機を以て之を行ひ、勢を以て之を發する。それ故、軍に敗けることがない。中將になると、上は天道を知らず、下は地利を知らず、專ら人と勢とを用ひる。必ずしも萬全は得られないが、勝算は必ず多い。下將が兵を用ひるのは、博く聞いて自ら亂し、多く知つて自ら疑ひ、居れば恐懼し、發するのに猶豫する。それ故、動けば人の擒となるのである。

今、兩人に斬合をさせると、巧拙は同一でも、勇士が必ず勝つのは、之を行ふのに誠があるからである。大斧で桐薪を擊てば、良い日を待たないでも直に破れるが、大斧を唯桐薪の上に載せただけでは、どんな良い日にあつても破ることはできない。破る勢がないからである。故に、水が激すると悍く、矢が激すると遠くへ行く。淇衞から出る美竹に弓括を附け、銀や錫で之を飾つても、それだけでは薄絹の幕や腐荷の楯でも穿つことはできない。之に筋角の力と弓弩の勢を假せば、厚い革の甲や盾を貫くことができる。風が疾く吹けば、屋を飛ばし、木を折る。馬の附いてない車が高丘に上るのは人が推すからである。それ故、善く兵を用ひる者は其の勢は千仞の隄を破つて積水を流す樣であり、圓い石を萬丈の谿に轉ばす樣である。天下が吾が兵の必ず用ひられることを見るならば、誰が進んで我と戰はう。故に、百人の必死は萬人の必北に賢る。況して三軍の衆が水火に赴いても踵を還さないなら猶更のことである。卒然に天下の人と刄を交へても我に勝つことはなからう。

所謂天數とは左に青龍(角亢)右に白虎(參井)前に朱雀(星張)後に玄武(牛斗)があることである。所謂地利とは、後に生(高)、前に死(下)、左に牡(陵丘)右に牝(谿谷)があることである。所謂人事とは慶

賞は信あり、刑罰は必ずし、動靜は時あり、擧錯は疾いことである。此は世〻傳へて儀表とする者であることは勿論である。けれども、儀表を生ずるものではなくて時に由つて變化するものである。それ故、屋內に引込んで居て日月の順序が知られ、瓶中の氷を見て天下の寒暑が知られるのである。物の形はれるのは微妙なものであるが、唯聖人のみは其の至理に通じてゐる。故に、鼓は五音に關係なくて五音の主となり、水は五味に關係なくて、五味を調和させる。將軍は五官の事に關係なくて五官の督となる。故に、能く五音を調へる者は五音に關係ない者であり、能く五味を調へる者は五味に關係ない者であり、能く五官の事を治める者は度ることのできない者である。それ故、將軍の心は、流動すること春の如く、明らかなること夏の如く、澄み渡ること秋の如く、堅く凝ること冬の如く、形に因つて之と化し、時に隨つて之と移る。影が曲つた物を直くせず、響が淸んだ音を濁らせはしない樣に、彼の來るのを觀て、之に應じて勝を制する。それ故、義を扶けて動き、理を推して行ひ、節制に從つて裁斷し、資に因つて功を成す。彼に吾が出る所を知つても入る所を知られない樣にし、吾が擧げる所を知つても集る所を知られない樣にする。始は狐狸の如くであるから、彼は輕輕しくやつて來る。接戰す

れば兕虎の如くであるから、敵は奔走する。飛鳥が搏つ時は其の首を俛せ、猛獸が攫む時は其の爪を匿す。虎豹は其の爪を出さず、噬まうとすれば齒を見せない。故に用兵の道は柔を示して剛で迎へ、弱を示して强で應じ、西へ行かうとすれば東へ行くように見せかけ、先には忤らつて後には合ひ、前には冥くて後には明らかで、鬼が迹を殘さない樣であり、水が創つかない樣である。故に、向ふ所は往く所ではなく、見る所は謀る所ではなく、擧錯動靜を識る者がないのである。雷の擊つ樣で備をすることはできず、一度したことは再繰返さない。故に勝は萬全であり、玄明なる至道と通じて其の出入する所を知る者がない。是を至神と謂ふ。

兵が强くなるのは民によるのである。民が必死になるのは義によるのである。義が能く行はれるのは威によるのである。それ故、文で之を合はせ、武で之を齊へるのを必取と謂ひ、威と義とが並び行はれるのを至强と謂ふ。人は生を樂しみ死を惡むのに、或は矢石が雨の樣に下る高城深池に於て、或は白刃の交接する平原廣澤に於て、士卒が先を爭つて合戰するのは、彼等が死を輕んじて傷を樂しむ爲ではなく、賞が信で罰が明らかな爲である。それ故、上が下を子の樣に思へば下は上を父の樣に思ふ。上が下を弟の樣に思へば下は上を兄の樣に思ふ。上が下

を子の様に思へば必ず四海の王となる。下が上を父の様に思へば必ず天下を正す。上が下を弟の様に思へば之が爲に死ぬことを厭はない。下が上を兄の様に思へば之が爲に亡びることを厭はない。それ故、父子兄弟の寇とは戰ができないのは、積恩を先づ施してあるからである。故に四馬が調はなければ造父（巧な御者）でも車を遠くへ驅ることはできない。弓矢が調はなければ羿（弓の名人）でも必ず中てることはできない。君臣の心が乖離すれば孫子（軍の名人）でも敵に應じることはできない。それ故、内は其の政を修めて其の德を積み、外は其の醜を塞いで其の威に服させ、其の勞佚を察して其の飽饑を知る。故に戰ふ日が定れば民は喜んで死地に就かうとするのである。故に將は必ず卒と甘苦飢寒を共にすれば民に死力を盡くさせることができる。故に、古の善く兵に將たる者は、必ず身を以て之に先んじる。暑くも蓋を張らず、寒くも裘を被ない。寒暑を量る爲である。險阻な處は車に乘らず、丘陵に上れば必ず車を下る。勞佚を齊しくする爲である。一軍の食が煮えてから食ひ、一軍の井が通じてから飲む。民と饑渴を共にするのである。合戰すれば必ず矢石の及ぶ所に立つ。安危を共にするのである。故に、良將が兵を用ひるのは、常に積德を以て積怨を擊ち、積愛を以て積憎を擊つのだから、必ず勝つ。

人主が民に求める者が二つある。民が己の爲に勞することと、民が己の爲に死ぬことである。民が人主に望む者が三つある。饑える者に食を與へることと、勞する者に休息を與へることと、有功の者に恩德を與へることとである。民が上の二つの求めを滿たしてゐるのに、上が民の三つの望を與へなければ、國は大きくとも、人は衆くとも、兵はなほ弱い。若し、苦しむ者は必ず其の樂を得、勞する者は必ず其の利を得、斬首の功ある者は必ず其の生を全くし、軍で死んだ者は必ず其の子孫を賞し、此の四つが民に信ぜられて居るならば、人主は獵をしたり釣をしたり音樂をしたり博奕や投壺などの遊戲をして居ても、兵は猶强く、令は猶行はれる。それ故、上が仰ぐに足れば下は用ひられ、德が慕ふに足れば威が立つのである。

將たる者には、必ず、三隧・四義・五行・十守がある。三隧といふのは、上は天道を知り、下は地形を習ひ、中は人情を察することである。四義といのは、國の便を主として兵の數を量らず、主の爲に盡くして己の身を顧みず、難を見ても死を畏れず、疑を決して罪を避けないことである。五行といふのは、柔くて卷かれず、剛くて折られず、仁であつて犯されず、信であつて欺かれず、勇であつて凌がれないことである。十守といふのは、神が清んで濁されず、謀が

遠くに及んで篡はれず、操が固くて遷されず、知が明らかで蔽はれず、貨を貪らず、物に淫せず、辯を濫りにせず、方を推さず、喜ばされず、怒らされないことである。是を至精と謂ふ。窈窈冥冥として、誰も其の情を知る者はない。發すれば必ず度に中り、言へば必ず數に合し、動けば必ず時に合し、解けば必ず理に中り、動靜の機に通じ、開塞の節を明らかにし、擧錯の利害を審らかにして符節を合するが如く、疾きこと弩を張るが如く、勢は矢を發するが如く、龍となり蛇となつて動くのに常體がなく、其の中る所も見えず、其の窮まる所も知らず、攻めれば敵は守ることができず、守れば敵は攻めることができない。

聞く所に據れば、善く兵を用ひる者は必ず先づ之を己に修めて後に之を人に求め、先づ敵に勝たれない樣にしておいて後に敵に勝つことを求めるのである。若し之に反して、人に己を修めさせて敵に勝つことを求め、己はまだ治められないのに人の亂を攻めるならば、丁度火を以て火を救ひ、水を以て水に應じる樣なものだ。どうして制することができよう。今、陶人が化して陶土となれば陶器を造ることはできず、工女が變じて絲となつたら、文錦を織ることはできない。同じものは相治めることはできないのである。故に異なるものを奇とする。二匹の雀

が與に鬪つても死ぬことはない。鵲(はやぶさ)や鷹(たか)が來れば鬪が解ける。類が異なるからである。故に、靜は躁の奇であり、治は亂の奇であり、飽は饑の奇であり、佚は勞の奇である。奇と正との相應じることは水火木金の代る代る雌雄となる樣なものだ。

善く兵を用ひる者は五殺を持して應じるから、能く其の勝を全くする。拙い者は五死に處て貪るから、動けば人に擒へられる。兵は、謀が測られず、形が隱匿し、不意に出て、敵が備を設けることのできないのを貴ぶ。謀が見はれれば窮し、形が見はれれば制せられる。故に善く兵を用ひる者は上は之を天に隱し、下は之を地に隱し、中は之を人に隱す、天に隱せば制さないものはない。天に隱すと謂ふのは、大寒・甚暑・疾風・暴雨・大霧・冥晦等に因つて變化するのである。地に隱すと謂ふのは、山陵・丘阜・林叢・險阻等に伏匿し形を見はさないのである。人に隱すと謂ふのは、前に蔽ひ、後に望み、奇を行陣の間に出し、雷霆の如くに發し、風雨の如くに疾く、巨旗を取り、鳴鼓を止めて、出入其の形を見はさず、敵が其の端緒を知ることができないのである。故に、前後は正齊で、四方は繩の如く、出入解續するに相越凌することなく、左右の翼は輕くて、邊は利く、前進後退離合聚散して隊伍を失はないのは善く行陣を修める者であ